

# 主イエスの譬え

## 目次

序言…… 譬えの定義、 譬えの教訓、 譬えの解明

## 譬え

- 一、 主は俗語を引用して譬えと為す
- 二、 「医者と病人」の譬え
- 三、 「婚礼の客」の譬え
- 四、 新旧合わせ難いことの譬え
  - (一) 新しい布で古い衣服を縫う
  - (二) 新しいぶどう酒を古い皮袋に入れる
- 五、 地の塩、塩のききめがない
- 六、 世の光、山の上の町
- 七、 あかりと枿の譬え
- 八、 からだのあかり
- 九、 盲人の道案内、弟子とその師
- 十、 目の中にある梁
- 十一、 聖なるものと犬、真珠と豚
- 十二、 子供がパンを求める譬え
- 十三、 樹と実
- 十四、 二人の家造りの譬え
- 十五、 子供の遊び
- 十六、 二人の負債者の譬え
- 十七、 分裂した国と家庭
- 十八、 強い人を縛る譬え
- 十九、 空き家の譬え
- 二十、 種まきの譬え
- 二十一、 毒麦の譬え
- 二十二、 からし種の譬え
- 二十三、 パン種の譬え
- 二十四、 宝を隠す譬え
- 二十五、 真珠を捜す譬え
- 二十六、 網を下ろす譬え
- 二十七、 種が成長する譬え

- 二十八、一家の主人の譬え
- 二十九、「収穫と働き人」の譬え
- 三十、「良きサマリヤ人」の譬え
- 三十一、パンを借りる譬え
- 三十二、「愚かな金持ち」の譬え
- 三十三、「目を覚ましている僕」の譬え
- 三十四、「忠実な僕」の譬え
- 三十五、「気候兆候」の譬え
- 三十六、「被告」の譬え
- 三十七、実を結ばないいちじくの木
- 三十八、客の譬えを用いた教訓
- 三十九、主人の譬えを用いた教訓
- 四十、盛大な晩餐会の譬え
- 四十一、邸宅を建てる譬え
- 四十二、「戦う王」の譬え
- 四十三、いなくなった羊の譬え
- 四十四、失くした銀貨の譬え
- 四十五、放蕩息子の譬え
- 四十六、「不正な管理人」の譬え
- 四十七、「金持ちとラザロ」の譬え
- 四十八、「ふつつかな僕」の譬え
- 四十九、「切に求めるやもめ」の譬え
- 五十、「パリサイ人と取税人」の譬え
- 五十一、「憐れみのない僕」の譬え
- 五十二、ぶどう園の譬え
- 五十三、十ミナの譬え
- 五十四、二人の子の譬え
- 五十五、「凶悪な農夫」の譬え
- 五十六、隅のかしら石の譬え
- 五十七、「王子の婚宴」の譬え
- 五十八、いちじくの木 of 譬え
- 五十九、盗賊の譬え
- 六十、家の僕の譬え
- 六十一、十人のおとめの譬え
- 六十二、財産をあずける譬え
- 六十三、羊をより分ける譬え

# 主イエスの譬え

## 序言

### 譬えの定義

主イエスがこの世で伝道をなされた初期から常に譬えを用いて使徒と民衆達に教えられた（マタ 13 : 3～；マル 3 : 23～；ルカ 6 : 39～）。時には譬えのみで御言を語られたり（マタ 13 : 3、34；マル 4 : 2、33）、或いは譬えによらないでは語られなかったりした（マル 4 : 34）。「譬え（parables）」とは、ギリシャ原文の字義によれば、「並置」或いは「比較」、「類推」とある。日常の経験からあれをもってこれの譬えとする。即ち、真理を容易に理解するために、又、深い印象を残すために有利な事であり、人を感化する為の良い方法でもある。特に当時主に従った群衆たちの多くは庶民階級であり、彼らが主の語られた奥深い真理を分かりやすくするために、この方法を多く用いられた。日常生活における周囲の事柄を題材とし、真意を深く理解させるためでもある。時には主イエスが聖なるものを犬や豚にやらないゆえ、群衆には譬えで語られた（マタ 13 : 11、13；7 : 6）。「地上にある一つの物語が、天の上にある意義を含む」とは「譬え」について最も適した定義であろう。

### 一、譬えと物語

譬えは主に天に属する霊的な真理を表すのに対して、物語はたとえ大きな価値があっても、主にただ地上の真理を表すだけである。ゆえに、物語の目的は勤勉、謹慎、深慮などに偏った予防や自衛の道德教育である。言い換えれば、物語の中で教える道德は、世の人が理解し、賛成する最高峰のものに限られる。しかし、聖書は人々に神から授かった永遠の命を享受させると同時に人の心の教育の為であることを自覚させるのを目的とする。

### 二、譬えと伝説

伝説には「神話」が含まれて、真理のうわべとその中身が混在しているが、この二つを分別できたのは思想発達後の時代であった。故に、伝説の始まった時代、或いは人々が無条件にそれを信じた時代には、それらを分別できるすべもなかった。したがって伝説の物語は、真理のうわべであると同時に真理の中身でもあると言えるであろう。しかしながら、譬えと伝説とは異なるものである。なぜなら譬えは始めからその中身には既に形と性質、包装と内容、高価な器と更に高価なぶどう酒が器の中に溢れる等が含まれて、その違いが判然として分別出来る。

### 三、譬えと俗語

譬えと俗語の違いについては、新約聖書の中において、二者を異語同義の例として使った

りすることもある。例えばルカ四章二十三節に「医者よ、自分自身をいやせ」とあるが、これは原文では譬えとなっているが、口語訳聖書では俗語として訳されている。又、ルカ五章三十六節も同様である（参考：サム上24：13；歴代下7：20；詩44：14）。逆に、ヨハネの福音書では俗語とされたが、むしろ譬えに近い。実際には寓話といった方が合っている。例えばキリストはご自身と民たちの関係を羊飼いと羊に譬えられたが、原文では俗語とされている（参考：ヨハ10：6；16：25、29）。

#### 四、譬えと寓話

譬えと寓話の違いは、性質上、むしろ構造上の差異と言ったほうがよい。例えば、「私は真のぶどうの木、…」（ヨハ15：1～8）は寓話である。又、ヨハネの福音書十章一節～十六節の中で、区別し難い寓話が二つある。一つは「私は羊の門である」、もう一つは「わたしはよい羊飼である」。それゆえに、「見よ、神の小羊である」とは寓話の性質をもっているが、「彼は、ほふり場に引かれて行く小羊のように」とは譬えの性質をもっている。なぜなら寓話自身に説明が含まれており、譬えのように説明を加える必要がないからである。しかし、「死体のあるところには、はげたかが集まるものである」はイエスの口から出た言葉であると同時に俗語でもある。且つそれに説明も付け加えていない為その意味もはっきりしない。故に聖書解説において多くの異なった意見や異説を引き起こしてしまう。

したがって譬えとは：

- (一) 心を中心にして、「萬有」の原則を破壊しない点において物語とは違う。
- (二) 外面の事柄とその中に隠れた意義とを混同せず、また二者の間には区別が判然としている点において伝説とは違う。
- (三) 俗語よりも詳しく、いかなる場合においても比較があるという点において俗語とは異なっている。
- (四) 互いに比較する時、内外がはっきりと分別され、一方の特性と関係を他方へ転移しない点において寓話とは違う所である。

#### 譬えの教訓

主イエスは群衆の中で、真理を受けるに適さない人がいる事を知り、彼らに真理を悟らせるために、譬えを用いる事もある。しかし、イエスの譬えを用いたの教訓の一般的な目的は、人々が譬えを用いて人を教訓するという目的と同様である。主が示され、その真理に説明を加え、並びに証左することの目的はその意味を更に明瞭にする事である。なぜなら、譬えは自然界の物事と心の真理を比較するので、説明や証左を必要とする。詳しく言えば、このような譬えは、心の真理が人を助けて理解させ、そして理解のできた人は、真理の妙趣を悟るに至らせる助けとなる。すべて真理を愛する人は、この二者の間にある奥深さと調和を認識することが出来、またその中から出る証左も承認できる。彼らから見れば、地上の物事は天上の物事の写しである。彼らは地上の幕屋が山の上で示された型に従

って造られた物である事を知っている（出エジ25：40；歴代上28：11、12）。故に譬えは、必ず型とその型で示される物の二者によって成り立つのである。例えば、キリストと教会との奥深い関係を表す為に夫婦の密接な関係が用いられた（エペ5：23～32）。これは単なる偶然類似した二つの事を対照して良き一対となったのではなく、その奥には更に深い意義がある。即ち、地上の夫婦関係は不完全なものではあるが、天上の夫婦（キリストと教会の関係を表す）では、前者が後者を以って基礎とし、且つ後者を顕彰するためである。

聖書の中にあるこのような譬えは、偶然によって符合した物事を題材にするのではなく、神によって預表された一種の様式である。なぜなら神の啓示には二種類あるからである。一つは言葉による啓示、つまり「聖書」を指す。もう一つは比較的古い方法を使った啓示で、それは形ある「この世界」である。しかし前者は後者の外見を借りなければ、啓示する事は出来ない。この形ある世界は、君臣、親子、日月、春秋、明暗、起臥、生死などがあり、常に形なき真理を啓示する為の力ある譬えと教訓になって、且つ直接的に私達の信仰と知識を増進させるものである。

### 譬えの解明

譬えは一つの箱に似ている。その箱は精巧な手工によって彫られた物だけではなく、中には更に高価な宝石が隠されている。また、果実を以って譬えられる。果皮が綺麗だけではなく、中に含まれる果肉や果汁も美味しいのである。もし、箱の中にある宝石を得ようとするならば、先ず金の鍵を見つけなければならない。また、果実の美味しさを味わいたいならば、その果皮を剥かなければならない。同様に、譬えに解明を加えることも必要であろう。この事を探求する前に、他の角度からその疑問点を見ることも必要がある。譬えの意義について何処から調べればよいのかという点についても、解明する際即時に提起すべきである。

主イエスが最初に話された二つの譬え、「種まきの譬え」と「毒麦の譬え」には、主ご自身の模範解答があり、今後他の譬えを解釈する時の良い基準とならせた。また、最も良い解明だと言えるであろう。なぜなら、ただ完璧であるだけではなく、すべて主の譬えを解明する原則となるのである。主が極めて細かい部分を解明する時には、殆ど靈的な意義を応用された。例えば「道ばたに落ちた『種』があった。すると、鳥がきて食べてしまった」。主は解釈して言われた、「悪い者がきて、その人の心に『まかれたもの』を奪い取って行く」（マタ13：19）。また、ルカの福音書八章十二節では「信じることも救われることもないように」と一句加えられた。それは彼らが引っ張られて地獄に行き、滅びの仲間となる為である。また、「いばらの間に落ちたので、いばらも一緒に茂ってきて、それをふさいでしまった」についても、主自ら解釈して言われた、「世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさいだ」（マタ13：22）。

この他にも譬えを解明するための必須の法則がある。この法則は平易なものであるが故

に軽視さえしなければ、特にこれを提起する必要もない。それは物語を解釈すると同様に、譬えにも序文と結語がある故、これに注意して解明する必要があるということである。この二つは常に意義の方向を示す指針となり、また、譬えの全容を明らかにする重要な鍵となる。例えば「ぶどう園の譬え」を解明するにあたって、その序文と結語に注目し、また解明される前後文に必ず和合があると認めていけば変な解明も生じないであろう。解明指針が欠けている譬えはないばかりか、必ず欠けているという譬えも見ないであろう。時に、主ご自身がそれを補足する。例えばマタイの福音書二十二章十四節から二十五章十三節まで、また、聖霊に感動された福音書の作者が加筆したものもある（ルカ 15 : 1, 2 ; 18 : 1）。ある時は、譬えの序文を以って（ルカ 18 : 9 ; 19 : 11）、また、譬えの結語を以って記述されたものもある（マタ 25 : 13 ; ルカ 16 : 9）。またある時は、人に本当に理解してもらう為に、譬えの初めと終わりに置く事もある。例えば「憐れみのない僕」の譬えがそれである（マタ 18 : 23）。この譬えはペテロの質問によって引き起こされたが（21）、主ご自身がその応用の意義を示された後、この譬えを終わらせた（35）。また、マタイの福音書二十章一節から十五節までにある譬えは、初めと終わりとは同じ言葉が記されている。ルカの福音書十二章十六節から二十節までの譬えでは、本当に理解してもらう為に、その前後に注解の説明が加えられている。

これだけではなく、正確な解明はその前後の文意が和合されている必要があり、またそれは曲解のない和合である必要がある。即ち、その解明も一概にして平易でなければならない。「萬有」の法則もこれと同じである。その法則を発見する為には、先見の明を持った人を必要とし、その人によって発見されれば、その法則も自然と明らかになり、全ての人も認識し易くなる。私達がもし合鍵を一本持っていたら、単に錠前内部の一部分の機械を動かすだけではなく、全部の歯車が符合して、互いに傷つける事なく容易に開く事が出来る。この様な正確な解明は、その論拠を堅固にする事ができる。

なお、挙げたい点としては、譬えを以って教理の源、或いは根拠としてはならない。譬えは他の方法をもって既に確立された教理を説明するものであり、或いは、更に進んでそれを堅固にする事も出来るが、譬えを借りて教理を確立するものではない。聖書を以って真理の基準とし、また聖書を解明する基準とすべきである。従って聖書の中にある一部分の譬えを解明するには、必ず聖書を基準にしなければならない。

## 譬 え

### 一、主イエスは俗語を引用して譬えと為す（ルカ 4 : 23）

主イエスが周遊して伝道された時、故郷のナザレにも行かれた。安息日において、いつも通りにユダヤ教の会堂に入られた。当時の会堂には定まった説教者がおらず、司会を任された執事が随意に人を呼び、聖書を読む慣わしがあった。この時、主イエスが読まれたのはイザヤ書六十章一節～二節であった。その後、会衆の視線が主イエスに集中した時、イエスは言われた：「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した。」この聖句を以ってイエスは自分こそ民衆が待ち望んだ「メシヤ」である事を表された。

当時の民衆には二種類の人があった：一つは「主イエスをほめたたえる」人で、又、「口から出る恵みの言葉に感嘆した」（参考ヨハ 1 : 14）；もう一つは却って反感を覚えた：「この人はヨセフの子ではないか」、主イエスは民達の心理を予知し、俗語を引用して彼らの要求に取って代わった、そこで彼らに言われた、「あなたがたは、きっと『医者よ、自分自身をいやせ』ということわざを引いて、カペナウムで行われたと聞いていた事を、あなたの郷里のこの地でもしてくれ、と言うであろう」。

「医者」：イエスを譬える。その意味は：「あなたはまずこの地で、カペナウムで行ったと同じようなしるしを行いなさい；それによって故郷を愛すると言える」。又、「よく言っておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである。」（ルカ 4 : 24）——主イエスは、自分が故郷に排斥される事を暗示された。だからカペナウムを中心にして伝道やしるしを行われた。

### 二、「医者と病人」の譬え マタ 9 : 12、13 ; マル 2 : 17 ; ルカ 5 : 31、32

イエスが「自分の町」——カペナウムの家の中で説教している時、四人に担がれた床の上に中風を患った一人の人が、主イエスに病を治して欲しいと求めた。その時、群衆が多すぎて門の前にも空き地がなかったので、外にあった階段に上って屋根につき、屋根を壊して、床をイエスの前に降ろし、恵みを得た。病が治され、群衆の前で自分の床を担いで外に出て行った。イエスは中風の人に「人よ、あなたの罪はゆるされた」と宣告した。その場にいた律法学者達は、イエスが神を汚したと言った。この事でイエスと律法学者との衝突が始まった。

その日或いは次の日、イエスはカペナウムを離れて、海を渡って、マタイを使徒に召された。その二、三日後、マタイは大きな宴席を設けて仲間との別れを惜しみ、又、この機会を通して、彼らがイエスの教訓を聞けるようにと計らい、イエスと弟子たち、及び取税

人と友達を招待した。イエスと弟子たちが罪人や取税人と同席した事で、律法学者とパリサイ人に攻撃される目標となった。この席でイエスは次の譬えを言われた。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。(マタ 9 : 12、13)

自分を「健康な人」、或いは義人と思っている律法学者やパリサイ人は、イエスに求める必要がない。しかし、「病人」——罪人はイエスの愛を必要とする。しかし、イエスの暗示は：律法学者、パリサイ人こそイエスを最も必要とする事である。ホセア書六章六節によれば：「わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。」と教えられた。律法の専門家である律法学者は、慈しみを理解し、文字や儀式に拘らない事こそ正しい(箴 21 : 3)。「わたしがきたのは、義人を招くためではない——律法学者やパリサイ人を義人とした、しかし、これは比較上一時の名称であり、実際には彼らこそ罪人である。罪人を招くためである——取税人、遊女を指す。」

### 三、「婚礼の客」の譬え マタ 9 : 15 ; マル 2 : 19、20 ; ルカ 5 : 34、35

パリサイ人は断食を以って宗教上の苦行とした。それゆえに、断食の日があるだけでなく、毎週月曜日及び木曜日には断食を行う(参考：ルカ 18 : 12)。バプテスマのヨハネの弟子達は、義の道を伝え、人を勧めて悔い改める事であった。その中でも断食はある(マタ 21 : 32)。ただイエスの弟子達が断食しなかったのも、彼らは不思議に思った。又、ヨハネの弟子達がイエスに問うた時、イエスは「婚礼の客」の譬えを以って答えられた。「婚礼の客は、花婿と一緒にいる間は、悲しんでおられようか。しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その時には断食をするであろう。」(マタ 9 : 15)

「新郎」：イエスを譬える。「婚礼の客」：弟子達を譬える。その意味として、「新郎であるイエスはやがて売られ、十字架につけられる。その時、弟子達は嘆き悲しみ、断食をする。」(参考：イザ 54 : 5 ; エレ 3 : 14 ; エペ 5 : 25~32 ; 黙 19 : 7)

### 四、新旧合わせ難いことの譬え マタ 9 : 16、17 ; マル 2 : 21、22 ; ルカ 5 : 36~39

イエスの弟子達が、ヨハネの弟子やパリサイ人の生活を無理して倣う必要はないと教えるため——形式的な断食を行うゆえに二つの譬えを話された：

#### (一) 新しい布で古い衣服を縫う マタ 9 : 16 ; マル 2 : 21 ; ルカ 5 : 36

「だれも、真新しい布ぎれで、古い着物につぎを当てはしない。そのつぎきれは着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなるから。」(マタ 9 : 16)

「真新しい布ぎれ」：原文では「漂白していない布」であり、イエスの伝えられる天国の福音を指す。「古い着物」：律法学者、パリサイ人が信じる儀式や、伝えられた律法主義的なユダヤ教を指す。マタイ、マルコの福音書で重視している事は：水に浸された新しい布が縮み、古い着物が破れてしまう事である。しかし、ルカの福音書では：

「だれも、新しい着物から布ぎれを切り取って、古い着物につぎを当てるものはない。もしそんなことをしたら、新しい着物を裂くことになるし、新しいのから取った布ぎれも古いのに合わないであろう。」とある（ルカ 5 : 36） その意味は：新しい着物と古い着物は、本来整った二つの物である。もし、片方を切って、もう片方を補おうとするなら——これは、新旧の折衷主義を採取する事であり、協調性を欠く事になる。

## （二） 新しいぶどう酒を古い皮袋に入れる マタ 9 : 17 ; マル 2 : 22 ; ルカ 5 : 37~39

「だれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなことをしたら、その皮袋は張り裂け、酒は流れ出るし、皮袋もむだになる。だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。そうすれば両方とも長もちがするであろう」（マタ 9 : 17）

「新しいぶどう酒」：アルコール度が高いので膨れる。「古い皮袋」：硬くなっているのので、新しいぶどう酒を入れると、簡単に破れてしまう。つまり、活ける生氣のある主の福音をユダヤ教の中に入れると、ただ破れるだけである事を指す。

ルカの福音書では、特にこの一聖句が挙げられた。

「まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはしない。『古いのが良い』と考えているからである」（ルカ 5 : 39）

これは三十三節：「あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています。」に対する答えである。その意味は：ヨハネの弟子達とパリサイ人はまだ「古いのが良い」と思い、主の福音に耳を傾けようとしない。なぜなら、人は凡そ、容易に古き礼儀や道徳、古き思想、古き主義を捨ててまで、真理を受け入れようとはしないからである。

## 五、地の塩、塩のききめがない マタ 5 : 13 ; マル 9 : 50 ; ルカ 14 : 34、35

「山上の垂訓」の中に、弟子達を「地の塩」と譬えられた。「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味を取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである」（マタ 5 : 13）。

辛塩さは塩の特質である。主は塩を以って信者達の信心を指した。信者が社会を美化出来ず、却って悪と同化するなら、その存在価値はもはやなく、ただ捨てられるだけである。

（参考：Ⅱテモ 3 : 5 ; テト 1 : 16 ; 黙 3 : 1）パレスチナが生産しているのは、「岩塩」であり、もし効き目がなくなったら、何によってその味を取り戻されようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけである。

## 六、世の光、山の上の町 マタ 5 : 14

主が「地の塩」を譬えられた後、又、弟子を「世の光」と譬えられた：

「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。」

神は「光」（Ⅰヨハ 1 : 5 ; ヨハ 1 : 9 ; 8 : 12）であるから、信者も闇の社会を照らす光とならなければならない（エペ 5 : 8 ; ピリ 2 : 15）「山の上にある町」：位置が高いため、

遠くからも見える。「隠れることができない」：信者の存在も山の上の町と同じく、良い行いを以って明らかにしなければならない。

#### 七、あかりと柀の譬え マタ 5 : 15、16 ; マル 4 : 21 ; ルカ 8 : 16 ; 11 : 33

「また、あかりをつけて、それを柀の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」（マタ 5 : 15、16）

古き時代の人は、ランプを点けて位置の高い燭台の上に置き、家族全員を照らすためにあった。現代人は電灯を使い、同じように位置の高い所に付ける。その目的は同じである。「あかり」：信者を譬える。「光」：その行いを譬える。もし「柀の下」、「寝台の下」、「器でおおいかぶせたり」、「穴倉の中」に置くなら、光の作用を隠してしまい、価値のない存在になってしまう（I テサ 5 : 5）。信者は「光の子」である。絶えず「あなたがたのりっぱな行い」をして、主の御名をあがめよう（I ペテ 2 : 12）。

#### 八、からだのあかり マタ 6 : 22、23 ; ルカ 11 : 34~36

「目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう。」（マタ 6 : 22、23）

暗い夜の道を照らすのは明かりである。同じように人を導いて歩かせるのは、手や足ではなく、目である。ルカによる福音書ではさらに一句を足した：

「だから、あなたの内なる光が暗くならないように注意しなさい。もし、あなたのからだ全体が明るくて、暗い部分が少しもなければ、ちょうど、あかりが輝いてあなたを照らす時のように、全身が明るくなるであろう」。（ルカ 11 : 35、36）

これは「心の目」指して言われた（箴 4 : 23~27）。心の目が暗ければ、是非や善悪を区別する事ができない。もし、財を貪る事によって心の目が暗くなったら、財を得るために手段を選ばなくなってしまう。

#### 九、盲人の道案内、弟子とその師 マタ 15 : 14 ; マル 6 : 39、40

イエスはまた譬えを用いて弟子に教えられた：

「盲人は盲人の手引ができようか。ふたりとも穴に落ち込まないだろうか。弟子はその師以上のものではないが、修業をつめば、みなその師のようになろう。」

ルカの福音書のこの聖句は、人の長短や是非を論じる事にある。自分が盲人であるなら、人を導く良きリーダーにはなれない。盲人から学んだ弟子は、たとえ学べたとしても、その師のレベルと同じに過ぎない。

マタイの福音書では：

「彼らをそのままにしておけ。彼らは盲人を手引きする盲人である。もし盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろう。」（マタ 15 : 14）

これはパリサイ人を責める時に言われた：「盲人であるなら、どのようにして人を導くのか？」（参考：マタ 15 : 10、11）

#### 十、目の中にある梁 マタ 7 : 3~5 ; ルカ 6 : 41、42

マタイ七章一節～二節では、主は人をさばくなど教えられた後、もう一つ譬えられた：「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。」（マタ 7 : 3~5）

「ちり」：小さな過ちを指す。「梁」：大きな過ちを指す。自分の過ちを自覚できず、ただ人の過ちだけを見る（ヨハ 8 : 3~9 ; サム下 12 : 1~7 ; 創 38 : 24~26）。既に自分の目に梁がある事を知っているのに、どのような顔をしてこんな事が言えるのか？最後の句に：「はっきり見える」は教訓である：「先ず己を正し、後に人を正す、この通りに行うなら、適宜だけではなく、更なる効果を上げる事ができる。もし、偏見や偽称がなければ、確実に人を励まし、人を助けることができる。」（ガラ 6 : 1 ; 参考：詩 51 : 13）

#### 十一、聖なるものと犬、真珠と豚 マタ 7 : 6

「聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。」

「聖なるもの」：捧げられた生けにえ、真理を指す。「犬」：真理を蔑視し、または反対して悪を行う者を指す（Ⅱペテ 2 : 22 ; 黙 22 : 15 ; イザ 56 : 11 ; ペリ 3 : 2）。「真珠」：貴重な真理を指す（マタ 13 : 45）。「豚」：清められていない、情欲に従う……悪の人（Ⅱペテ 2 : 22）。真理を犬や豚のように汚れを好み、真理を愛さない世の人に伝える事はない。彼らは受け入れないだけではなく——踏みつけ、却って誹謗し、或いは迫害する——かみついてくる（箴 9 : 7 ; 23 : 9）

#### 十二、子供がパンを求める譬え マタ 7 : 9~12

イエスがマタイ七章七節～八節で、求める、捜す、門を叩くなど、「求めれば与えられる」の真理を教えられた後、次のように言われた：

「あなたがたのうちで、自分の子供がパンを求めるのに、石を与える者があるだろうか。魚を求めるのに、へびを与える者があるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとしたら、天にいますあなたがたの

父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあるか。だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。」

「石」はパンに似ているが、食べられない；「へび」は猛毒を持ち、人の命を傷つける。生来罪をもった父親が、「悪い者であっても」——不完全であっても、まだ子供を愛する。慈愛なる神はなおさら、必ず一番良い「贈り物」——聖霊を神の子たちに与えられる。

(ルカ 11 : 13)

「人々からしてほしいと望むこと」：父なる神は良いものを人に与えられる。神の子である私達も、このように人に接しなければならない。私達は完全を求め、同時に人に尽くすべきである(参考：ヤコ：4：17；Iヨハ4：10、11)。「律法であり預言者である」：旧約聖書のすべての真理は、キリスト教の倫理道徳である。永遠不変の「黄金律法」といえる。

### 十三、樹と実 マタ 7 : 15~20 ; ルカ : 6 : 43~45

主がこの譬えの中で、まず言われた事は：

「にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。」(マタ 7 : 15)

旧約時代にはにせ預言者がいた(エレ 14 : 14 ; 23 : 16)、新約時代のにせ教師と同じである(IIペテ 2 : 1~3 ; マタ 24 : 4, 5 ; ロマ 16 : 17, 18 ; コロ 2 : 8 ; Iヨハ 4 : 1)。外見は優しく、善良な羊に見えるが、中身は貪欲で、人を傷つける残虐な狼である。主は続けて言われた：「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるか。そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実によって彼らを見分けるのである。」(マタ 7 : 16~20)。

にせ預言者の心、言葉、行いを——「実」と表す。その人を証明することを——「樹」と表す。信仰、愛、真理を持つ人は、清い生活を送り、愛や犠牲的な行いをする。反対に、行ったのは悪である。良き実を結ばない樹は切られて、火に投げ込まれる——終りのさばきの時には、地獄に投げ込まれ、硫黄の燃えている火の苦しみを受ける。

ルカの福音書ではさらに：「善人は良い心の倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から悪い物を取り出す。心からあふれ出ることを、口が語るものである。」と付け加えた。

(ルカ 6 : 45)。

「心からあふれ出る」：心は人格の源であり、口はその川の流れである。恵みにあふれれば、恵みの言葉を話す(ルカ 4 : 22 ; ヨハ 1 : 14)、悪人の言葉は悪口である(ヤコ 2 : 12~14 ; マタ 12 : 34)。

#### 十四、二人の家造りの譬え マタ 7 : 24~27 ; ルカ 6 : 46~49

イエスが「山上垂訓」の最後に言われた：

「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」（マタ 7 : 24~27）

「わたしのこれらの言葉」：「山上垂訓」の全ての教訓を指し、もちろんその他の主の教訓も含まれる。主の教えを聞いて行う者は良い。「比べる」：信仰を行って主イエスを土台として建てた事は（I コリ 10 : 4 ; 3 : 11）、天の父の御旨を行う事であり、彼らは「賢い人」である。反対に、聞いて行わない者は「愚かな人」である（参考：ヤコ 1 : 23~25）。

#### 十五、子供の遊び マタ 11 : 16~19 ; ルカ 7 : 31~35

主が百卒長の僕を治し、やもめの一人息子を復活させるなどの奇跡を起こされた。その事はルカの福音書では：「これらのこと」（ルカ 7 : 18）と言われた。

バプテスマのヨハネは弟子達に、イエスのために素晴らしい証しをした（ヨハ 1 : 29~34 ; マタ 3 : 11, 12 ; 参考：ヨハ 1 : 26, 27）；彼は荒れ野の自由な生活に慣れていたが、今は牢屋での生活を送り、長期的な痛みや苦しみを受け、彼の信仰が影響され、疑念が生まれた。この時、ヨハネは二人の弟子を主に送って聞いた、主は彼らに答えられた：

「行って、あなたがたが見聞きしたことを、ヨハネに報告しなさい。」——見た奇跡によって主がメシヤである事を証明された（イザ 61 : 1, 2 ; 29 : 18 ; 35 : 4~6）。ヨハネの弟子が行った後、主は群衆に向かってヨハネをほめて言われた：「女の産んだ者の中で……」：肉によって生まれた者は（ヨハ 3 : 6 ; I コリ 15 : 47）、ヨハネの天職と性質の偉大さに、誰一人として比べ得る事は出来ない。ヨハネは旧約と新約の懸け橋である。故に、天国に入るためにはヨハネをエリヤとして受け入れなければならない。同時に：「私がメシヤである事を信じなさい」（マタ 11 : 14, 15）とも暗示された。その後、主は譬えをもって言われた：

「今の時代を何に比べようか。それは子供たちが広場にすわって、ほかの子供たちに呼びかけ、『わたしたちが笛を吹いたのに、あなたたちは踊ってくれなかった。弔いの歌を歌ったのに、胸を打ってくれなかった』と言うのに似ている。なぜなら、ヨハネがきて、食べることも、飲むこともしないと、あれは悪霊につかれているのだ、と言い、また人がきて、食べたり飲んだりしていると、見よ、あれは食をむさぼる者、大酒を飲む者、また取税人、罪人の仲間だ、と言う。しかし、知恵の正しいことは、その働きが証明する。」

頑固な子供は、仲間に向かって「笛を吹く」：婚礼を行うように踊ってくれず、一緒に

喜んでくれなかった。「弔いの歌」：葬式を行うように悲しまず、胸も打たない。これは、民衆達がキリストの福音を受け入れず、又、悔い改めてヨハネのバプテスマも受け入れない。何とも冷淡なものである。

ヨハネは世の人の罪のために断食をし、禁欲の生活を送っていた。しかし、パリサイ人は彼が主のためにされた証しを捨て去り、彼の生活を誹った。又、主は世の人と同じように飲み食いし、宴席に加わる；故に「食をむさぼる者、大酒を飲む者、……罪人の仲間だ」と軽視された。

主は結びの言葉で：「知恵の正しいことは、その働きが証明する。」と言われた。ヨハネと主の行ってきた事はそれぞれ違うが、知恵のある人は、彼ら二人が神から出た事を必ず認識できる。「およそ知恵のある、忠実な人は、立ち上がって効果を上げ、これを明らかにする。」

#### 十六、二人の負債者の譬え ルカ 7：41～43

マタイ、マルコ、ヨハネの三福音書に：「女がイエスの身体に香油を塗る」という出来事が記されている。三福音書に記されているこの出来事が同一であると認識されている（マタ 26：7；マル 14：3；ヨハ 12：3）。しかし、ルカの福音書に記されているこの中の「女」は罪の女であり、彼女は罪の赦しを得るために、シモンの家に来たのである。イエスと弟子達がシモンに招かれて、食事をしていた時、ペルシャ式に倣って、寝台に横になり、左手で身体を支え、右手で食べ物を取る食べ方であり、頭が食卓に向かって、足が寝台の外にあった。故に、この女は「イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。」という事が出来た。髪の毛は女の光栄である（I コリ 11：15）。反対に、足は最も卑しい部分である。主の恵みによって赦される事を望み、全てを顧みずに行った。彼女は「罪の女」であり、その唇で何人もの男を誘い（参考：箴 5：3；7：13）、その髪の毛を網のようにして男を奪った（参考：I ペテ 3：3）。だが、今回は主の足に接吻し、主の足をぬぐった（参考：ロマ 6：19）。

主はシモンの宴席でこの譬えを言われたのは、シモンに教えるためであった。例えば：「あなたは足を洗う水をくれなかった……あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが……あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが」など、シモンは主人としての本分を尽くしたかと聞かれた。（参考：創 18：4；出エジ 18：7；詩 23：5）。彼の誠意はどこにあったのか？又、この罪の女は主の後ろに立ち、主の体にした全ての事がシモンの心の中に疑いを起こさせた。「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。主は「預言者」である事を否定するか或いは、主にはあるべき清い行いが欠けているかと。故に、この譬えを言われた。その内容は次の通りである。

「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりは五百デナリ、もうひとりは五十

デナリを借りていた。ところが、返すことができなかつたので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい。」 この譬えを内容に従って解釈された：

「金貸し」は神を表す：「金をかりた人がふたり」は世の罪人を表す（参考：マタ 18 : 24 ; 6 : 12）。「ひとりは五百デナリ、もうひとりは五十デナリを借りていた」（デナリは一日の工賃であり、五百日分の工賃と五十日分の工賃は十分の一の比率がある）。「返すことができなかつた」：人類の犯した罪を贖う事は出来ない（参考：詩 49 : 9）。ただ主に「恵みによって免れる」と求める以外には、何の方法もない。

四十二節の下半句から四十三節までは教えの部分である：

「どちらが彼を多く愛するだろうか」：この時、主イエスは譬えを通してシモンに質問し、彼の正しい判断がどんなものであるかを見たかった。結果シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい。」

主がこの譬えを話し終えた後、シモンの判断が正しいと分かり、彼を称賛し、答えられた：「あなたの判断は正しい。」；又、四十七節ではシモンに言われた：

「それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない。」；第一に、罪の女は罪深く、悩み嘆息したが、今は、切に罪が赦される事を望み、主の身体において、主を深く愛する事を顕した；まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った等。第二に裏面から見て、シモンは主を招いたが、誠意と愛がなかった—— 一般的に主人としてあるべき本分を尽くさなかつたから、彼の得る赦しも少ない。

四十八節では、『主はそして女に、「あなたの罪はゆるされた」と言われた。』；主は同席した人々の心に不平がある事を知っていた。マタイ九章二～三節及びマルコ二章五節に記載されている通りである。それでも、『主は女に、「あなたの信仰があなたを救った、家に帰りなさい。」と言われた』；彼女にすれば、なんと大きな慰めを得た事か。

#### 十七、分裂した国と家庭 マタ 12 : 25、26 ; マル 3 : 24～26 ; ルカ 11 : 17～20

イエスがガリラヤでの二度目の仕事を終えて、カペナウムに戻って悪魔に憑かれた人を癒し、目が見えず、口も利けない人を見えるようにして、話せるようにもされた。しかし、パリサイ人は主を誹謗して、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。主は彼らの誹謗に反駁して、この譬えを言われた：

「おおよそ、内部で分れ争う国は自滅し、内わで分れ争う町や家は立ち行かない。もしサタンがサタンを追い出すならば、それは内わで分れ争うことになる。それでは、その国はどうして立ち行けよう。」（マタ 12 : 25、26）

内部紛争する国は立ち行かない、内輪で争う家庭は終わる。同様に、悪魔の国も内部紛争

したら、団結を失い、その破壊工作も阻まれる。なぜなら、「神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためである。」（Iヨハ3：8）

引き続き主はパリサイ人の仲間が悪魔を追い出したのも、悪魔のしわざによるものであると言われた。もし、彼らが認めなければ、矛盾してしまうからである。「彼らがあなたがたの罪を定めるであろう」（参考：マタ12：41の語気）。そして、マタイ十二章二十八節では、「しかし、わたしが神の霊によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところに来たのである」。主は神の力に頼って悪魔を追い出し、恵みにあずかる者の上において神の統治を顕し、神の国が来た事を証明された。（参考：ルカ11：20「神の指」と「神の霊」は同じである）

#### 十八、強い人を縛る譬え マタ12：29；マル3：27；ルカ11：21、22

「悪魔を追い出すのは悪魔に打ち勝つ証拠」のために、イエスは次の譬えを言われた：「まただれでも、まず強い人を縛りあげなければ、どうして、その人の家に押し入って家財を奪い取ることができようか。縛ってから、はじめてその家を掠奪することができる。」（マタ12：29）

「強い人」：悪魔を表す。主が悪魔に打ち勝つ力がなければ、どのようにして、悪魔に縛られた人を救うことが出来るのか。

#### 十九、空き家の譬え マタ12：43～45；ルカ11：24～26

パリサイ人が神の奇跡を求める事を拒んだ時、主は彼らを責めて言われた：「邪悪で不義な時代」：神とユダヤ人は夫婦であると譬えられた。だから、神に背く群衆たちを不貞の女と譬えられた（参考：エレ3：20；ヤコ4：4）。主は多くの奇跡を行われたが（ヨハ3：2）、彼らは信じなかった。要求する事が間違いであれば、主は応えない（マタ16：4；ルカ4：23；23：8、9）。続けてニネベの町の人を例として挙げられた：彼らは真の神を信じない国民であったが、預言者の警告を聞いて、悔い改める事を知った；パリサイ人は真の神を信じたが、主の話された——ヨナにまさる者——を聞いても、神の奇跡を求め、且つ誹謗した。シバの女王は、紀元前九百六十年に遠くから来てソロモンの知恵を聞いたため神をほめたたえた（列王上10：1～10）。しかし、今の時代の人々は、主から救いの知恵を受ける事は出来るが、悔い改める事をしない。今、ソロモンに勝る知恵——天の知恵——を持つキリストがここにおられる。故に、主イエスはこの譬えを言われた：「汚れた霊が人から出ると、休み場を求めて水の無い所を歩きまわるが、見つからない。そこで、出てきた元の家に戻ろうと言って帰って見ると、その家はあいていて、そうじがしてある上、飾りつけがしてあった。そこでまた出て行って、自分以上に悪い他の七つの霊と一緒に引き連れてきて中にはいり、そこに住み込む。そうすると、その人ののちの状態は初めよりももっと悪くなるのである。よこしまな今の時代も、このようになるであろう。」（マタ十二章）

ユダヤ人にとって悪魔の住家は荒野か砂漠の「水の無い所」であった。汚れた霊が人から離れて、また帰って来る譬えの教えとしては、「邪悪で不義な時代」に対するため設けられた(39)。「汚れた霊が人から出る」：悪魔に憑かれて、癒されたユダヤ人を表す。彼らは既に神を離れ、偶像を拝んだ。バビロンに捕えられ、悔い改めてこの罪を免れたが、後に、神に仕える上において、主を愛する心が無かった。故に、彼らの心は「その家はあいていて、そうじがしてある上、飾りつけがしてあった」に似ている。その汚れた霊は…独善、驕り、偽善など悪の霊を連れてそこに入った。彼らは自身を救うメシヤすらも棄てた。だから、「よこしまな今の時代も、このようになるであろう」(参考：Ⅱペテ2：20)。つまり、ある人が恵みを頂いた後、再び離れるという譬えである。

## 二十、種まきの譬え マタ13：3～9；マル4：3～9；ルカ8：5～8

「種まきの譬え」は、イエスが初めて譬えをもって弟子達に教えられた譬えである。弟子達がこの譬えを聞いた後、すぐ主に：「なぜ、彼らに譬でお話しになるのですか」(マタ13：10)と問いかけ、それに主が答えられた：「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていない。……だから、彼らには譬で語るのである。それは彼らが、見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからである。こうしてイザヤの言った預言が、彼らの上に成就したのである。……しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。あなたがたによく言うておく。多くの預言者や義人は、あなたがたのしていることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。そこで、種まきの譬を聞きなさい。」と書かれているように、主は今まで譬えをもって弟子に教えた事がなかった事を証明した。又、主の答えによって、この新しい教育方針の作用と、主の用いた譬えの目的が分かる。初めて譬えを用いて教えられたから、主自らその意義を解明し、範例とならせた(マタ13：18～23)。もし、この譬えが正しく理解されたなら、以後、主の用いられる譬えの真意も開かれる(マル4：13)。「種まきの譬え」は次の通りである。

「見よ、種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種はいばらの地に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまった。ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。」(マタ13：3～8)。この譬えを内容に合わせて一つずつ解き明かす。

「種まきの譬え」については三箇所記載されている：マタイ十三章の他に、マルコ四章三節～九節、又、ルカ八章五節～八節にも記載されている。主の模範解釈は各段落の後に記載されている(マタ13：18～23；マル4：14～20；ルカ8：11～15)。この譬えの正しい意味を理解するために、同一の譬えを総合して解釈する必要があり、それによって主

の教えを理解する事が出来る。

主が用いたこの譬えの時間と場所も初めに知るべき重要な問題の一つである。マタイ十三章一節では、「その日、イエスは家を出て、海べにすわっておられた。」とある。マタイ十二章二十二節～五十節によれば、主は汚れた霊を追い出したが、パリサイ人は主を侮蔑して「悪霊のかしらベルゼブルによるものだ」と言った。又、律法学者とパリサイ人は神の奇跡を求めた；次に、主の親族が来て、主が狂っていると思い、主を取り押さえに来た（参考：マル3：21～35）。それから、カペナウムの海辺にある家から出てきた（マタ4：13）、群衆が押し寄せてきたので、主は「舟に乗り、群衆はみな海に沿って陸地にいて」、この譬えを聞いた（マル4：1；参考：ルカ：5：1～3）。この「海」は「ガリラヤの海」（マタ4：18）であり、別名「ゲネサレ湖」（ルカ5：1）と呼ばれ、「テベリヤの海」（ヨハ21：1）とも呼ばれた。古代名は「キンネレテの海」（民34：11）と呼ばれた。長さ22.5km、広さ11.5km、それほど広くは無いが、景色はとても美しい。

「イエスは譬で多くの事を語り」—— 海辺で四つの譬えを話され、家の中で三つの譬えを話された（マタ13：1～50）。又、マルコの福音書だけに記載されている譬え（マル4：26～29）もある。主は続けて「多くの事」を話された。

「種まき」は主イエス自身を表す。「種」は「神の言」である（ルカ：8：11）。主は物質の世界をもって霊界を表された。よって、「神の言」は人の心の畑に撒かなければならない。時間性があり、また、人に命を得させる教えでもないが、聞く人に感動させ、種が人の心の中で芽を出し、成長するようになることはある。まして「神の生ける御言」は言うまでも無い。（Iペテ1：23～25）。人の心を変えるだけではなく、人を生まれ変わらせる事が出来る。「種まきの譬え」は四種類の違う土壌をもって話された。故に、「違う土壌の譬え」とも呼ばれている。

一つ目の土壌：「種」は同じであるが、違った土壌に撒かれる事によって、その結果も自然と分かれてくる。「道端に撒かれた」のは一つ目の土壌である。「道端」は畑への通り道で、その硬い場所に撒かれた種は、根付く事は出来ない。道に落ちて「踏みつけられ」（ルカ8：5）、種まきの人がいなくなると、「鳥が来て食べてしまった」。主イエスは自ら「鳥」を解釈し、マタイの福音書では「悪い者」、マルコの福音書では「サタン」、ルカの福音書では「悪魔」と象徴している。なぜ悪魔は人の心に撒かれた神の言を奪い取るのか？悪魔は「彼らが信じて救われる事を恐れた」（ルカ8：12）。又、彼らを地獄に落として、滅びの仲間になりたいからである。

マタイの福音書では、特に「だれでも御国の言を聞いて悟らないならば」を強調している。その意味は：だれでも御国の言を聞いて—— 宇宙万物を創造された真の神、人の原罪と本罪、イエスの十字架の救いによる贖い、天国の嗣業を受け継ぐ聖霊の証拠……などに関することであり、これらを理解できないだけではなく、自分とは何の関係も無いと思っている。故に、彼らの心は人が行き交う硬い道であり、神の御言が根付く機会も無く、悪魔によって奪い取られてしまう。

二つ目の土壌は「土の薄い石地」である。石の混じった土壌でも種は根付く。しかし、ルカの福音書では、種は「岩の上に落ち」と記載されている。だから、浅い土の土壌では、芽は早く出るが、「水気が無い」ので、土壌から水分を吸収することが出来ない。故に、太陽の熱に耐えられなくて枯れてしまう（ルカ 8 : 6）。

これに対し、イエス様が解明して言われた：「御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人」。最初に真理を聞いて、喜んで受け入れた人のことである。例えば、ピリポが福音をサマリヤに伝えた時、彼らは主の救いの恵みを聞いただけでなく、自分の目で見て、自分の体で主の教えが確実であることを証明するしるしを体験したのである。そこでは大いに喜んだ（使徒 8 : 4~8 ; 参考：使徒 16 : 34）。しかし、これは神から来た福音、或いは神が設立した教会を証明し、人が神の救いに入る方法を教えたに過ぎない（ヨハ 3 : 2 ; 使徒 14 : 3 ; II コリ 12 : 12）。「日が昇って当てられる」、「その中に根がないので……御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう」。真の福音には奇跡が伴い、人は喜んで受け入れる。しかし、信仰の過程の中には、困難や迫害があり、或いは人が想像できない艱難がある。もし根のある植物なら、太陽の熱によって逆に成長が促進される。同じように、基礎のある信者なら、困難や迫害が来ても恐れない（参考：マタ 7 : 25 ; コロ 2 : 7 ; エレ 17 : 8）。だから、主は自分の弟子になろうと願っているもの者にこう教えられた。信仰の前途には、試練、困難、迫害など霊的な戦いがある事を覚悟しなければならない（参考：ルカ 14 : 25~33）。又、強く尊い信仰心を得るためには、必ずこの道を通る事を理解しなければならない（I ペテ 1 : 6, 7）。古代、炎のような困難をも恐れない信仰を持った預言者、使徒たちがいた：例えばモーセ、ペテロ、パウロ、……など、全て私達が敬服する豪傑たちである（ヘブ 11 : 26 ; ヨハ 6 : 68 ; II コリ 4 : 17, 18）

三つ目は「いばら」の土壌である。ユダヤ人はいばらをもって畑の境界線を引く（参考：出エジ 22 : 6 ; ミカ 7 : 4）。故に、種はいばらに落ちる（参考：エレ 4 : 3 ; ヨブ 5 : 5）。

「いばらが茂ってきて、それをふさいだ」。種は不浄の境界線であるいばらの上に落ちた故に、「いばらも一緒に茂ってきて」（ルカ 8 : 7）、更にその成長は早く、空気や日光を遮り、肥料や水分を奪い取った。だから、種が根付ける土壌にあって、穂が出ても、実を結ぶことは出来ない。結果この様な環境のもとにおいては、畏縮して枯れ死んでしまう。

主は解釈して言われた：「世の心づかいと、富の惑わしと、その他いろいろな欲とがはいってきて、御言をふさぐ」（マル 4 : 19）、「実の熟するまでにならない」（ルカ 8 : 14）。これらの人は、神の国の福音を聞いた後、暫く従った。つまり、一時的に「根ざして建てる」（コロ 2 : 7 ; 参考：黙 3 : 1）を表した。後に、「世の心づかいと、富の惑わし」によって、いばらが霊性の成長を妨げ、敬虔が衰退して、完全に消失するまでに至るのである。

信者が専心して主に頼らず（I ペテ 5 : 7 ; 参考：伝 2 : 23）、ただ生活の「苦慮」（マタ 6 : 25~31）を思う。それでは追いやられてしまう。金儲けの上手な人が、金儲けを快樂とするなら、金銭を愛することと神を愛することは、心の中で並立できるのか？これで

は、「金銭の誘惑」(Iテモ6:9、10)を受けて、失敗に終わってしまう。故に、心の中にあるいばらや悪い草を取り除けば、御霊の実を結ぶことが出来る(ガラ5:19~25)。

四つ目は「良い地」であり、そこに落ちた種は「実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである」。マルコの福音書では逆の順序で記載されている。しかし、ルカの福音書では「百倍もの実を結んだ」としか記載されていない(参考:創26:12)。

主は解釈して言われた:「良い地にまかれたものとは、御言を聞いて悟る人のこと」であり、ルカの福音書ではより詳細に:「御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである」と記載されている(ルカ8:15)。神の言と聖霊によって新たにされる以外にも、「正しい良い心」があるのか?(ロマ3:10~15)。種は土壌を変える事は出来ない。故に、この段落は聖書の中でも難解な問題といえる。しかし、聖書の中には、「神からきた者は神の言葉に聞き従う」(ヨハ8:47)「だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」(ヨハ18:37)、或いは「真理を行っている者は光に来る」(ヨハ3:21)などが記載されている。つまり、初めから良い地であるのは、謙虚且つ真理を容易に受け入れられる心の事を表している(マタ5:3)。例えば:マタイ、ザアカイ、罪人、罪の女などがいる。彼らは罪人であるが、闇を愛し、光を憎む律法学者やパリサイ人とは全く違う(ヨハ3:20)。

主がこの譬えを話し終えた時に一言加えられた:「耳のある者は聞くがよい」と「どう聞くかに注意するがよい」(ルカ8:18)。意義の上では同じであるが、後者は前者の説明をする事が出来る。主が弟子達に答えられた言葉には:「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、……」(マタ13:11)とある。つまり、「種まきの譬え」は弟子のために設けた譬えであり、人には四種類の心がある事を教えた。第三者は誰がどの心を持っているかは知らない。しかし、先に恵みを頂いた者が種を撒く責任を負わなければならない。なぜなら、主が先に天国の真の種を撒かれ、弟子も続けて撒く。終りの時には、聖霊に満たされた教会がこの仕事を継承するからである(マタ10:8)。故に、水と霊のバプテスマを受けた信者は、この使命を負わなければならない(ルカ4:18、19)。御言は、聞こうとし、受け入れようとする人には、大きな効果があらわれる。それは人の心を変えるだけでなく、百倍もの実を結ばせる事が出来る。一人の人が恵みを頂いたら、その人が知る全ての人に影響を与える。

## 二十一、毒麦の譬え マタ13:24~30

「種まきの譬え」の後、イエスは海辺で第二の譬えを話された。それが「毒麦の譬え」である。主が第三(からし種の譬え)、第四(パン種の譬え)を話された後、家に入り、弟子はすぐに「畑の毒麦の譬を説明してください」と言った。主は第一の譬えを解釈したように、自ら解明された(マタ13:36~43)。又、その他の譬えを理解するのに役立つ範例としても残された。

「毒麦の譬え」は以下の通りである。

「天国は、良い種を自分の畑にまいておいた人のようなものである。人々が眠っている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った。芽がはえ出て実を結ぶと、同時に毒麦もあらわれてきた。僕たちがきて、家の主人に言った、『ご主人様、畑におまきになったのは、良い種ではありませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのですか』。主人は言った、『それは敵のしわざだ』。すると僕たちが言った、『では行って、それを抜き集めましょうか』。彼は言った、『いや、毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない。収穫まで、両方とも育つままにしておけ。収穫の時になったら、刈る者に、まず毒麦を集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、と言いつけよう。』」（マタ 13：24～30）。

この譬えを内容に従って、一つずつ解釈する：

主が自らこの譬えを解釈されたのは、海辺で群衆に四つの譬えを話されて分かれた後、「家に入られた」時に、弟子達の要求に応じて話された。

「天国」：地上の神の教会を表し、天国の模型である。この教会には、真の信者にとにせの信者がいる。「良い種を自分の畑にまいておいた人」の言葉に、主は「良い種をまく者は、人の子である」と解釈された。主自身こそ良い種を撒く農夫であると表した。「人の子」という言葉はダニエル書七章十三節から「メシヤ」を表している。しかし、主を「人の子」と呼ぶ所は多くない（使徒 7：56；参考：ヨハ 12：34）；ユダヤ人は主を「ダビデの子」と常と呼んでいた（マタ 9：27；12：23；15：22；20：31）。故に、種を撒いているのは主イエスであり、「種」は「御国の子」である。「種まきの譬え」の中の「種」は「神の御言」を表し、神の御言は信じる者を新たに生まれ変わらせる（ヤコ 1：18；I ペテ 1：23）；もし、新たに生まれ変われたら、「御国の子」と呼ばれる（参考：エレ 31：27；ホセ 2：23）。「畑」：主は「畑は世界である」と説明された。畑を世界と譬えられたこの一節は、聖書の難解部分であり、論争の多い部分でもある。なぜ「世界」という言葉が使われたのか？それは、生命の真理の種は、全ての国の畑に撒かれなければならない。つまり、全ての人の心の中であり、全世界に広められる「神の教会」を表すことだからである。

「人々が眠っている間」：教会の責任者が怠けて、警戒心を失くした時、機会に乗じて攻め込む「敵」に余地を残してしまう事になる（マタ 13：39）。「悪魔」は不法のやからを使って、教会に潜入させて異端の種を撒く（エゼ 20：29、30；ユダ 4；II ペテ 2：1、2、19）。神は光であって、神には少しの暗いところもない（I ヨハ 1：5；ヤコ 1：17）；原文によれば、サタンは「絶対的な悪い者」であり（マタ 13：19）、闇を利用して破壊工作を行い、不法のやからを使って真理を阻む（ロマ 1：18）。このように、サタンは人の子と常に敵対する。だから、救いの仕事を完成させるためには、悪魔を倒さなければならない（I コリ 15：21）。「麦の中に毒麦をまいた」：イネ科に属す植物で、毒素を持ったエノコログサが「毒麦」である。一見して小麦に見えるが、特に穂を出す前になると、

分別するのは極めて難しくなる。麦の中に混じって、人が食べると眩暈や吐き気を起こし、時には命の危険さえある。この「毒麦」は「悪い者の子たち」を表し、悪魔から出てきた者たちである（ヨハ8：44）。「立ち去った」：真理を阻む不法のやからは闇の中で動き、初めは誰にも気付けれない。「芽がはえて実を結ぶと、同時に毒麦もあらわれてきた」：この聖句は「その実によって彼らを見わける」（マタ7：16）に似ている。結果彼らの真相が暴かれる時、はっきりと分別する事が出来る。

「僕たちがきて、家の主人に言った」：この僕たちは主の栄光を崇める弟子たちを表す（参考：ルカ9：54）。彼らが異端を見つけた時、驚き疑って言った：「ご主人様、畑におまきになったのは、良い種ではありませんでしたか。どうして毒麦がはえてきたのですか？」この弟子達は、教会が完全無欠であると信じた。だから、不法を見て驚いたのも自然な事である。主人は答えた：「それは敵のしわざだ」。主イエスは解釈された：「それをまいた敵は悪魔である」。その意味は、「不義をもって真理を阻むのは、悪魔のしわざである」。僕たちは主人に求めた：「では行って、それを抜き集めましょうか」。彼らの熱心はエヒウとエリヤのようである（列王下10：10；1：9、10）。しかし、主人は「いや」と答えた：なぜなら、麦と毒麦を分別するのは難しい、更に、毒麦の根は麦の根に連なっている。気をつけないと、毒麦を抜く時に麦も抜いてしまう、或いは麦を傷つける恐れもある。故に、機を見て計らうしかないからである。主人の意思としては「収穫まで、両方とも育つままにしておけ」である。なぜなら、真の信者とにせの信者、或いは、キリストに属する者とキリストに敵対する者が「世の終り」のさばきの時には、分別されるからである（黙14：14～20；マラ3：18）。「畑の主人——人の子」が「刈る者——御使い」に向かって言われた：「まず毒麦を集めて束にして焼く」（マタ16：27；24：31；Ⅱテサ1：7）主の解釈では：「つまずきとなるものと不法を行う者とを、ことごとく御国からとり集めて、炉の火に投げ入れさせるであろう」と言われた。「炉の火」は悪い者を懲罰する所である（ゼパ1：3；サム下23：6、7；マタ3：10、12；7：19；ヨハ15：6；ヘブ6：8；10：26、27）。しかし、火刑は苦しく、残酷なものである。このような永遠の刑罰を受けるのは、「そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」と言われる（参考：使徒7：54；ヨブ16：9）。

「麦の方は集めて倉に入れる」：これは「そのとき、義人たちは彼らの父の御国で、太陽のように輝きわたるであろう」と言われた。清く、光ある事は天国の民の条件である（コロ3：4；ロマ8：18；箴4：18）。それは、主がヘルモンの山で姿が変わられ（マタ17：2）、また太陽が光り輝いたようである（ダニ12：3）。このように、世の終りの時には、善悪がはっきりと分別される。

## 二十二、からし種の譬え マタ13：31、32；マル4：30～32；ルカ13：18、19

イエスが海辺で話された第三の譬えは、「からし種の譬え」である。この譬えは、第四の譬え「パン種の譬え」との異同を見ると、一組の譬えとして成り立つ事が出来る。「天

国——神の教会」の内外隆盛の状況を表す。類似点から見れば：教会は小さいところから始まるが、のちに必ず隆盛を極める。ダニエル書のように「あなたが見ておられたとき、一つの石が人手によらずに切り出されて……大きな山となって全地に満ちました」（ダニ 2：34、35）と記載されている。相違点から見れば：「からし種の譬え」は外面の形ある拡張を表し、「パン種の譬え」は内面の隆盛を表す。

第一と第二の譬えは主自ら手本として解釈されたので、それに従ってこの譬えの意義を全て理解する事ができる。故に、ここでは、主の解釈を記す必要は無い。「からし種の譬え」は次の通りである。

「天国は、一粒のからし種のようなものである。ある人がそれをとって畑にまくと、それはどんな種よりも小さいが、成長すると、野菜の中でいちばん大きくなり、空の鳥がきて、その枝に宿るほどの木になる」（マタ 13：31、32）

この譬えを内容に従って次の通りに解釈された：

「天国は、一粒のからし種のようなもの」：主はその種は小さいが、やがて大きな高木になる事に警戒された。十字架の真理のように、初めユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであった。しかし、救いにあずかる者にとっては「神の力」（I コリ 1：18、23）であった。将来は全地に満ち、全ての人頼る救いの真理となる。「ある人がそれをとって畑にまく」、このからし種を撒く「人」は、もちろん主イエスである。譬えの全容を見て、「からし種」は主の教えや教会だけを表すのではなく、主自身がからし種を表し、又、からし種を撒く人でもある。なぜなら、種と樹は同じだからである。樹は本来種の中に含まれ、又、種が成長して樹となるのである。教会がキリストと一体であるように、本来主の中に含まれていた、又、主から芽を出し、成長したのである（参考：ヨハ 12：24）。「畑にまく」：畑はこの世界を表す。原文では、「彼の畑にまく」（呂氏新訳）、ルカの福音書に「自分の園」と訳している（ルカ 18：19）。この世界は神によって創造された。神の降誕は「自分のところにきた」のである（ヨハ 1：11）

からし種は「どんな種よりも小さい」。ここでは、主は小さい物を形容する諺をもって説明された（参考：ルカ 17：6）。主はベツレヘムに生まれ、軽視された田舎で成長され、三十歳の時、伝道に出られた。選んで召された弟子は十二人に過ぎず、又、全てが無学な者たちである。最後は十字架につけられて死なれた。このように、神の国の始まりは、取るに足りないものである。しかし、発展させて且つ栄えなければならぬ。「成長すると、野菜の中でいちばん大きくなる」と同じようになる。

「木になる」：これは誇大な形容ではない。暖かいパレスチナ地方で育まれた黒カラシナ（*Sinapis nigra*）は、大きな高木となる。「空の鳥がきて、その枝に宿る」：「空の鳥」は常に悪魔と解釈される（参考：創 15：11；黙 18：2；ルカ 8：12）。つまり、「空の権をもつ君」（エペ 2：2）の通りである。「宿る」：歴史的事実が私達に教会の成長と隆盛はからし種のようなものであると教えた（使徒 6：7；9：31；12：24；16：5；19：20；28：31）。使徒教会後期では、ローマ政府と妥協し、真理を変え、俗化した教会と

ならせ、悪魔がその中に宿るようになった。

### 二十三、パン種の譬え マタ 13 : 33 ; ルカ 13 : 20、21

第四の譬え——「パン種の譬え」は次の通りである：

「天国は、パン種のようなものである。女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると、全体がふくらんでくる」（マタ 13 : 33）

この譬えを内容に従って解釈する：

「パン種」：常に偽善（ルカ 12 : 1 ; マタ 16 : 6、11）悪意、邪悪（I コリ 5 : 8）、異端（ガラ 5 : 9）など腐敗した行為や風習を表す。故に、旧約の律法ではパン種の混じった物を捧げる事を禁止した（出エジ 13 : 3 ; レビ 2 : 11）。イエスは「天国」をもって「パン種」と譬えられた。「からし種」のように、隆盛の速度を注視したに過ぎない。又、悪魔に宿られるのも同じである。ローマ時代の教会では、邪悪、偽善、異端などが教会の隆盛に伴って「ふくらんで」しまった。

「女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると」：創世記十八章六節及びサムエル記上二十八章二十四節に基づけば、パンを作るのは女達の仕事である。だから、ここでは特別な意味はない。

「三斗」：「セヤ」と同じである。「三セヤ」は「一エバ」であり、一度にパンを作る量である（参考：士 6 : 19）。「混ぜる」：パン種は粉の中で作用する。即ち：悪意、邪悪、異端などが意味するものは、見えない内部においてそれらが作用する。同じように、使徒たちの死後、ローマ教会の隆盛は、異端や間違った主義を伴い、内部まで侵され、真理が変えられ、神に似せてもっともらしく作り、悪魔の策略に陥って、憂患を世に残す。私たちは警戒を高めなければならない。

### 二十四、宝を隠す譬え マタ 13 : 44

イエスが海辺で群衆に向かって、連続して四つの譬え——種まき、毒麦、からし種、パン種——を話された後に、家に入り、弟子の要求に応じて「毒麦の譬え」を解釈された。続けて弟子達のために、「宝を隠す」、「真珠を捜す」、「網を下ろす」の三つの譬えを話した。「宝を隠す」と「真珠を捜す」の譬えを異同の点から見ると、一組の譬えとして成り立たせる事が出来る。類似点から見れば、地に隠された宝を見つけた人と真珠の商人が真珠を見つけた時、すぐにでも全てを捨てて、それと取り換える。なぜなら、彼らにとってそれは無上の宝だからである（参考：マル 8 : 36、37）。その場で聞いていたのは全て弟子たちであり、彼らは主に従った事により全てを犠牲にした（マタ 4 : 18~22 ; 参考：ルカ 12 : 33 ; ヨハ 6 : 68 ; ルカ 14 : 33 ; ペリ 3 : 8）。相違点から見れば、一人は無意識のうちに見付き、もう一人は常に捜し回っている商人が、探す途中で見付き。サマリヤの女のように、無意識のうちに井戸でキリストに出会った（ヨハ 4 : 1~30）。又、サウルがろばを捜しに行った時、無意識のうちに王となった（サム上 9 : 2~10 : 1）。ニ

コデモやコルネリオが熱心に捜し求めた結果、救いの恵みに出会った（ヨハ 3 : 1~15 ; 使徒 10 : 31, 32）。「宝を隠す譬え」は次の内容の通りである。

「天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである。」

この譬えを内容に沿って次の通りに解釈された。

「畑に隠してある宝のようなものである。」：戦乱や盗賊から防備するために、古代人は宝を畑に隠す風習がある（ヨブ 3 : 21 ; 箴 2 : 4 ; マタ 25 : 18, 25）。それゆえ、本人が死んだ後、その宝は偶然に発見されなければ、永遠に隠されたままになる。「宝」：キリストの福音を表す（ピリ 3 : 8 ; ヘブ 11 : 26 ; コロ 2 : 3）。「畑」：地上に建てられた「神の教会」を表し、そこには真理と恵みがある（I テモ 3 : 15）。

「人がそれを見つけると隠しておき」：人にそれを得られる事を恐れているわけではない、ただ、それを失うと、自分が得られなくなるという警戒心がある。「喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである」：パウロ自身が証したように、「しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。……主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、……キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、……わたしがキリストを得るためである」。彼は地位も力も捨て、主をもって喜びと頼りとした（ピリ 3 : 4~11 ; 参考：マル 10 : 21 ; マタ 6 : 24）。

## 二十五、真珠を捜す譬え マタ 13 : 45, 46

第六の譬えは「真珠を捜す譬え」と言われ、その内容は次の通りである。

「また天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見い出すと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである。」

この譬えを内容に従って次の通りに解釈された：

「良い真珠を捜している商人のようなもの」：「商人」は宝石商であり、その方面の専門家である。「良い真珠を捜す」事を生業としている。だから、追い求める事を知っている玄人——教えを伝える人を指す。「良い真珠」：それは、彼が「見い出す」事を望む「高価な真珠」である。これは、「唯一の主」（I コリ 8 : 6 ; 12 : 5）、「唯一の言」（II コリ 1 : 18, 19）、「唯一の御霊による真の教会」（I コリ 12 : 12, 13）を指す。これが無上の宝であり、それを得るためには、「行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである」という事が必要である。これは当たり前の事である。しかし、多くの人達は真理、真の教会を見つけたが、伝統と環境に束縛された。パウロのように勇敢になり、全てを捨てて主を得ようとはしなかった。実に惜しい事である。

## 二十六、網を下ろす譬え マタ 13 : 47~50

イエスが家に入って、弟子達のためだけに話された譬えには、「宝を隠す」、「真珠を

探す」、「網を下ろす」の三つがある。その中の「網を下ろす譬え」は、七つある譬えの中の最後の一つであり、その内容は次の通りである。

「天国は、海におろして、あらゆる種類の魚を囲み入れる網のようなものである。それがいっぱいになると岸に引き上げ、そしてすわって、良いのを器に入れ、悪いのを外へ捨てるのである。世の終りにも、そのとおりになるであろう。すなわち、御使たちがきて、義人のうちから悪人をえり分け、そして炉の火に投げこむであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。」

この譬えを内容に従って次のように解釈された：

「天国は、海におろして、あらゆる種類の魚を囲み入れる網のようなもの」は、この譬えの始まりである。四十九節の中において、主イエス自らが解釈され、この譬えを理解していく上において、多くの助けを得た。

ここの「網」は、長網の巾着網であり、二艘の舟に牽引されて海底深くまで達し、海にいる様々な魚を取ることが出来るトロール網である。原文では、マタイ四章十八節には「半円状の網——竹で作られた筒状の網」があり、四章二十節には「網——手で編んだ網」など区別されている。「海」：この世界を表す。主は漁師であったペテロ達に言った：「あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」（マタ4：19；ルカ5：10；参考：エゼ47：10；エレ16：16）。これは福音が伝えられた場所を表し、大海に「下ろされた」トロール網が「あらゆる種類の魚」を取る。つまり、各々の国、民族の中から、多くの人達が集まって地上に「神の教会」を建てる。

「それがいっぱいになると岸に引き上げ、そしてすわって、良いのを器に入れ、悪いのを外へ捨てるのである」：使っているのはトロール網であり、「悪人でも善人でもみな集めてきた」（マタ22：10）可能性がある。さばきの力は教会の使徒、或いはその後継者である伝道者にあり（Iコリ5：4、5；マタ18：17）、何時何処でも教会を清める事が出来る。しかし、「それがいっぱいになる」は、即ち「世の終り」が来た時、「御使い達が神の御座から出て」、神に代わってさばきを執行する——「良い」と「悪いのを外へ捨てる」（マタ13：41；24：31；25：31；黙14：18、19）。つまり、「義人のうちから悪人をえり分ける」仕事を執行するのである。「すわって」：さばきは厳粛に行い、寸分の疎かもあるてはならない事を表す。「悪い」：原文の意味によれば、死、腐敗、汚れた類のもの（レビ11：9～12）とされている。聖書には「イスラエルから出た者が全部イスラエルなのではなく」（ロマ9：6）と言われたからである。又、「大きな家には、金や銀の器ばかりではなく、木や土の器もあり、そして、あるものは尊いことに用いられ、あるものは卑しいことに用いられる。もし人が卑しいものを取り去って自分をきよめるなら、彼は尊いきよめられた器となって、主人に役立つものとなり、すべての良いわざに間に合うようになる。」（IIテモ2：20、21）とも言われた。つまり、福音の網の中で満足してはいけない。なぜなら、「義人」（Iヨハ3：7）だけが「器」の中に入れられる。この「器——桶」は、マタイ十三章三十節の「倉」、ヨハネ十四章二節の「住まい」、ルカ

十六章九節の「永遠の住まい」、ヘブル十一章十節の「ゆるがぬ土台の上に建てられた都」、及び黙示録三章十二節「新しいエルサレム」と同じであり、「天国」を譬える。教会の中にいる背信、不法の「悪人」は、終りの時に必ず懲罰され、「捨てられる」。即ち海辺でそのまま腐らせ、或いは鳥に食べられる（エゼ29：4、5；32：3、4）。「そして炉の火に投げこむであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」を受ける事である。

#### 二十七、種が成長する譬え マル4：26～29

この譬えはマルコの福音書のみ記してある。マタイ十三章の「パン種の譬え」と同じように、神の御言は容易に見えないが、闇の中で生長する力を持つと譬えた。もし詳しく話せば：神の御言には生命があり、一定の理において自然と成長し、実を結ぶ。もう一説では：「毒麦の譬え」は、この譬えが形を変えたものである。しかし、類似した言葉を使っているが、内容は全く違うものである。故に、「主の七つの譬え」とは無関係なもう一つの譬えと見たほうが正しい。この譬えの内容は次の通りである：

「神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。実がいと、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである」

「人」：イエス御自身、或いは主の弟子、及び現在の伝道者を表す。「種」：神の御言（Iペテ1：23～25）を表す。「神の国」：「ある人が地に種をまく」をもって表す。「種は芽を出して育って行く」：神の御言が生長し、「どうしてそうなるのか、その人は知らない」は、この譬えの中心的思想である。この譬えを聞いた人が、もし「その人は知らない」と聞いた時、必ず全ての方法を思い尽くして、この事を知るために努力して追い求めるであろう。主が設けられたこの譬えの効果は達成された。「地はおのずから実を結ばせる」：人の「心」を含ませる。人手に頼る必要がなく、神の御言は「自ずから出て」成長し、刈入れ時に至る。この時、主の見守りによって「成長」した事実を疎かにしてはいけない。一、神が生命の真理を人の心に撒かれた。二、魂が成熟して天国に入り、主が一ヶ所に集められる。しかし、この二つの間には、主は絶えず聖霊をによって日々供給されている。「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる」—— 一定の法則に従い進行する（Iヨハ2：12～14；エペ2：8、10）。「実がいと、すぐにかまを入れる」：ヨエル書三章十三節を連想させる：「かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。」即ち、神のさばきはもう近い。

#### 二十八、一家の主人の譬え マタ13：52

イエスが七つの譬えを話し終えた時、五十一節で弟子達に向かって「あなたがたは、これらのことが皆わかったか？」と言われた：弟子は「わかりました。」と答えた。十節か

ら三十六節までにおける弟子達の質疑を主は親切に解釈され、天国に関わる全ての真理を理解した。よってこの「一家の主人の譬え」を話された：

「それだから、天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとを、その倉から取り出す一家の主人のようなものである」

この譬えは、七つの譬えの結語とも見られる。天国の真理を理解した弟子達は「学者」と見る事が出来る。「古いもの」：旧約聖書に記載されている隠れた真理を表し、「新しいもの」：主の啓示によって記載された新約聖書の真理を表す。弟子達は神の倉からこの真理を出して応用する事が出来る。

### 二十九、「収穫と働き人」の譬え マタ 9：37、38；ルカ 10：2

主が二回目の伝道周遊の時、聖書では：「イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやすになった」と記載されている。そして、ユダヤ人が羊飼いのいない羊の群れのように、路頭に迷ったら、誰に従って行くのか？何処に行って食物を捜すのか？このように、不安に満ち、不満の生活を送ると見られる（エゼ 34：5、6；エレ 10：21）。たとえ律法学者とパリサイ人が民達のリーダーであると自認しても（参考：マタ 23：16；ロマ 2：19、20）、彼らの霊性は低く、どうやって民達を導くというのか、それで主はここで弟子達に言われた：

「収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」

「収穫は多いが」：伝道する場所は神の畑である。すでに成熟しているので収穫するべく魂は多い。「働き人が少ない」：主に仕える伝道者が少ない。だから、収穫の主、イエスに願って、どうか多くの選ばれた伝道者を派遣して収穫するように。これは、十二使徒を遣わして仕事をさせるための「主の望み」である（マタ 9：37、38）

後に、主が七十二人を遣わして伝道に行かせた時も、同じ「望み」があった（ルカ 2：10）。

### 三十、「良きサマリヤ人」の譬え ルカ 10：30～35

ルカの福音書十章の中に通称「良きサマリヤ人」という譬えがある。なぜイエスがこの譬えを設けられたのか。それは、『ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。イエスは彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。彼は答えて言った、「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」。また、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」とあります。イエスは彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれ

のことでか』と、あるからである。古来ユダヤ人の社会において、仲間、近隣者などが共に苦しみを思いやり、共に喜怒哀楽を分かち合った隣近所を「隣人」と称した。又、律法の上においても隣人を愛する戒めがあった（出エジ20：16、17；レビ19：15～18）。しかし、後のユダヤ人は、同族をもって「隣人」とし、異民族を蔑視する思想は甚だ濃厚であった。しかし、主イエスは彼らを正すため、血統上の偏見について、隣人愛をもって各民族に広められた（参考：マタ5：43；ルカ10：29）。故に、この「良きサマリア人」の譬えを用い、律法学者に教えるためであった。律法学者は「試みる」をもって主に聞いたが、主を訴える口実を得るために企んだものではない。ただ主に永遠の命を得る方法を聞いただけである（参考：ヨハ8：6、マタ22：15～17）。

「良きサマリア人」の譬えの内容は次の通りである：

「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を歩いて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかっていたが、彼を見ると向こう側を歩いて行った。ところが、あるサマリア人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。」

この譬えを内容に従って次の通りに解釈する：

「ある人」：ユダヤ人を指し、彼はエルサレムからエリコに下っていた。エルサレムは山の頂上に建てられ、エリコは海平線の下、ヨルダン川沿いの低い所にある。地形高1220m、故に「下る」を使った。又、エルサレムは当時の首都であり、首都から地方へ下る、地方から首都へ上るといっても、常用的な使い方である（参考：使徒18：22）。エルサレムからエリコへ下っていく途中、盗賊に会う事が多かった。これは主イエスが設けられた譬えではあるが、事実その地方ではよくある事なのである。盗賊は「その着物を剥ぎ取り」、更に、「傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った」。つまり、この人は殴られて重い傷を負い、動けないまま血の海に倒れている。

「するとたまたまひとりの祭司がその道を下ってきた」：この人は「偶然」のように見えるが、実際は神のご案配により、この祭司がこの地を通るようにされたのである。祭司は順番に回ってきた奉職の当直を終えて、エリコの家で休むため帰ったであろう。なぜなら、そこには祭司の住まいがあるからである。彼は自分の目で負傷者が道に倒れているのを「見た」が、「向こう側を歩いて行った」。このような行動はあるべきではない。旧約の律法によれば、神の愛と見守りは家畜ですら例外ではない（参考：申22：1～4；出エジ23：4、5）。ならば人は言うまでもない（参考：イザ58：7）。祭司たる者は人に代わって神の聖なる事を行い、罪のために供え物と生けにえとを捧げる（ヘブ5：1）以外に

も、人と神の間を取り成す仲介者である。それが捨てられた負傷者を見て、憐れまない、介抱しないとは、残念の極みである。「同様に、レビ人も」：レビ人は祭司の次位に就き、聖なる宮の公務に従事する階級にあり、民達を教え諭す責任も担っている。彼は「この場所にさしかかってきたが、負傷者を見ると向こう側を通って行った。」彼らにどのような理由があるのか。盗賊の復讐を恐れているのか、仕事が忙しいからか、何にせよ、負傷者を置いてそこを立ち去る事は、愛のない行為である。

「サマリヤ人」：イスラエル国は紀元前七百二十一年にアッスリヤ王サルゴンに攻め入れ、民は捕えられ移された（列王上20章；列王下6：24～；17：5）；又、アッスリヤ国から移って来た異民族が住み着き（列王下17：24～）、残された民達と結婚し、混血種族が生まれた。アッスリヤの移民たちは偶像を拝む。故に、人種が不純なだけではなく、宗教も混乱した（列王下17：25～33）。ヨシヤ王が宗教を改め、人を遣わして偶像を壊し、人を偶像から離れさせ、神の元に立ち帰らせた（列王下23：15～20；歴代下34：6、7）。ユダヤ人達がバビロンから帰ってきた時、サマリヤ人も彼らの神殿修復を阻止しようと企んだ（エズ4：5、6）。故に、ユダヤ人はサマリヤ人と付き合いたくない、却って彼らを侮蔑した。その後、両者間の仲たがいは更に悪くなった（エズ4：7～23；参考：ネへ4章、6章；ヨハ4：9；マタ10：5）。上記の通り、主は譬えの中で隣人愛に民族の境界はないと含ませた。それは故意に同族を思いやらない祭司とレビ人を挙げたほか、ユダヤ人が侮蔑するサマリヤ人を挙げ、その愛ある行いを通してユダヤ人達の偏見思想を破るためであった。そのサマリヤ人は負傷者を見て、「気の毒に思い」、すぐに「その傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いで」あげた。「油」：原文ではオリーブ油であり、パレスチナの住民は、旅行時常に携帯する。オリーブ油と酒を食品と医療品にした（参考：創28：18；ヨシュ9：13）。酒には消毒作用があり、油には傷を潤し、痛みを止める事が出来る（イザ1：6）。「自分の家畜に乗せ」：つまり、彼は負傷者を家畜に乗せた後、自分は歩き、家畜を引き、「宿屋に連れて行って介抱した」。このような労苦を厭わない行為は、絶大なる愛を持ち、「気の毒に思い」から来たものである。これだけではなく、彼は「翌日」、「デナリ二つを取り出して——デナリはローマの貨幣で、およそ二日分の賃料——宿屋の主人に手渡し」、「この人を見てやってください」と頼んだ。又、その他の費用については、後日支払うと約束した。全てに行き届いた配慮の愛である。

譬えはここで終わるが、主は律法学者を刺激せずに、問答をもって続けられた——サマリヤ人の愛はどんなものかを明言しなかった。ただ、この譬えの中の三人の人物に下す判断を促した：「だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。結果律法学者の判断は正しく、私心なく答えた：「その人に慈悲深い行いをした人です」。この時、主は彼に教えられた：「あなたも行って同じようにしなさい」。意味として、あなたは私に「では、わたしの隣り人とはだれのことですか？」と聞いてきた。そして、今、あなたは慈悲深い行いをした人が彼の隣り人である事を理解した。では、あなたの愛する者があなたの隣り人である。言い換えれば、民族観念に拘ることなく、あなたの助けやあなたの愛を必

要とする者は、皆あなたの隣り人である。あなたも行って同じようにその人を愛せよ。

### 三十一、パンを借りる譬え ルカ 11 : 5~8

ルカの福音書十一章では、イエスがある場所で祈られた事が記載されている。祈りの後、ある弟子が主に祈りの仕方を教えて下さいと願い出た。だから、主は「祈りの言葉」を彼らに口伝した（ルカ 11 : 1~4 ; マタ 6 : 9~13）。その後、祈る時には、熱心と忍耐をもって切に求めるよう弟子達に教えるために「パンを借りる譬え」を設けられた：その内容は次の通りである。

「あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に行き、『友よ、パンを三つ貸してください。友だちが旅先からわたしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから』と言った場合、彼は内から、『面倒をかけないでくれ。もう戸は締めてしまったし、子供たちもわたしと一緒に床にはいつているので、いま起きて何もあげるわけにはいかない』と言うであろう。

しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう。」

この譬えは、内容は簡単ではあるが、二つの意義を持っている。一つはパンを借りる譬えで、もう一つは教えの部分である。初めに「パンを借りる譬え」の重要な意義について次の通りに述べられる：

パンを借りるという中心的な真理は、「如何にして切に祈るか」である。故に、友達の関係をもって、神と人との関係を表した。隣人からパンを借りるとは、父なる神に祈り求める事を表す。彼は愛の欠けた隣人ではあるが、友達がしきりに願ったので、見捨てる事も出来ず、起き上がって必要なものを出してあげた。慈愛の父なる神は言うまでもなく、熱心と忍耐の祈りの前に、彼にとって必要とする物を与えないわけがない。故に、何を求めるにしても、例えば聖霊を求める時、熱心さにおいては、もしも次第に増し加えられるなら、父なる神は必ずその求めに応じ、成就させてくださる。

この譬えを内容に従って解釈された：

「だれか」：パンを借りられた隣人であり、父なる神を指す。神は全ての恵みの源である（1ペテ 5 : 10）。「その人のところへ真夜中に行き」：パレスチナの夏は雨水がない乾燥時期であり、地面が石灰質のため、その暑さは形容し難い。だから、暑い昼間の時間を利用して休み、夜に旅行する人もいる。よって、夜にパンを借りる事が起きる。「パンを三つ貸してください。……何も出すものありません」：遠路から来た旅人がお腹を空かせているのに、もてなす物が無い。これは、ユダヤ人の風習上、無礼なだけではなく、義務も尽くさないのであり、非常に恥ずかしい事である。古代ユダヤ人は、自分の家で小麦粉を挽き、水を入れて生地を作り、かまどに入れて焼き上げパンとした。彼らは毎日、一回必ずパンを焼く。その夜には残ったパンを全て食べる。又、新しい生地は明け方にならないと焼けない。故に、隣人にパンを借りる必要があった。「友だちが旅先からわたし

のところに着いたのですが」この旅人は「飢え渴く魂」である（アモ8：11；参考：イザ32：15）。「パンを三つ」は一人の一食分であろう。「面倒をかけないでくれ」は愛も友情もない徹底した拒絶である。この時、友情だけではパンは借りられない。しかし、イエスが本章八節の末尾において：「起き上がって必要なものを出してくれるであろう」と言われた。その通りである。だが「友人だからというのでは起きて与えない」、「しきりに願うので」与えた。当時の状況から見て、時は深夜、友人は戸を閉めた。もし、彼が門の前で立っているだけで、声を出さない、或いは叩くだけでパンを借りようとするなら、家の中にいる友人が彼を見る事はない。「しきりに願うので」と訳されているのは意識ではあるが、相応しい訳である。彼は無情な拒絶を受けたが、闇夜の中に立って、二度三度大きな声で求め、或いは熱心に求めて門を強く叩き、起きて与えるまで叩く（参考：ルカ18：1～8）。原文の意味の文字として、「恥ずかしさもなく切に求める」、或いは「恥も外聞もなく求める」と訳され、実際の状況を詳しく描写する事が出来た。Benjamin Wilsonの訳本では（importunity=しつこい）と訳したが、それでも十分な真意を表していない。このように、人の助祷であろうと、自身の求めであろうと、「恥ずかしさもなく切に求める」事が必要である。

新旧約聖書から如何にして祈り求めるかの実例を見てみよう：例えば、アブラハムはもうすぐ滅ぼされるソドムのために、神に赦して頂く様頼んだ（創18：23～33）。ヤコブがヤボクの渡りで神の使いと組打ちした時、祝福しなければ帰らせないなどは、切なる求めである（創32：24～29）イエスがツロとシドンで伝道した時、カナンの女に出会い、娘を憐れんで下さいとイエスに求めた。その時、主は無視しただけではなく、彼女を犬と例えて軽視された、しかし、彼女は謙虚に受け入れ、更に信仰を表した。このような恥も外聞もない求めは、却って主に称えられ、期待した恵みを得る事が出来た。つまり、絶え間なく求めれば、或いは失望せず、忍耐して求めれば、勝利を得る最大の武器となる。

人が神に求める事は、重要であればあるほど、容易には得られない。又、長い間求めたものを得た事は、容易に得た事よりも喜びは大きい。時には、真の神は故意に人の求めを拒絶される。それは彼の切望の程度がどれほどかまた、十分な信仰と忍耐や謙虚があるのかを見極めるためである……。人と人の間に、「しきりに願う」でさえ感動させるのに、慈愛に満ちた父なる神は言うまでもなく、切に求めれば必ず与えられる。

ルカ十一章九節～十三節では、前段落の教えの部分に続き示された：真の神は慈愛なる天の父である事を信じ、祈りについて切実な指針を示された：「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」と言われた；又、「すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである」と約束された。「求める」の言葉は祈りの単純状態で、「捜せ」は一步進んだ熱心な探求であり、「門を叩け」は更なる一步進んだ熱心な求めである。もし、応じなければ永遠に止む事はないという決意の求めである。このように、熱心と労力が進歩して、より切実となれば、その得るものはより大きくなる。熱心に

求めると得られた結果は、もちろん正比例する。

続いて「父」と「子」をもって例とした。「悪い者であっても」：肉体を持った父は、誰一人として完全ではない。しかし、父は子の要求に対し、「パンを求めるのに、石を与える——食べられない無益な物；魚を求めるのに、へびを与える——危険な動物——を魚として与えるのか？卵を求めるのに、さそりを与える——猛毒を持つ蟲」を与える事は絶対でない。却って「自分の子供には、良い贈り物を知っている」、「天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあるか」であり、肯定された約束である。魚やパンは肉体の必需品に過ぎないが、聖霊は霊の生命である。父なる神は日常の飲食を与えるだけではなく、私達の信仰を守り、又、新しい生命の原動力——聖霊を求め人に与えられる。

### 三十二、「愚かな金持ち」の譬え ルカ 12：16～20

イエスがルカの福音書十二章の中で、「愚かな金持ち」の譬えをもって主に従った群衆に教えられた。群衆の中のひとりがイエスに言った。「先生、わたしの兄弟に、遺産を分けてくれるようにおっしゃってください」。この事によって連想されるのは、老いた父がまだ床の上にいるのに、子供達の心の中は、遺産相続による激しい闘争が芽生えている。この人もそうなのかについては分からないが、彼はイエスの名声、信用、及び公義な判決を利用して、家庭の争いを解決しようとした。故に、主は彼に答えられた：「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか——だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」。律法の定めによれば、長男が財産の三分の二を得て、弟が三分の一を得る（申 21：15～17）；なぜ彼らは律法の定めに基づいて行わないのか？当時の「ラビ」は、これらの事を代行するものであった。しかし、イエスは彼らの財産問題について関わる事を許さなかった。主が世に来られて、人をさばく力はあるが（ヨハ 5：22）、家庭内の雑事をさばく為ではない。

群衆が貪欲にならないための警戒として、この機会を利用して教えられた：「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい」。「貪欲」は常に争いの原因となり、罪である。キリストと神の国を継ぐことが出来ない原因の一つでもある（エペ 5：5）。それは全ての悪の根である（1テモ 6：10）。バラムは富に迷わされ、御使いから阻まれたが、イスラエル人達を呪いに行った。預言者として、間違った道を歩んでしまった（民二十二章～二十四章）。アカンは滅ぼされるべき物を愛し、結果イスラエル人に累を及ぼし、アイの人々に敗れ、自らも死を招いた（ヨシュ 7章）。預言者エリシャの僕ゲハジもナアマンの贈り物を貪り、結果ナアマンのらい病が彼に感染した（列王下 5：20～27）。これらは貪る者の鑑である。故に、この罪を避けるためには、必ず身を慎んでいなければならない。「なぜなら、人の命は家の豊かさによらない」：命の長短と財産の多寡は無関係であり、真の命と富には一切の関係もない。もし金が命を支配したとして、金持ちが長寿になり、或いは永遠の命を得るとしたら、それこそ事実と食い違っている。

主は教えを前提として、この「愚かな金持ち」の譬えを設けられ、その内容は次の通りである：

「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思ひめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。

この譬えを内容に従って解釈された：

「ある金持ち」：初めから金持ちであり、今回の「豊作」は彼の勤労と自然の条件によって得た収穫であり、彼の財産は激増した。本来これは神の恵みであるが、彼はこの事を見落とした。彼は自分の努力の成果であると思ひ、感謝の心を表さなかった。もちろん彼は正当な手段によって得たが、感謝をしなかった。これは彼にとって大きな間違いである（参考：ロマ1：21、22；詩49：16～20）。それによって、彼の言葉の中では「私」がよく使われていた。つまり、彼がわがままである事が分かり、自分の事しか考えていない。

「わたしの作物をしまっておく所がない」；主の祝福は人を富ませる、主はこれになんの悲しみをも加えない（箴10：22）。しかし、実際問題として富が多ければ、悩みも多くなる。これは普遍的な事実である。真理を論ず物語がある。ある金持ちがいた。毎日財務管理の繁雑に追われ、夜も眠れないほどであった。妻は夫が隣で豆腐を売っている貧しい人にも劣ると嘆いた。故に、金持ちはこっそりと貧しい人の所に行き、無条件で金を貸し、商売を拓げるように勧めた。翌日から彼の奏でる胡弓の楽しい音色が聞こえなくなった。金持ちの妻が不思議に思った時、金持ちが言った：「隣の家は金に潰された、悩みが彼から楽しさを失くした。」

譬えの中の金持ちは又言った：「こうしよう」。彼は頭を使い、計画を実行しようとした。「わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう」。人から見れば、計画を実行する彼はとても賢い。しかし、彼は感謝の気持ちを知らない（申8：18）、自分の事だけを考え、貧しさに苦しむ人の事を考えない。いわば今生の飲み食いと享樂しか顧みない人である。このような人は、神様の前では愚かな存在に過ぎない。

彼はこの計画を成し終えた後、自分の魂に言った：「たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ」。この金持ちは、自分の財産の安全、生活の安逸だけを考え、その財産を地上に蓄えた。しかし、主は教えられた：「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ……天に、宝をたくわえなさい」（マタ六：19、20）。彼は財産と食料を蓄え、「長年分の食糧」があるため、貧し

さの不安もなく、「さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ」と思った。彼の考えはルカの福音書十六章の「金持ちとラザロ」の譬えの金持ちと同じである。彼は紫の衣や細布を着て、毎日贅沢に遊び暮していた。貧しい人ラザロを憐れむ心はなく、又、将来帰るべき場所も考えず、目の前の享樂だけを見ている。このような人は、祭壇の傍まで引かれた牛や羊のように、何時死が臨まれるかも知らず、同じ事を反芻している（ヤコ5：5）。彼は安逸な幸せを享受したかったが、死期が近づいた。このように神を知らず、ただ地上の安逸な快樂だけを求める事は、愚鈍にして拙劣事である（参考：マタ11：28）。神は彼に言われた：「愚かな者よ」。古人の言葉によれば、「計画は人にあり、成敗は天にあり」と言われた。人から出た万全の計画は、信頼できるか？「あなたがたは、あすのこともわからぬ身なのだ。あなたがたのいのちは、どんなものであるか。あなたがたは、しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧にすぎない」（ヤコ4：14；参考：箴1：32）。「あなたの魂——生命は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか」。生命は神の手にあり、人自身が支配する事は出来ない。この事を理解して、遠い将来の事を思慮すれば、愚かな事にはならなかったはずである。ダビデが言ったように：「まことに人は影のように、さまよいます。まことに彼らはむなしい事のために騒ぎまわるのです。彼は積みたくわえるけれども、だれがそれを収めるかを知りません」。（詩39：6）。正にその通りである。今夜死んでしまったら、金持ちが自分の魂に言った慰めの言葉は、水の泡となって消えてしまうではないか。誰がこのような事は自分に臨まないと言い切れるのか？

イエスは二十一節で教えられた：「自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。意味は、自分の享樂のために財産を蓄え、神の救いの事業、或いは人を憐れみ、同情する善行の上に使わない（Iテモ6：17～18；伝5：10）。このような人は、神の御前においては「富んでいる者」とはいえない。

だから、真理の上にいる兄弟姉妹達よ、気をつけなさい。主が「不義の管理人」の譬えを話された後、又：「どの僕でも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」（ルカ16：13）と結びの言葉を話された。あなたの目の前に貧しい仲間がいれば、温かい手を差し伸べて彼を憐れみ、主の愛を実行し、「無知な金持ち」となってはならない（ルカ12：33）。

### 三十三、「目を覚ましている僕」の譬え ルカ12：35～38

主の再臨について話された譬えが二つある：「目を覚ましている僕」と「忠実な僕」である。

「腰に帯をしめ、あかりをともしていなさい。主人が婚宴から帰ってきて戸をたたくとき、すぐあけてあげようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰ってきたとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは、さいわいである。よく言うておく。主人が帯をしめて

僕たちを食卓につかせ、進み寄って給仕をしてくれるであろう。主人が夜中ごろ、あるいは夜明けごろに帰ってきて、そうしているのを見られるなら、その人たちはさいわいである。」

「腰に帯をしめ、あかりをともしていなさい」：慎重、警戒をもって準備する態度。東洋式のコートを着ていて敏捷な仕事を必要とする時、必ず腰に帯を締めなければならない。明かりを灯すのは迎えの準備をするためである（Iペテ1:13；参考：マタ25:1~13）。

「婚宴」：「盛大な宴席」或いは一週間にも及ぶ「婚宴」と見られる。「夜中ごろ、あるいは夜明けごろ」：主人が帰ってくる時間は定かではないため、こう言われた。古代ヘブル人達は、日没から翌朝日の出までの時間を三つの時間帯に分けていたが、ローマ人は四つの時間帯に分けていた。それは夜、深夜、鶏鳴と明け方である。この夜中ごろ、或いは夜明けごろとは、深夜或いは鶏鳴の時間であり、主人が帰ってきて門を叩く。例えば：黙示録三章二十節「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中には行って彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」。僕は「すぐあけてあげる」とは「目を覚ます」の表れである。「その僕たちはさいわいである」：主人は僕たちを食卓に着かせ、自ら帯を締め、進んで彼らに給仕し、友達のように接待する。

#### 三十四、「忠実な僕」の譬え ルカ12:42~48

ペテロは「目を覚ましている僕」の譬えを聞いた後、三十七節の約束についてイエス様に尋ねた：「主よ、この譬を話しておられるのはわたしたちのためなのですか。それとも、みんなの者のためなのですか」。その意味は、「このようなさいわいを受けるのは、十二使徒なのか？それともすべての信徒か？」（参考：マタ19:27）ということである。故に、主は弟子達に「忠実な思慮深い家令」の譬えを話された。

「主人が、召使たちの上に立てて、時に応じて定めのある食事をそなえさせる忠実な思慮深い家令は、いったいだれであろう。主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。よく言うておくが、主人はその僕を立てて自分の全財産を管理させるであろう。しかし、もしその僕が、主人の帰りがおそいと心の中で思い、男女の召使たちを打ちたたき、そして食べたり、飲んだりして酔いはじめるならば、その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰って来るであろう。そして、彼を厳罰に処して、不忠実なものたちと同じ目にあわせるであろう。主人のころを知っていながら、それに従って用意もせず勤めもしなかった僕は、多くむち打たれるであろう。しかし、知らずに打たれるようなことをした者は、打たれ方が少ないだろう。多く与えられた者からは多く求められ、多く任せられた者からは更に多く要求されるのである。」

「家令」：単数を用いて使徒達を表す。家令の任務は忠実と思慮深さをもって家中の人を管理する。時に応じて彼らにパンを与える（ヨハ21:15~17；Iペテ5:2）。「召使たち」：一般的な会衆を表す。「主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見ら

れる僕は、さいわいである」：ペテロ達は一般信者の家令である。もし使徒達が忠実に主を迎え入れる準備をし、同じように群衆を導けば、主の再臨の時には、彼らの負う責任は更に重く、「主人はその僕を立てて自分の全財産を管理させるであろう」（44）。もし僕が主人の帰りが遅いと心の中で思い、男女の召使たちを打ち叩き、そして飲み食いして酔い始め、そして、気がつかない時に主人が帰って来て、「彼を厳罰に処した」。（別の訳では：「彼を切り離す」、「彼の腰を斬る」の意味がある（参考：ヘブ11：37；歴代上20：3）。又、「不忠実なものたちと同じ目にあわせるであろう」：原文では「不忠実な者」、「不信仰の者」と同じであり、「不完全」の意味をもっている。別の訳では：「頼れない人」とある。主人の心を知っていながら、それに従って用意もせず勤めもしなかった僕は、多く鞭打たれるであろう。「しかし、知らずに……」：一般の群衆を表す。神の御旨を知らないため、同じ罪を犯しても（レビ5：17～19）、受ける刑罰は軽い（参考：創18：25）。「多く与えられた者……、多く任せられた者……」：つまり、特別な使命を持ったペテロ達の責任は、特別に重いのである。（Ⅱテモ2：15；Ⅰペテ5：2～4）。

### 三十五、「気候兆候」の譬え ルカ12：54～56

イエスがルカの福音書十二章四十九節から五十三節において、信じると信じないについての争いを話された後、「気候兆候」の譬えを話された：

「あなたがたは、雲が西に起るのを見るとすぐ、にわか雨がやって来る、と言う。果してそのとおりになる。それから南風が吹くと、暑くなるだろう、と言う。果してそのとおりになる。偽善者よ、あなたがたは天地の模様を見分けることを知りながら、どうして今の時代を見分けることができないのか。」

ユダヤ地の西方は地中海であり、雲は西から起きる（参考：列王上18：44）、西南は暑いシナイ荒野やアラブ砂漠があり、南からは熱い風が吹いてくる（参考：エレ4：11、12）。地上の生活から天地の気候を知る事が出来るのになぜその熱心さをもって神の御旨を研究しないのか？「今の時代」はメシヤ来臨の兆しである。

(1) バプテスマのヨハネは人の心を感動させ、救い主が来た事を証明した。

(ヨハ1：26、29～34)

(2) イエスは多くの奇跡を行い、御自分が神の御子である事を証明された

(ヨハ3：2)

### 三十六、「被告」の譬え マタ5：25、26；ルカ12：57～59

イエスが「気候兆候」の譬えを話された後、又話された：

「また、あなたがたは、なぜ正しいことを自分で判断しないのか。たとえば、あなたを訴える人と一緒に役人のところへ行くときには、途中でその人と和解するように努めるがよい。そうしないと、その人はあなたを裁判官のところへひっぱって行き、裁判官はあなた

を獄吏に引き渡し、獄吏はあなたを獄に投げ込むであろう。わたしは言って置く、最後のレプタまでも支払ってしまうまでは、決してそこから出て来ることはできない」

(ルカ 12 : 57~59)

「あなたがたは、なぜ正しいことを自分で判断しないのか」：別の訳では、「自分で正義とは何かを判断しなさい」とある。もし正義を知っているのなら、いい加減には出来ないし、行うべきである。そのため、主はこの譬えを話された。「あなたを訴える人と一緒に役人のところへ行くときには、途中でその人と和解するように努めるがよい…」意味として、常識ある人が勝訴できないと知り、法廷に入ることなく、道の途中で平和的に解決する。「裁判官」：神を表す。「道の途中」とは、「まだ生きている時に、神の御前にて悔い改める」を表す。「獄吏」は御使いを表し、「獄」は地獄を表す。「その人と和解するように努めるがよい」：原文では、「和解を得て、赦されるように手を尽くす」という意味がある。

この言葉は、マタイの福音書の五章二十五節から二十六節にある譬えとは似ているが、その意味は違う。マタイの譬えは兄弟との仲直りについての教えであり、ルカでは、人々が悔い改めて、神の御前にて赦しを求め、神と和睦する事を教える。

### 三十七、実を結ばないいちじくの木 ルカ 13 : 6~9

ルカの福音書十三章では、ユダヤ人はピラトが叛乱を鎮圧するため、ガリラヤ人を殺し、聖なる宮を汚したとイエスに報告した。ユダヤ人は祭りを利用して騒動を起こし、ローマ政府に反抗して独立を求める事は常にあった。しかし、この事件がどの派に属していたかは、歴史上の記録から断定するのは難しい。思いがけない災害に遭うのは、神が悪人に対する一種の懲罰であると、ユダヤ人は信じていた。故に、この事を報告した人は、ヨブの友達がヨブに接したように、間違った観念を抱いていた(ヨブ 4 : 7 ; 8 : 4)。だから、イエスはこれを聞いた後、責めの口調で反問された：「それらのガリラヤ人が、そのような災難にあったからといって、他のすべてのガリラヤ人以上に罪が深かったと思うのか。」

(ルカ 13 : 2) 主の意味として：「あなたがたはこの人達よりも良いというのか、それとも、愉快的な心を抱いてこの事件を見ているのか」である。故に、彼らに警告し、注意して言われた：「あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」(ルカ 13 : 3)。又、かつてエルサレムで起こった事件を引用した—— シロアムの塔が倒れたためにおし殺されたあの十八人——を例とし、彼らに自身を反省させ、又言われた：「この人達はエルサレムの他の全住民以上に罪の負債があったと思うか」(ルカ 13 : 4) 続けて「あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」(ルカ 13 : 5) 主は災害や苦難に遭った人達が罪人であると否認されなかった。却って彼らの間違いを正そうとされた——他人の罪過だけを注視してはいけなし、又自身の反省を忘れてはいけなし。(参考：マタイ 7 : 1~5)。

これらのユダヤ人の報告を聞いて、イエスはこの「実を結ばないいちじくの木」の譬えを設け、ユダヤ人に悔い改めるよう戒められた。この譬えの内容は次の通りである：

「ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えて置いたので、実を捜しにきたが見つからなかった。そこで園丁に言った、『わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところに来たのだが、いまだに見あたらない。その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか』。すると園丁は答えて言った、『ご主人様、ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから。それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください』」

この「実を結ばないいちじく」の譬えを内容に従って解釈された：

「ある人」：真の神を表す。「ぶどう園」：旧約聖書の中では、イスラエル人、或いはイスラエル国を表す（詩80：8～16；イザ5：1～7；エレ2：21；12：10；エゼ15：1～6；ホセ10：1）。故に、この譬えの中では、ユダヤ民族が居住するユダヤ国と見るべきであろう。——「凶悪な園主」の一文を参考して下さい。「いちじくの木」：イスラエル人は恵みにより選ばれた、唯一の秀でた民族であり、特別の地位を与えられ、模範の国となって神の御名を栄える（申14：2；4：6～8）。しかし、歴史上の事実はこう告げた：ユダヤ民族の歴史は罪を犯し、神に背き、警告を受け、悔い改める……の繰り返しであった。例：「実を捜しにきたが見つからなかった」：聖書では、常に「樹」と「実」をもって「人と行い」を譬える（マタ7：17、18；詩1：3）。主が世にいた時のユダヤ人は、特に民族を代表する者、民達を導く宗教家達がうわべだけの偽善を装っていた（マタ23：23；6：2）。故に、彼らの実は神を栄える事が出来ないだけでなく、却って神の名を冒とくしている（ロマ2：24；エゼ36：20；参考：マタ23：13、15）。

「そこで園丁に言った、『わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところに来たのだが、いまだに見あたらない。その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか』」。「園丁」はぶどう園の働き人である。即ち民族と国を愛するイエスを表す。「三年間」には幾つもの解釈があるが、バプテスマのヨハネから始まって、イエスが世で伝道された三年間の期間であると、私達は思っている。即ち民達の悔い改めの時期であり（マタ3：5～8；4：17）。神の寛容と忍耐の期間でもある。神はどの時代においても民達に、絶大な寛容と忍耐を顕された。しかし、彼らの改めない望みにより、いたずらに恵みを受けたと認めざるを得ない。だから、「その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか」と棄てられる事に遭うのである。バプテスマのヨハネの警告によれば：「斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ」（ルカ3：9）。実を結ばない樹は無用の長物だけではなく、周りの良い樹にも害を与える。例えば悪人が善人に影響を及ぼすように（参考：伝9：18）。「切り倒してしまえ」の一言は、神の警告であると思う。厳しさの中にも神の慈しみがあり、これによって彼らが早く悔い改めるように促しているのである。もし、悔い改めずいたずらに恵みを受けているのであれば、

必ず切り倒されるであろう（歴代下 3 3 : 10 ; マタ 2 3 : 37）

「すると園丁は答えて言った、『ご主人様、ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから。それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください』」：幸いな事にイエスの取り成しにより（ロマ 8 : 34 ; I ヨハ 2 : 1, 2 ; ヘブ 7 : 25）、「ことしも、そのままにして置いてください」。これは彼らにもう一度期間を与えるよう神に求めたのであり、彼ら自身に努力してもらおう事である。「そのまわりを掘って肥料をやって見ますから」はもう一度手間をかけて、実が結ぶ事に期待する事である。例えばノア（I ペテ 3 : 20）、預言者たちの警告（歴代下 3 6 : 15）、全て彼らの悔い改めを期待していたのである（ロマ 2 : 4）。「それで来年実がなりましたら結構です。もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」：事実私達にこのように教えられた。ユダヤ人は主自ら、或いは使徒たちの呼びかけを聞き入れないばかりか、主を十字架につけ、使徒たちを迫害した。その結果、紀元七十年の大きな災いがすぐにやって来た（ルカ 1 9 : 43, 44）。

主はこの譬えをもってユダヤ人を警告されたが、私達の霊的な修行の上においても直接的な教訓があると考えられる：

水と霊のバプテスマを受け、主の内にあって私達は「真のユダヤ人」となった（ガラ 3 : 27~29 ; 4 : 6, 7 ; ロマ 2 : 28, 29）。そうであるなら、神が私達を栽培し、育成したのは生い茂る葉を見るためではない（ヨハ 1 5 : 2）。私達が善行、清い品格等の聖霊の実を結ぶ事を望み（コロ 1 : 10 ; ヨハ 1 5 : 2, 5, 16 ; ガラ 5 : 22, 23）、栄光を多く得る事である（ヨハ 1 5 : 8）。もしよい実を結ばないだけでなく、悪い実を結ばせたら（ロマ 1 : 29~31 ; ガラ 5 : 19~21）、主は私達がいたずらに恵みを受ける事を許されないし、却って報いを受けるであろう（黙 3 : 2, 3）。つまり、立派に着飾ったとしても、良い行いが伴わない信者の結果は、明らかである（マタ 2 1 : 19 ; 7 : 19 ; 3 : 10）。幸いな事に、伝道者の求めにより、主の忍耐と寛容を得て、私達にもう一度悔い改めのチャンスを与えられた（ヘブ 7 : 25 ; II ペテ 3 : 15）。故に、私達はこのチャンスを逃してはならない（II コリ 6 : 2 ; ヘブ 2 : 1~3 ; 3 : 12~15 ; 黙 3 : 19）。

主の内にいる兄弟姉妹達よ！主の来る日は近い（ヘブ 1 0 : 37）のでどうか私達を寛容して私達が後悔する事がないよう互いに勧め、互いに努力するチャンスを与えて下さるよう主に求めよう（ヘブ 3 : 15）。

聖霊報第五十期に掲載されている、筆者発表の「樹と実」を参考にして下さい。

### 三十八、客の譬えを用いた教訓 ルカ 1 4 : 8~11

イエスは招かれた客が上座を選ぶ事を見られた。パリサイ人が上座を好む事から（マタ 2 3 : 6 ; ルカ 1 1 : 43 ; 2 0 : 46）譬えをもって彼らに謙虚の真理を教えられた：

「婚宴に招かれたときには、上座につくな。あるいは、あなたよりも身分の高い人が招かれているかも知れない。その場合、あなたとその人とを招いた者がきて、『このかたに座

を譲ってください』と言うであろう。そのとき、あなたは恥じ入って末座につくことになるであろう。むしろ、招かれた場合には、末座に行ってすわりなさい。そうすれば、招いてくれた人がきて、『友よ、上座の方へお進みください』と言うであろう。そのとき、あなたは席を共にするみんなの前で、面目をほどこすことになるであろう。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。礼儀上はこの通りであるように、霊的なこともまた同様である（Iテモ1：15；ピリ2：6～8）。続けて十一節の主の教えでは：「おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」：このように末席を選んで座る事も大事な真理の一つである（詩18：27；箴15：33；16：18；29：33；イザ5：15；ヤコ4：6）。

### 三十九、主人の譬えを用いた教訓 ルカ14：12～14

「客の譬え」の後に続き、イエスは譬えをもって客を招いた主人に教えられた：

「また、イエスは自分を招いた人に言われた、「午餐または晩餐の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持の隣り人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから。むしろ、宴会を催す場合には、貧しい人、体の不自由な人、足の悪い人、目の見えない人などを招くがよい。そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」

主は客を招く事を禁じているわけではない（参考：マタ11：18、19）。あなたに返礼出来る客を招くよりは、愛をもってあなたに返礼出来ない客を招くべきである。なぜなら、客を招く事は社会の謙譲礼儀に過ぎないため（参考：マタ6：1～4、16、18）、これを善行として主から褒賞が得られるものではない。（参考：Iペテ13：3）。

主の来臨の時には、正しい人が先ず復活する、先に復活される人は幸いなるかな（Iコリ15：22～24；Iテサ4：16）。貧しい者を憐れむ事は、聖書の重要な教えの一つである（詩82：4；箴14：21、31；19：17；28：27）。

### 四十、盛大な晩餐会の譬え ルカ14：16～24

マタイの福音書二十二章にある「王子の婚宴」の譬えは、「二人の息子」と「凶悪な園主」の後に話された第三の譬えである。ルカの福音書十四章にある「盛大な晩餐会の譬え」と内容が類似しているが、時間と場所から見て、又、主がこの譬えを話された原因の違い等から、二つの譬えは独立している事がはっきりと分かる。

前者は神の宮において、悪意を持った、又、イエスを捕えようとするユダヤ人のリーダーに返答されたものである。後者は主がパリサイ人のリーダーに食事に招かれた（ルカ14：1）。そこには主人の友達、兄弟、親戚、或いは富んだ隣人が同席していた（12）。又、上座を争う事もあった（7）。その中にはイエスに反対するものは居たが、主の口から恵みの言葉を聴いて自発的に「神の国で食事をする人は、幸いです」（15）と言う人もいた。

しかし、この言葉を発した彼から、多少なりとも彼の自己満足が見受けられる。自身は神の国で食事をする資格を持った人であると思い込んだ。だが、主は彼と、彼が代表する群衆とが、その時にはこのような幸いを得られない可能性があるとして、この譬えを話された。その内容は次の通りである。

「そこでイエスが言われた、「ある人が盛大な晩餐会を催して、大ぜいの人を招いた。晩餐の時刻になったので、招いておいた人たちのもとに僕を送って、『さあ、おいでください。もう準備ができましたから』と言わせた。

ところが、みんな一様に断りはじめた。最初の方は、『わたしは土地を買いましたので、行って見なければなりません。どうぞ、おゆるしてください』と言った。ほかの方は、『わたしは五対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるしてください』、もうひとりの方は、『わたしは妻をめとりましたので、参ることができません』と言った。僕は帰ってきて、以上の事を主人に報告した。すると家の主人はおこって僕に言った、『いますぐに、町の大通りや小道へ行って、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の悪い人などを、ここへ連れてきなさい』。僕は言った、『ご主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席がございます』。主人が僕に言った、『道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい。あなたがたに言って置くが、招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう』」

「神の国で食事をする人は、幸いです」：この発言者はパリサイ人であると思われる。

「神の国で食事をする」は天国で恵みを受けるという意味である。しかし、この人は恵みを受ける者の資格について考えなかった。主は彼らに教えるため、この譬えを話した。

「ある人」は神を指す。「盛大な晩餐会」は神の恵み、或いは神と人との交わりを指す（イザ55：1～3）。「大ぜいの人」はユダヤ人、特に祭司、長老、律法学者、パリサイ人を指す。「僕」は使徒とその後の全ての伝道者を指し、又、イエスご自身を指す（参考：ルカ13：7、8）。「もう準備ができましたから」は主の十字架に頼って、罪人が神の御前に至る道が開かれた（使徒2：38、39；3：19～26；4：12、17、30）。「ところが、みんな一様に断りはじめた」。彼らの断る理由として：第一に土地のために主を信じない（Iヨハ2：16；参考：ダニ4：30）；第二に仕事の忙しさを理由とする（マタ13：22；参考：列王上19：19）。第一と第二は、土地を見た後、或いは牛を調べた後に買うべきであろう。買った後に見に行く、調べに行くとは、前後が矛盾している。第三は肉欲に溺れて主に近づかない（参考：申24：5；Iコリ7：29）。前二者の理由は充分でないと自覚したか、求める口調で「どうぞ、おゆるしてください」と話した。しかし、第三は充分な理由をもって、遠慮する事無く「わたしは妻をめとりましたので、参ることができません」と話した。

その僕は戻って、「以上の事を主人に報告した。」「家の主人はおこって」：当時の宗教家は誰一人として主イエスに従わなかった（ヨハ7：48）。この様に、神の愛をなおざ

りにする事は非常に恐ろしい事である（ヘブ 2 : 3）。なぜなら、彼らは主と係わりを持つ事を知らなかったのである。主人はまた僕に命じた、「いますぐに、町の大通りや小道へ行って、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の悪い人などを、ここへ連れてきなさい。」後に招かれたのは、霊性の上において病のある者、物質の上において欠けている者達であった（マタ 11 : 5、28 ; ルカ 5 : 32 ; 参考 : 黙 3 : 17）。「まだ席がございます」 : 天国の宴会場は多くの人々を収容する事が出来る（ヨハ 14 : 2）。主の御旨は、異邦人とユダヤ人が共に救いにあずかる事であり、故に「この家がいっぱいになるように」（エペ 2 : 19 ; ロマ 11 : 25、11、12）と言われた。「人々を無理やりにひっぱってきなさい」 : 来たくない人を指すのではなく、貧しい人々が富豪の家に行って、盛大な宴会を楽しむ勇気がないので、彼らを無理矢理引っ張ってくる必要があった。

「招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう」 : この言葉は主人が話された言葉なのか、それともイエスが譬えの外に話された言葉なのか？筆者はイエスが譬えを話された後、この譬えについて判決を宣告されたものであると思う。なぜなら、誰を宴会に招くか、または追い出してこの宴会に与らせないかは、全て主の思いによるものだからである。事後の哀願は既に間に合わない。運命は決まり、最早変更する事は出来ない（参考 : ヘブ 12 : 17 ; 箴 : 1 : 28 ; マタ 25 : 11、12 ; ヨハ 8 : 21 ; 使徒 13 : 41 ; ロマ 11 : 8）。

#### 四十一、邸宅を建てる譬え ルカ 14 : 28~30

この時は、主がガリラヤでの福音伝道が最高峰に達した時であろう。多くの人々が主に従い、（参考 : ルカ 9 : 57~62）、また、ルカの福音書十四章二十五節には : 「大ぜいの群衆がついてきた」という言葉がある。主は従って来た人々に覚悟を持たせる為、彼らに嚴重警告された :

- (1) 全ての事において主を第一優先とする（ルカ 14 : 26）
- (2) 十字架を背負う : 例えば、己を捨てる、従順になる（ルカ 14 : 27）

その後、第一の譬え「邸宅を建てる」を話された :

「あなたがたのうちで、だれかが邸宅を建てようと思うなら、それを仕上げるのに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため、まず、すわってその費用を計算しないだろうか。 そうしないと、土台をすえただけで完成することができず、見ているみんなの人が、『あの人は建てかけたが、仕上げができなかった』と言ってあざ笑うようになる。」

「邸宅」 : 原文では敵を防ぐ「高台」（別の訳では「見張り櫓」）とある。主に従うという事について、座ってよく考えなければならない。もし、「土台をすえただけで完成することができず、見ているみんなの人が、『あの人は建てかけたが、仕上げができなかった』と言ってあざ笑うようになる。」と同じようになれば、途中で終わる事になる。

#### 四十二、「戦う王」の譬え ルカ 14 : 31、32

第二の譬えは第一の譬え「邸宅を建てる」とは、同一の譬えであると見受けられる。

「また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えるために出て行く場合には、まず座して、こちらの一万人もって、二万人を率いて向かって来る敵に対抗できるかどうか、考えて見ないだろうか。もし自分の力にあまれば、敵がまだ遠くにいるうちに、使者を送って、和を求めるであろう。」

「まず、座して…考えて見ないだろうか」：先ずその事の困難について推定する：これは自分を検討する事であり、果たして敵に勝てるかを推定する事である。もし出来なければ、直ちに「和を求めて」—— 投降する。主に従う人として、適任出来ないのであれば、早めに考えるべきである。

#### 四十三、いなくなった羊の譬え ルカ 15 : 4~7

イエスがルカの福音書十五章で話された譬えについては、当時多くの取税人と罪人が主の話を聞こうとして近寄って来たのである。これらの取税人や罪人は、今までユダヤ人の律法を真剣に守った事がなかったので、律法学者やパリサイ人は彼らを「罪人」と呼び、彼らとの付き合いや、同席での食事を拒んだ—— 形式的な義を守る為、または彼らに感染されない為にも、パリサイ人はこのような行動をしていた。一種の上策であると思われられる。しかし、これらの軽視された「罪人」は、却って主の感化を受けて、主に近づき、主の教えを聞き入れた（マル 2 : 15 ; ルカ 7 : 37）。律法学者とパリサイ人は、彼らが嫌う取税人と罪人が主に近づくのを見て、主の品格を疑い、密かに議論し始めた（ルカ 15 : 1, 2 ; 参考 : ルカ 5 : 30 ; 7 : 34, 39 ; 19 : 7）。

主は彼らの議論：「この人は罪人を接待した」（I テモ 1 : 15）を通して、連ねてこの三つの譬えを話された：いなくなった羊の譬え、失くした金の譬え、放蕩息子の譬えである。どのような人が救われるかを彼らに解明する為であり、また、神から遠く離れているのは、あれらの所謂「罪人」ではなく、律法学者やパリサイ人であるという意味も含まれている。天使ですらも一人の罪人の悔い改めに喜び、その事をもって彼らを辱められた。また、神の心の広さについて、人の心の狭さや偏見とは完全に違っていると暗示されている。

故に、この三つの譬えには連続した関係が存在している：いなくなった羊と失くした金の譬えは、神が愛をもって罪人を探す事を表し、放蕩息子の譬えは、人が神の愛を感じて、悔い改める心が起き、立ち返って神に帰する為に行動する事を表す。この三つの譬えの調和関係から見て、失くしたにせよ、迷ったにせよ、第一は百分の一であり、第二は十分の一であり、第三は二分の一である。比例してみると、大きい物を失くした場合、その悲しみも大きい。その物の遺失を恐れ、及びその物の回復計画という事についても、同じように相違的な存在がある。

「いなくなった羊の譬え」については、マタイの福音書十八章十二節~十四節の中にも、同じ様な譬えがあるが、それは、子供を軽視してはいけないという主の教えの下において話された譬えであり（マタ 18 : 1~6, 14）、動機については全く違うと言える。

「いなくなった羊の譬えは」は以下の通りである：

「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。そして見つけたら、喜んでそれを自分の肩に乗せ、家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから』と言うであろう。よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。」

「持っている者」は羊の群れの所有者であり、「良い羊飼い」であるイエスを指す（ヨハ10：11；参考：エゼ34：12；詩23：1；80：1）。勿論、羊の群れはイスラエル人を指すが、広義では世の万民を指す（詩23：1；77：20；80：1）。「その一匹がいなくなった」は、神から離れた罪人（詩119：176；イザ53：6；Ⅱペテ2：5）を指す。しかし、「一匹」については罪人が少ないのではなく、神が「一人も滅びる事がないように」という意味である（Ⅱペテ3：9；参考：ルカ12：6、7）。また、一人とも、主はその者が神から離れ、迷いの道を歩む事を願わなかった。ほえたける獅子のような悪魔に食いつくされない為である（Ⅰペテ5：8）。いなくなった一匹の羊の為だけに、他の九十九匹を「野原」に残した。この「野原」は不毛の地ではなく、また猛獣の住む場所でもない。ただ家を建てて居住しようとする人がいない草地に過ぎない——「野原」と称しているが（マタ14：15）、牧場であり、また、安全な所でもある。故に、その九十九匹を野原に放棄したのではなく、牧場の中で僕達に管理させていたのである。羊を探す仕事は、僕を遣わして代行するのではなく、自ら「歩いて」探したのである（参考：ピリ2：6～8）。極めて苦勞な仕事ではあるが（マタ18：12）、主は全力を注いで負われた（参考：Ⅰペテ2：24）。つまり、主が探す対象は、譬えの内容から見て、パリサイ人や、律法学者ではなく、罪人や、取税人と遊女である。「見つけたら、喜んでそれを自分の肩に乗せ、家に帰ってきて」：「肩に乗せる」は、肩には力があり、力をもって羊を守る（出エジ19：4）。また愛と喜びの表現でもあり（イザ62：5；エゼ33：11；ゼパ3：17）、極めて勤勉な態度でもある（申32：10）。「家に帰ってきて」は罪人が主に救われ、天の家に帰り、神の交わりの中に加わり、神の国の一人となった（ルカ19：10）。「友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んでください。』」は、天使や古き時代において救われた聖徒達であり、七節に書かれている「大きいよろこびが、天にあるであろう」の「天にある」事である。

この譬えの末尾に、主は一言加えられた：「よく聞きなさい」。これは威厳を持った宣言である（参考：ヨハ1：51；3：11）。「悔改めを必要としない正しい人」は、実際悔い改めを必要としない人がいるのではなく（ロマ3：10、23）、この譬えにおいて、明らかにパリサイ人や律法学者がその九十九匹の羊であると指している（ルカ16：15；箴30：12；ルカ18：9～11）。確かに、彼らは宗教や道德生活においては、未だ道を迷った

事はないであろう。しかし、彼らは自らを義と称して、医者拒否した（マタ 9 : 12）。

「まさる大きいよろこび」：自らを義と称する者達を軽視しているのではなく、この悔い改めた罪人を大切にしているのである。

主は罪人を救う為、ダビデのように勇敢に立って、艱難や危機を辞さなかった（サム上 17 : 34, 35）。しかし、自らを民達のリーダー（マタ 23 : 2；参考：ロマ 2 : 19, 20）、民達の牧者（エゼ 34 章；アモ 1 1 : 16）として思っていたパリサイ人や律法学者は、さ迷う者を見つけない、散らばった者を導かない、傷を負った者を受け入れなかった。やがて大牧者である「主イエス」が来られて（ヘブ 1 3 : 20；I ペテ 2 : 25；5 : 4）、彼らのしたくない仕事を補ってくださったにもかかわらず、彼らは却って密かに主を議論した。故に、主はこの譬えをもって彼らに教え、また彼らを責められた。極めて時宜に適っている。

#### 四十四、失くした銀貨の譬え ルカ 15 : 8~10

いなくなった羊の譬えの後の第二の譬えは、「失くした銀貨の譬え」である。その内容は以下の通りである：

「また、ある女が銀貨十枚を持っていて、もしその一枚をなくしたとすれば、彼女はあかりをつけて家中を掃き、それを見つけるまでは注意深く捜さないであろうか。そして、見つけたなら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『わたしと一緒に喜んでください。なくした銀貨が見つかりましたから』と言うであろう。よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前でよろこびがあるであろう。」

「ある女」：慈愛と柔和、また忍耐をもって罪人を導く聖霊であり、聖霊によって建てられた「神の教会」である（黙 2 2 : 17）「銀貨」は世の人を表し（マル 8 : 36；参考：イザ 4 3 : 4）、ギリシャの銀貨ドラクメ（Drachmas）の事であり、一日の賃金に等しい。カイザルの肖像が刻印されているのはローマの銀貨デナリ（Denarius）であり、価値は同じであるが、似てはいない（マタ 22 : 20）。——「ぶどう園の譬え」の中にある「一デナリ」を参考にする——ドラクメ銀貨にはフクロウ、亀や女神像が刻印されている。だから、ある聖書解読家が「銀貨」にカイザルの像が刻印されているので、人の魂は神の像を表していると解いたが（創 1 : 26）、実際とは符合しない。一枚の銀貨を探す為に、女は全ての力を尽した：これは、主が教会を通して、さ迷う罪人を探す事を表している。神の聖なる目から見て、さ迷う罪人の一人一人が真珠や銀貨よりも尊い者である。「あかりをつけて」の「あかり」は、「神の御言」を表す（詩 1 19 : 105；参考：マタ 5 : 14, 15；ピリ 2 : 15, 16；エペ 5 : 13）。「家中を掃く」：塵は徐々に部屋の中に堆積する。しかし、掃除すると、部屋中に浮遊する。この様に、福音が伝えられた地域では、常に「天下をかき回す」存在とされたが（使徒 17 : 6；16 : 20；ヨハ 16 : 7, 8）、人に罪を認めさせる事も出来る（参考：列王上 17 : 18）。この様に、「神の御言」を通して一般的な「かき回す」を掃除し、さまよう罪人を探し出すのである。

この譬えの終りに、主はまた結びの言葉を話された：「よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前でよろこびがあるであろう。」  
「神の御使たち」は天使の事である。天使は地上にて悔い改めて救われる罪人を確かめたいと願っている（Ⅰペテ1：12；参考：ヨブ38：7；Ⅱコリ5：17）。これは、パリサイ人達を非難するという意味で話された：「天使ですらもこの様に、一人の罪人の悔い改めを喜んでいのに、なぜ、あなたがたの心はその様に頑なであるのか？」

総じて言えば、私達は主の御旨を理解しなければならない。目を上げて見よ、全てが失われた魂である。私達は自らこれらの罪びとを探し出し、彼らを主に帰させる責任を負わなければならない。主のようにさまよう罪人を探し出し、また、教会を通して失われた魂を引き戻さなければならない。

#### 四十五、放蕩息子の譬え ルカ15：11～32

律法学者とパリサイ人の偏見、心の狭さ等の間違った心理を非難し、また教えられた。主はルカの福音書十五章の中で、続け様に三つの譬えを話された：三つ目の「放蕩息子の譬え」の内容は、以下の通りである：

「また言われた、「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあったので、彼は食べることに窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやって豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしてい。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまった。ところが、兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が

肥えた子牛をほふらせなされたのです』。兄はおこって家にはいろいろとしなかったので、父が出てきてなだめると、兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下されたことはありません。それなのに、遊女どもと一緒にあって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのもものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』。

この「放蕩息子の譬え」を内容順序に従って二段落に分け、以下の通りに解釈することが出来る：

「ある人」は神を指し、「全てのたましいの父」である（創1：27；使徒17：25；ヘブ12：9）。「ふたりのむすこ」：「兄」は自ら義と称する律法学者やパリサイ人を指し、「弟」は罪人や、取税人及び遊女を指す。しかし、彼らは却って罪を知り、罪を悔い改めた人である。

この弟は父に求めて言った：「あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください。」  
「いただく分」：財産分与の律法によれば、長子は二倍の分を頂く。そして、彼には二人の息子がいた。だから、弟のいただく分は三分の一である（申21：17）。しかし、父親存命時における財産分与の要求は、これまで不当な行為であると考えられていた。だが、要求は既に提出されたので、「父はその身代をふたりに分けてやった」。「分けてやった」：神は人類を創造した時、自主権即ち自由の意志を与えた。なぜなら、神が人に求める事は、一種の「ロボット」ではなく、善悪を知り、自身で決定できる全き人である（創2：16、17）。だから、彼に自由に従って行う事を許可した（創3：5；参考：ロマ1：24、26、28）。  
一歩進んで考えてみると、人が得る富、知識、学問、知恵、健康など、全て神から賜った物である。しかし、外部の試み—— 悪魔の誘いに遭うと、すぐに「自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行った」。父親の監視出来ない所に行った。即ち神から離れ、罪の生活を送りに行った。神の下において監督されなければ、罪の源になってしまう。それは、罪の発動に任せて、神から賜った「財産」を罪の中で「放蕩に身を持ちくずして、浪費した」（参考：箴29：3；5：7～14）。人はこの様な状況の下において、自身の魂が「ひどいききに遭った」事を見つけ、絶対に心が「窮する」事からは免れない（参考：箴6：26；アモ8：11；エレ2：13、17；17：5、6、13）。「そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せた」は、悪魔の奴隷になった意味である（Ⅱテモ2：26）。ユダヤ人は豚を汚れた物とし、また豚肉を食べる事も禁止した（レビ11：7、8）。だが、放蕩息子は「豚を飼わされ」、最も卑しい仕事を受け持った。その時、「彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。」心の渇きによって、最大の困難にぶつかる結果となった。

この様な絶望の状況の下、彼はやっと「立ち返った」。この時、彼が第一に思い起こし

たのは父の家であった：「父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいる」。第二は間違いを認めた：「父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました……」。一人の罪人の悔い改める時の過程も同じである。先ず神の豊かな慈しみと憐れみを思い起こす（詩86：5、15）。次に自分の罪過を深刻に認識して恐れる（イザ6：5）。「わたしはここで飢えて死のうとしている」は、絶望の中での悲痛な叫びである。

「あなたのむすこと呼ばれる資格はありません」は、悔い改めた罪人は、ただ罪を認めて赦しを求め、過大な期待をしない（ロマ3：23）。「わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました」は、この様に過ちを悔いれば、「言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」人となる（箴28：13）。

「そこで立って」：心の中で悔い改めるだけではなく、既に行いの上において表している—— 実行（参考：ヤコ4：8）。「哀れに思っ」：天の父は先ず彼を憐れみ、「走り寄って」：息子を愛する感動の描写である。「その首をだいて接吻した」の「接吻」は、愛と和睦の象徴であり、愛を以って彼の過去の全ての過ちを包容した。「もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません」は、悔い改めの陳述であるにも拘らず、その下にはこう書かれていた：「しかし父は僕たちに言いつけた…。」これが一段落目である。子が父に懇願する前に、父は先ず彼の情景を赦した。天の父は悔い改めた罪人に対し、同じ様に彼らが今まで犯してきた罪過を最早記念する事はない。そして、愛と赦しを以って彼らを受け入れる。

この時、父親は僕達に四つの事を言いつけた：第一に「早く、最上の着物を出してきてこの子に着せよ。」弟は乞食の様になって帰って来た。もし身体の汚れを洗わなければ、どうやって着物を着るのか？聖書の中には身体を洗う事について記載されていないが、常識から見て、先ず身体を洗ってから着せるであろう。「着物」：イザヤ書六十一章十節には、「主がわたしに救の衣を着せ、義の上衣をまとわせた」とある。着物は神の救いと正しさの象徴である。悔い改めて立ち戻った罪人は、救いを着てその道程を経過するに至らなければならない：悔い改めるには、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受け、罪が赦され、聖霊の賜物を受ける（使徒2：38；22：16）。所謂「法に合ったバプテスマ」とは、イエス・キリストの御名によって、頭を低く垂れたバプテスマである（参考：ロマ6：3～7）。バプテスマを受けてキリストに帰すとは、即ち古き人を主と共に十字架につけて死に、罪がなく、また主と連なった新しき人となり、外見にキリストの行いが表れる—— キリストを着る（ガラ3：27；ロマ13：14；）事である。第二に「指輪を手にはめ」：「指輪」は力と栄光の象徴である。なぜなら、「印章のついた指輪」は「記号」を表す（創41：42）。法に合ったバプテスマを受けた人は、第二段階では、約束された聖霊の証印を捺され、また天国の嗣業を受け継ぐ証拠でもある（エペ1：13、14）。この聖霊はあなたの内なる心に住み、あなたが神の子である事を証明する。この様にして父なる神と密接な親子関係を築いて行けるのである（ガラ4：6）。また主自らが神の国に入る絶対条件として、水と霊のバプテスマを受けなければならないと話された（ヨハ3：5）。

第三に「はきものを足にはかせなさい」。「はきもの」：ユダヤ人の風習によれば、奴隷は永遠に裸足のままで歩く。はきものを履く事は、自由を得た事であり、もはや罪の奴隷とはならない（ヨハ8：34）。第四に「肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか」。「ほふって…食べて…」：罪を悔い改め、水と霊のバプテスマを受けて神の子となり、神の教会に加わる。日々霊の糧による祝宴の如く、享受すべき霊性が旺盛と造詣を得る（イザ25：6）。

父なる神の目において、この放蕩息子は再び子としての名分と幸を獲得した。「死んでいた—— 罪と過ちの中にて死す（エペ2：1；マタ8：22）—— 生き返る—— 神を信じて生き（ヨハ10：28）、いなくなっていたのに見つかったから（1ペテ2：25）。喜び祝うのはあたりまえである」（ゼパ3：17；雅2：4）。

弟は遠い所で放蕩に身を持ち崩して財産を使い果たした時、兄はいつも通り父親の為に「畑」を耕した。兄を象徴とする律法学者とパリサイ人は、日々陽射しに当たって労苦し、黙々と仕事をするその外見は、正に孝行息子と言えるであろう。しかし、不愉快な事が起きた：「音楽や踊りの音が聞えた」は、父親が弟の為に宴席を設けて、喜んでいた声である。この時、不満と不平の考えが頭を過った（参考：マタ20：12）。彼は喜びの声を聞いた時、すぐに家の中に入って父親と共に喜ばないだけではなく、却って「ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。」これらの事より彼の心の狭さが伺える。「これは何事なのか」の一節には非難の語気が含まれている。僕は自分が見た表面上の事情だけを彼に答えた：「あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなされたのです。」これは、死から生き返り、失くしたがまた得た、さ迷う中から立ち戻った為にしたのである。愛を以って子として引き取ったのであるから、この事について喜ぶのは当たり前な事である。しかし、彼は自分の肉親を歓迎しないだけではなく、却って「おこって家にはいろうとしなかった。」パリサイ人の正体を十分に表している（参考：ルカ15：2；19：7）。「父が出てきてなだめる」：兄は怒りを抑える事が出来ないと同時に、父親の待遇に不平を感じた：「わたしは何か年もあなたに仕えて—— 仕事を誇る、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかった—— 自らを義と称する；友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません—— 自らの義から生まれた不平。」（参考：ルカ17：10；イザ64：6）また、兄弟は不節制であるにも拘らず優遇される事に対し非難した：「遊女どもと一緒にあって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰ってくる。」これは父親の愛に対し正面から攻撃している。また注意すべき点では、彼は「父親」とは呼ばず、「あなた」と呼んである。また、「私の兄弟」とは呼ばず、「あなたの息子」と呼ぶ。「彼の財産」とは言わず、「あなたの財産」と言う等、彼は未だ父親の心情を理解していない。完全に父親の愛との繋がりを失くしている。有るのは少しの律法と道徳だけに過ぎない。この様に、律法学者とパリサイ人は、罪人に誠意を尽さない、父なる神の御旨を理解しない、罪人と席を共にしない、罪人の悔い改めにも嫉妬する。即ち自分を誇り、父親を批判し、兄弟を蔑視する態度

である。

父親は彼の頑固で無知な態度を見ても、真心を以って彼に教えた：「子よ——慈しみに満ちた声で呼んだ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。」

兄の不平を解消するために父親の取った行動は成功したであろうか？ 譬えの中にはこの点について提起されていない。しかし、パリサイ人や律法学者の頑固さを見て、彼らは永遠に拒まれて天国の門の外にいるかもしれない。

パウロも言われた：「ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。なぜなら、『主の御名を呼び求める者は、すべて救われる』とあるからである。しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあろうか。聞いたことのない者は、どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。つかわれなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。『ああ、麗しいかな、良きおとずれを告げる者の足は』と書いてあるとおりでである』。主はいなくなった羊、なくした銀貨、また放蕩息子の譬えでは、律法学者とパリサイ人の偏見を責めると同時に、私達に教えられ、パウロの教えと同じである：聖霊に遣わされた者は全て伝道者である（ルカ 4：18、19；ヨハ 20：22、23）伝えなければ人に主を信じさせる事は出来ない。信じなければ天国にある永遠の福祉を得る事が出来ない。だから、誰もがさ迷う魂を探さなければならない。あなたが世の終りの真の教会に属す者なら、自分の責任を自覚し、人々に神の愛を感じさせる機会を与え、立ち戻らせて主に帰させるべきである。

#### 四十六、「不正な家令」の譬え ルカ 16：1～13

主はルカの福音書十六章で一つの譬えを話された、通常「不正な家令」の譬えと称されている（ルカ 16：1～13）。譬えの中の主な言葉としては、「金持」、「家令」、「不正の富」等があり、多くの聖書解読家が違う角度から解読を試みたが、多くの意見を生じるに至り、聖書中の難解な聖句の一つとなった。しかし、私達が見るべき所は、イエス様が弟子を対象とし、未来を準備できるようにする為の教えである。

この譬えを二段落に分け、その内容は以下の通りである：

「イエスはまた、弟子たちに言われた、「ある金持のところにひとりの家令がいたが、彼は主人の財産を浪費していると、告げ口をする者があった。そこで主人は彼を呼んで言った、『あなたについて聞いていることがあるが、あれはどうなのか。あなたの会計報告を出しなさい。もう家令をさせて置くわけにはいかないから』。この家令は心の中で思った、『どうしようか。主人がわたしの職を取り上げようとしている。土を掘るには力がないし、物ごいするのは恥ずかしい。 そうだ、わかった。こうしておけば、職をやめさせられる場合、人々がわたしをその家に迎えてくれるだろう』。それから彼は、主人の負債者をひとりひとり呼び出して、初めの人に、『あなたは、わたしの主人にどれだけ負債があります

か』と尋ねた。『油百樽です』と答えた。そこで家令が言った、『ここにあなたの証書がある。すぐそこにすわって、五十樽と書き変えなさい』。次に、もうひとりに、『あなたの負債はどれだけですか』と尋ねると、『麦百石です』と答えた。これに対して、『ここに、あなたの証書があるが、八十石と書き変えなさい』と言った。ところが主人は、この不正な家令の利口なやり方をほめた。この世の子らはその時代に対しては、光の子よりも利口である。またあなたがたに言うが、不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう。」(1~9)

この段落の譬えを順序に従って、一つ一つ以下の通りに解釈する：

「金持」：万物は神によって造られた(ヨハ1:3)。詩人が言うように：「なぜなら、世界とそこに満ちる物とは、全て神の物だからである」(詩50:7~12)。故に神は天地の主であり(使徒17:24)、「大金持」である。

「家令」：ヨブは一日の内に全ての子と財産を失った時、信仰について述べた：「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」(ヨブ1:21; 参考：伝5:14~16)。人は裸で来て、裸で帰るのである：だから、世に有る全ての物を持ってくる事は出来ないし、持って帰ることも出来ない。故に、主人によって管理され、人は家令の地位にいるに過ぎない(創1:28; Iペテ4:10; 参考：創24:2~12; 39:5, 6)。

この家令は引継の機会を利用して、負債者に情けを掛けた；債務を五割、または二割と軽くした。これは情けを掛けられた者の中の二つの例に過ぎないが、数量の多少を重視して解釈する必要はない。家令の利口さは債務者自身に証書を書き直させる事であり、主人がその不法に気づいた時には、却って彼を褒めたが、その不義の手法を褒めたのではない。彼のした事は不義であるが、自分の未来の事の為に準備した。古人曰く：「転ばぬ先の杖」(参考：箴6:6~11)。だから、愚かな金持の様に、現状の為に蓄える事しか知らない(ルカ12:16~21)；或いは、日々贅沢に暮らす事しか知らない金持の様に(ルカ16:19~31)、未来の為に考えようとしなさい、実に愚かな事である(参考：Iテモ6:17~19)。往々にして家令の様な世の人が多く、その仕事振りは光の子よりも利口である(ヨハ12:36; エペ5:8; Iテサ5:5)。

九節：「私はまたあなたがたに言うが」の「私」はイエスである。主はここで特別に弟子達に教え、この節は譬えの中で最も重要な部分である。「不正な富」：富に「正しさ」や「不正」等はない。しかし、富は人を誘惑して不法を行わせ、或いは罪を犯させる；故に、富を貪る事は「全ての悪の根」である(Iテモ6:9, 10)。この世の富は、一時的であり、また人を誘惑して罪を犯させる物である。天の宝と比較すれば、「不正な富」と軽視される。不正と見られている世の富も、有意義に慈善事業、教育、伝道等の奉仕に使う事が出来れば、即ち人に益を成す事に用いられ(マタ10:40~42)、主も私達の親密な友となってくれる(箴18:24)。人が世で生活する為には、お金は確かに必要な物であ

る。しかし、信者はお金を以って「万能」と見てはいけない；なぜなら、災いが来た時、お金は人を助けられない、また人を満足させる、或いはお腹を満たす事はない。却って罪のつまずきとなる（エゼ7：19）。尤も形ある物が全て焼き尽くされる時、お金は最早無用の長物である（Ⅱペテ3：10～13）。だから、不正な富を以って友を作り、この富が無用の時、私達の善行が私達を「永遠のすまい」—— 天国に連れて行ってくれるのである（参考：ヘブ13：14；11：13～16；Ⅱコリ5：1、2；Ⅱペテ1：13）。

「小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして、小事に不忠実な人は大事にも不忠実である。だから、もしあなたがたが不正の富について忠実でなかったら、だれが真の富を任せるだろうか。また、もしほかの人のものについて忠実でなかったら、だれがあなたがたのものを与えてくれようか」（ルカ16：10～12）。後半の段落を以下の通りに解釈する：

この段落は教えの部分に属す。「小事」：人の日常生活、或いは管理人としてお金を任されて使う等は、神から見れば最も小さい事である。しかし、霊的な事、或いは永遠の天国の幸、魂の救い等については、世の生活と比べたら勿論「大事」である。管理人としてあるべき精神は「忠実」である（Ⅰコリ4：2）。もし、この所謂小事の上において忠実であるならば、主に仕えるという大事の上においても忠実である。逆に、小事に不忠実であるならば、勿論大事にも不忠実であろう。だから、主は別に「財産をあずける譬え」を話され、その中の主人は言われた：「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」（マタ25：21）。これと全く同じ事である。

「不正の富」は地上の富であり、「真の富」は未来にある天の上の幸、天国の嗣業を指す（Ⅰペテ1：4）。地上の宝は皆壊れ易く、一つとして永遠に変わらない物はない。ただそうであったとしても、あなたが主の御旨に従ってそれを使い、意義のない物に浪費せず、却って人を愛し、人を救う事に使うなら、永遠の命の幸、魂の救いをあなたに託す事が出来るのである。

人は空手で来た。また神から管理を任された物も「ほかの人のもの」である；代行管理したこれらの物に対し、主の御旨を理解せずにそれらを使えば、主は霊的な恵みや幸（ルカ10：42）、真の命（Ⅰテモ6：19）、永遠の宝（ヘブ10：34）を取り去ってしまう。つまり、これらの「あなたがたのもの」は与えられないであろう。

詳しく推察すれば、神から賜ったのはお金だけではなく、子供、知恵、才能、弁舌の才、経験……等、全て神から与えられた物である。だから、富を蓄える事だけに使うのではなく、名誉や地位を得る事の上において、主の名を栄える事が出来れば、名実共に忠実な管理人と成り得よう（Ⅰコリ6：20）。

人の思いと力には限りがあり、同時に二人の主人に兼ね仕える事は出来ない：「神」と「富」である（13）。もしあなたが一心不乱に富を求めれば、主に仕える心が必ず疎かになる。逆に専心して主に仕え、主に喜ばれようとすれば、事業を顧みる事は出来ない。故

に主は言われた：「あなたの宝のある所には、心もあるからである」（マタ6：21）。これは永遠に変わらない真理であり、肝に銘じるべきである。

総じて言えば、イエスは信者に神の御旨を理解し、将来の為に準備し、また忠実な管理人となり、全てにおいて主の御名を栄えるようにすべきであると教えられた。真に主に仕える者が倣うべき聖なる教えである。

#### 四十七、「金持ちとラザロ」の譬え ルカ16：19～31

「ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロという貧しい人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのぎと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧しい人がついに死に、御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちとあなたがたの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもしかない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることがないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者と共に耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』」。譬えの内容に従い、教えについて以下の通りに解釈する：

この譬えは教えだけではなく、死後には苦楽の区別があり、禍福は既に定まり、変更出来ない。生前において早めに悔い改める等を必要とし、預言性を持った譬えである。だから、金持をユダヤ人と譬え、ラザロを恵みに与る異邦人と譬えた。

ある人はパリサイ人だけに向かつて話していると思っているが、解釈するに至っては非常に困難がある（ルカ16：14、15）。なぜなら、パリサイ人は欲の深い者であり（ルカ16：14；参考：マタ23：14）、また常に断食をする（ルカ18：12）。だから、日々贅沢な生活を絶対に送る事はない。またある人が、聖書の解釈上における困難から避けようとして、サドカイ人の為に話された譬えであると言う。なぜなら、サドカイ人とパリサイ

イ人は違う。彼らは贅沢を好み、性格が非常に頑固であり、また貧しさは罪によって至ったと思ひ、貧しい者を蔑視していたからである。

### 甲、生前

「ある金持がいた」：譬えの中にあるお金持ちとは享樂に耽り、愛も憐れみもなく、また神を愛さない金持ちである。「紫の衣や細布」：紫色は王家の色であり、紫の衣は王からの贈り物であり（エス 8：15；ダニ 5：7）、細布は貴重で高価な衣料である（創 41：42；出エジ 28：39；黙 19：8、14）。聖書の中でもこの二つを合わせて記している（エス 1：6；黙 18：12；箴 31：22）。故に尊い標識である事が分かる（黙 17：4；18：16）。「毎日ぜいたくに遊び暮していた」：毎日酒宴で面白おかしく過ごしていた（ルカ 15：24、29、32の喜びとは同意義である）。「ラザロという貧しい人」：彼は全身にできものがあり、歩くことも出来ず、物乞いをして生計を立てる貧しい人であった。「ラザロ」はギリシャ名で、「神が助ける」という意味である。ヘブル語では「エレアザル」と読む（出エジ 6：23）。譬えの中の金持ちには名がないのに、乞食には名がある。これは注意するに値する所である。つまり、神にとってケチな金持ちの存在は一人の乞食にも及ばないという事である。「この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのごと望んでいた」：金持ちが残した食物ではなく、金持ちに仕える奴婢がその食卓を片付ける時に落ちる汚い物である。「飢えをしのぐ」という言葉について、別の訳では「お腹を満たす」とあるが、しかし、「お腹を満たす事を常に期待している」という意味が含まれている。つまり、彼は病に苦しみ、また常に飢えている。或いは金持ちがこれらの物を犬に与えても、彼の玄関の前に座っているラザロを嫌い、飢えをしのげるこの汚い物すら彼に与えない。「その上、犬がきて彼のでき物をなめていた」：「その上」の原文は「かえって」であり、その意味は「人に捨てられたラザロであったが、かえって犬が彼の友になった」。ところが呂氏は「それだけではなく」と訳した。パレスチナ地方の犬達には帰る所などない（詩 59：14、15；列王下 9：36）、つまり、彼には犬達を追い払う力すらなく、犬達が来て彼のできものを舐めていた。金持ちは毎日贅沢に遊び暮らした；ラザロは反対に金持ちの玄関の前に座り、病と飢えに苦しみ、金持ちの食卓から落ちる汚い物で飢えをしのいだ。これは一つの極端な対象である。

### 乙、死後

しかし、今生の栄華と不幸には限りがあり、また一時的な物である。「この貧しい人がついに死に」：ラザロが死んだ時は簡単に穴を掘って埋めたであろう；「金持も死んで葬られた。」金持ちは賑やかな葬儀を行い、また、綺麗な墓を建てた事であろう（参考：詩 49：17；伝 8：10）。しかし、彼らの死後の状況については全く違った物になった。ラザロは御使い達に連れられて、「アブラハムのふところに」送られた。これはパラダイスのもう一つの名称であり、神を畏れ敬う魂が安息を享受する場所である（ルカ 23：43；

参考：マタ 8 : 11)。「彼は黄泉にいて苦しみ」：「黄泉」はルカの福音書八章三十一節にある「底知れぬ所」とは同じ場所であると思える。そこは、死後罪人の魂が行く所であり、そこで苦しみを受ける。後に裁きを経て地獄で永遠の刑罰を受ける（マタ 13 : 42 ; 25 : 41 ; 黙 20 : 15)。「目をあげると、アブラハム……」：これは当時のユダヤ人達の話であり、主イエスが教えとして引用したに過ぎない（参考：イザ 65 : 13、14 ; ルカ 13 : 28)。「父、アブラハムよ」：金持ちはアブラハムを以って自分の祖先としてその特権を主張した（マタ 3 : 9 ; ロマ 2 : 17 ; ヨハ 8 : 41) 。しかし、アブラハムの子孫という理由で却って罪が倍加されるなど、誰が知り得たであろうか（イザ 63 : 16)。「その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください」：これは金持ちが受ける公平な報いである。しかし、彼は黄泉での苦しみの中、自分が受けるべき罪を軽減しようとするのは、彼が利己的である事を表わす。「子よ、思い出すがよい……」：アブラハムは、金持ちの死後の境遇は正当であると指した。なぜなら、彼は生前享樂に耽る事だけを知り、貧しい者を憐れむ事を一切しなかった（詩 17 : 14 ; ヨブ 21 : 7~21 ; ルカ 6 : 24、25 ; ヤコ 2 : 13)。「わたしたちとあなたがたの間には大きな淵が……」：死後の運命は既に定められている。所謂「棺を蓋いて事定まる」である。故に、生前如何にして生活するかを先ず考えるべきである。

「父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください……」：第一の願いが失敗に終り、彼は第二の要求をした。「五人の兄弟」：「五人」には特別な意味はない。金持は彼の兄弟を心配し、ラザロを通して彼らに警告しようと思った。「彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう」：彼らには旧約聖書の教えがあって、聞く事が出来る。もし、それを受け入れるなら、人を救うに足りる（参考：ヨハ 5 : 39、45~47 ; ダニ 12 : 2)。「もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってきましたら、彼らは悔い改めるでしょう」：聖書の教えだけでは、彼らを悔い改めさせるに足りなかった。金持は黄泉に落とされてもまだこのような要求をする（イザ 8 : 19、20) 。パリサイ人のように真理を信じず、主に奇跡を顕すようにと求める事と同じである（マタ 12 : 38 ; 16 : 1、4 ; ヨハ 2 : 18 ; 6 : 60)。「もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」：人が信じようとしなければ、例え最大の奇跡や証拠があつたとしても、彼らを信じさせる事は出来ない。後にもう一人のラザロが死から復活したが、パリサイ人はそれでも信じなかった（ヨハ 11 : 47~53 ; 12 : 9~11 ; 5 : 47) 。

#### 四十八、「ふつつかな僕」の譬え ルカ 17 : 7~10

ルカの福音書十七章五節から六節の中で、使徒達が私達の信仰を増してくださいと求めた時、主は言われた：「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら……」。信仰には絶大な力がある。だが、それは人の手柄を横取りして恩恵を得る事に用いてはならない。故にこの譬えを設けた：

「あなたがたのうちのだれかに、耕作か牧畜かをする僕があるとする。その僕が畑から帰って来たとき、彼に『すぐきて、食卓につきなさい』と言うだろうか。かえって、『夕食の用意をしてくれ。そしてわたしが飲み食いするあいだ、帯をしめて給仕をしなさい。そのあとで、飲み食いをするがよい』と、言うではないか。僕が命じられたことをしたからといって、主人は彼に感謝するだろうか。同様にあなたがたも、命じられたことを皆してしまったとき、『わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません』と言いなさい」。

信仰が厚くても、仕事が多くても、あなたがたは神の御前では、何一つ誇る物などない（Ⅰコリ 6：20）。自分を「ふつつかな僕——ふつつかと自覚する；すべき事をしたに過ぎません——本分を尽くしたに過ぎない」と認識すべきである。主人は彼を忠実な僕と称えるであろう（マタ 25：21）。

現在、教会の奉仕人員が良い成果を収めて人に称賛される時には、このような気持ちを持つべきである。

#### 四十九、「切に求めるやもめ」の譬え ルカ 18：1～8

主イエスがルカの福音書十八章の中で話された通称「切に求めるやもめ」の譬えは、十七章二十二節の「あなたがたは、人の子の日を一日でも見たいと願っても見ることができない時が来るであろう。」と密接な関係にあり、主の再臨の時期を預言している。しかし、主の再臨の時には新天地が現れ、先ず空前絶後の大災難が来る；それは女が一つの新しい命を得る時、産みの苦しみから逃れられない事と同じである（マタ 24：8；ヨハ 16：21）。このような時期では、災難が大きすぎて、使徒達がこの日を見たいと願っても、恐らくしつかりと立つ事すら難しいであろう；故に、切に祈る事を必要としたので、この譬えを設けた。

「切に求めるやもめ」の譬えの要旨は、「失望せずに常に祈るべきこと」とルカの福音書の筆者が本章の一節に既に提起している。「常に祈る」と「常に祈りなさい」（ロマ 12：13）、「絶えず祈と願いをし」（エペ 6：18）、「絶えず祈りなさい」（Ⅰテサ 5：17）など、その原文は全て同一語である。つまり、「常に」という言葉には、切に、随時に、絶えずになどの意味を持っている。また、信者は絶えず神と霊的な交わりをしてその敬虔さを表わさなければならない。時に神は故意に祈りを聞かないが、絶望することなく祈り続けるなどの教えもある。「失望せずに」：これには「志を失わない」という意味がある（参考：ガラ 6：9；Ⅱテサ 3：13）。故に、志を失わないだけではなく、却って信仰と忍耐の精神を抱くべきである。このような祈りこそ深く聞き入れられ、また成就することが出来る。

また、イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々に譬で教えられた。「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいた。ところが、その同じ町にひとりのやもめがいて、彼のもとにたびたびきて、『どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わたしを守っ

てください』と願いつづけた。彼はしばらくの間きき入れないでいたが、そののち、心のうちで考えた、『わたしは神をも恐れず、人を人とも思わないが、このやもめがわたしに面倒をかけるから、彼女のためになる裁判をしてやろう。そしたら、絶えずやってきてわたしを悩ますことがなくなるだろう』」。そこで主は言われた、「この不義な裁判官の言っていることを聞いたか。まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか。あなたがたに言うておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう。しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」。

この譬えを内容に従って以下の通りに解釈した：

「裁判官」：その地方の裁判官で、彼は「神を恐れず、人を人とも思わない」。すなわち将来神が義に基づいて裁く事と世間の世論を恐れない不義の役人である。故に、財力も権力もない一人のやもめが彼から正しい裁きを得ることが出来ようか？それゆえ、古き時代から裁判官を警告する神の律法がある（出エジ23：6～9；参考：レビ19：15；申1：16、17；16：19；歴代下19：6、7；箴24：23）。

「やもめ」：夫もなく頼る者もない寡婦は、賄賂を贈る資本もなければ、頼る権力もない弱い女である。故に、神は特別にこのような寡婦を守られた（出エジ22：22～24；参考：申10：18；24：17；27：19；ヨブ22：9；イザ1：23；箴15：25；マラ3：5）。

「訴える者」：聖書の中には明記されていないが、推測するにこの者は不法な手段を以って寡婦の僅かな財産を奪い、彼女を窮地に陥れた敵である事が分かる。

「わたしを守ってください」：彼女は裁判官に厳正な法律を以って弱者を守るように求めた。「彼はしばらくの間きき入れないでいた」：彼は不義の役人である。故に、権力者には奉仕するが、寡婦の要求には応える事はない。「心のうちで考えた」：公開された談話でもなく、独り言でもない；彼の心の声である。この言葉はルカ特有の書き方である（参考：ルカ16：3；15：17）。裁判官は自身でも「わたしは神をも恐れず、人を人とも思わない」と認めている。彼がこのような人間であるにも拘らず、彼女の為に冤罪を晴らすのは、絶対に正しさや憐れみ、或いは、慈悲や同情の心によるものではなく、ただ、「このやもめがわたしに面倒をかけるから」という理由によるものである。「絶えずやってきてわたしを悩ますことがなくなるだろう」：彼はただ寡婦に悩まされる事から逃げたかったから、彼女の為に裁判をした。「悩まされる」という言葉は、原文では「眼下を打つ」、或いは「ひどく殴る」という意味がある。コリント第一の手紙9章27節にて「打ちたたいて」と訳されている。つまり、寡婦の日々絶えず求める事が裁判官に大きな打撃を与えた。主もこの言葉を通して、神の裁きと世論を恐れない人の顔つきを徹底的に形容されたのである。

6節以下は主の教えの部分である。主は初め使徒達に「この不義な裁判官の言っていることを聞いたか」と注意された。その意味として「彼のような不義の役人でさえ寡婦の求

めを聞き入れたのだから、正しい父の神は尚更の事ではないか；もし一人一人の信者が寡婦のような忍耐を持って祈り求めるなら、必ず聞き入れられる。」「神の選民」：神が特別に選んだ民——イスラエル人（申7：6、7；26：18、19；出エジ19：5）である。彼らも罪悪の中から主の尊い血を以って贖われ、また聖霊のバプテスマによって救われる信者となった（ヨハ3：5；ガラ4：6、7；参考：マタ24：22；ロマ9：11；エペ1：4、5；Iペテ1：2；ロマ8：33）。軽んじられた貧しい寡婦でさえ良くされたのに、神の御前にいる尊い選民は尚更のことではないか。寡婦は一時的に呼び求めたが、選民は「日夜呼び求めた」。「すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」（ダニ12：1）とある以上、そこで聞き入れられない事があるだろうか？これも神の特別な許諾である。「正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあるだろうか」：人の立場から見れば、主の再臨はとても遅いと思える（IIペテ3：9；ロマ2：4）。或いは、神が民達の呼び求めを聞き入れない（黙6：10；詩35：17；74：10；94：3）。しかし、事實はそうではなく、人の忍耐の無さと偏見からによるものである。主はまたその許諾を強調して言われた：「神はすみやかにさばいてくださるであろう」。この「すみやかに」とは速いと言う意味である（参考：黙22：20；ハバ2：3）。しかし、主はあなたが本当に努力しているかを知る為、故意に遅らせているのである（参考：ヨハ11：6；マタ14：23～25）。故に、疑う事無く、却って忍耐強く祈りなさい。

最後に主は結びの言葉を言われた：「しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」：これは再臨と世界の終りを暗示している。なぜなら、再臨前の苦難は甚だ大きく、選民ですらも恐れ、信仰を失うに至る。このような信者が世界に溢れてくる（ゼカ14：1～5）。主は信者の弱さの為に、選民の為に、その期間を縮めると約束された（マタ24：22）。

#### 五十、「パリサイ人と取税人」の譬え ルカ18：9～14

ルカの福音書十八章の中には、もう一つ祈りに関する譬えがあり、それが「パリサイ人と取税人」の譬えである。主イエスがこの譬えを設けた時、先の「切に求めるやもめ」の譬えと同一時期に話されたかは、知る事は出来ない。しかし、この譬えの動機に関しては、第九節にはっきりと記載されている：「自分を義人だと自任して他人を見下げている人たちに対して、イエスはまたこの譬をお話しになった」。これは、自分を義人だと思っている傲慢者を戒める為に設けられた譬えである。人には普遍的な欠点がある：常に人を自分と比べ、それによって自らを義とし、驕り高ぶる。そうになると、他人を見下してしまう。よって、主が山上垂訓において、人を裁く事と批判する事について戒めて言われた：「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか」（マタ7：3）。人の短所を見つけるのは容易いが、自身の欠点を認めるのは何と難しい事か。人に厳しいが、自分には甘い；これが自らを義とし、他人を見下す最大の要素となる。

先ず譬えの内容を以下の通りに述べる：

自分を義人だと自任して他人を見下げている人たちに対して、イエスはまたこの譬をお話しになった。「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとりパリサイ人であり、もうひとり取税人であった。パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようともしないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしてください』と。あなたがたに言うておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。

この譬えを内容に従って以下の通りに解釈した：

「祈るために宮に上った」：聖なる宮はモリヤの山にあるので、「上った」という字を用いた。毎日の朝及び午後三時は祭司が羊を屠り燔祭を捧げる時であり、大衆の祈りの時間でもある（ルカ 1：8～10；使徒 3：1；参考：イザ 56：7）。

「パリサイ人」：「分離主義者」或いは「分別」の意味がある。この教派は紀元前約百五十年頃、律法学者の間で発足された。彼らは律法と古人の伝えた規則を厳格に遵守した。故に、反対者から「パリサイ人」という名称を付けられた。彼らは民達の間では大いに尊敬されたので（マタ 23：2～7）、多くが驕り高ぶり、また、自らを誇った（マタ 23：25～28）。パリサイ派の信じる所は：魂が永遠に生きながらえる、永遠の刑罰がある、天使がいる、人の身体が復活する……などがある（使徒 23：8）。祭司と協力して主イエスを十字架に付けたのが彼らである（マル 14：1；15：1；ルカ 19：47）。

「取税人」：ローマ政府の税金を一手に引き受ける税務官である。ローマ政府は騎士階級を派遣して税務司とし、各省の税金を管理させた。税務司は取税人を手下として派遣し、その中にはユダヤ人もいた（ルカ 5：27；19：2、9）。彼らは民からお金を巻き上げる貪欲の徒であったので、ユダヤ人から排斥された（マタ 9：10～13；参考：マタ 21：31）。富んではいるが、皆から売国奴、罪人、異邦人、犬などと蔑まれていた（マタ 18：17）。民達は彼らと交際を拒み、彼らの寄付すら喜んで受け入れなかった（マタ 11：19）。しかし、主イエスは常に取税人に説教された。なぜなら、取税人もアブラハムの子だからである（ルカ 19：9）。

主イエスはパリサイ人と取税人の二人の祈りを以って譬えとしたのは、極端な対照とさせる為である。なぜなら、一人はユダヤ教のリーダーであると自惚れ、もう一人は万人に嫌われる取税人だからである。しかし、主はこれを通して真の神の御心を表明された。

祈りの礼節は幾つかある：立って祈る（Iサム 1：26；マル 11：25）、跪いて祈る（ダニ 6：10；ルカ 22：41）、伏して祈る（出エジ 12：27）、ひれ伏して祈る（民 16：22；マタ 26：39）、両手を上げて祈る（エズ 9：5；詩 28：2）などがある。一説によれば、静かな祈りは跪き、公の祈りは立ってすると言われている。譬えの中の二人は共に

立って祈って、パリサイ人が「立って」祈るので驕り高ぶる表現として見られる（列王上 8 : 22 ; 歴代下 6 : 12 ; マタ 6 : 5 ; マル 11 : 25）。

「ひとりでこう祈った」：祈りにあるべき要素として、真の神を賛美し（詩 8 : 1）、感謝し（I コリ 1 : 4）、反省し（I ヨハ 1 : 9）、求め（ヤコ 1 : 5）、及び助禱である（I テモ 2 : 1）。彼の祈りにはこのような要素が含まれていない。ただ自分を宣伝し、自分を誇り、祈りの礼節を利用し、自分を宣伝しているに過ぎない。「神よ、感謝します」と言っているが、その内容からは祈りに属していないという事が分かる。

パリサイ人の話によれば、彼は「食欲、不正、姦淫」等の罪を未だ犯した事はない。なれば、彼の道徳生活は称賛する事が出来る。「わたしは一週に二度断食しており」：毎年行われる贖罪を捧げる日にある断食（レビ 16 : 29 ; 民 29 : 7）以外には、断食の定例はない；しかし、ユダヤ教の規則には、毎週月曜日と木曜日には断食するとある。「全収入の十分の一をささげています」：十分の一献金はアブラハムから始まり（創 14 : 20）、ヤコブも十分の一を納める事を誓い（創 28 : 22）、後に律法となった（民 18 : 21 ; 申 14 : 22 ; レビ 27 : 30 ; 参考：マタ 23 : 23 ; ルカ 11 : 42）。このパリサイ人は十分の一を納め、断食もする。彼の宗教生活は取る価値がある。彼の道徳生活と宗教生活についての表れは共に非常に良い。では、彼の間違いは何処にあるのか？それは「わたしはほかの人たちのような……この取税人のような人間でもない」という点である。彼は聖なる正しい父なる神をもって比較とせず、却って霊的な性質の低い取税人と比較をした。これでは自分を誇り、自己満足しているだけである。これはにせ教師の傲慢な態度であり、通じる物でもない。すべき事は謙虚になって、感謝の気持ちを忘れなければならない。主の為に何かが出来たら、主と共に働く事によって成されると知るべきである（II コリ 10 : 12 ; I コリ 15 : 9, 10）。偽善者はその善行を誇る事を最も好む。原文の「偽善者」の一語は「劇を演じる」と同一字であった。舞台の上に立ってする動作は、一幕の演技に過ぎない。故に、心と行いが一致しない。主イエスは偽善者がする施し、祈り、断食などについて、彼らは人々の称賛を得ようとして演技していると指摘された（マタ 6 : 2, 5, 16）。態度が良くても、誇りにするほどの事でもない。主は言われた：「すべき事をしたに過ぎません」（ルカ 17 : 10）。「ほかの人たち」：原文では、「その他の大衆」と書かれていた。つまり、彼は自分一人が唯一の全き人であると思い、驕り高ぶっている。

取税人は却って「遠く離れて立ち、目を天にむけようとしなさい」。これは罪を認めて神に近づけない状態にいる。なぜなら、彼は自分の罪の重さを深く自覚し、無数の罪に追われ、重荷に押し潰されるかのように、申し訳なくて頭も上げられない情景であった（詩 40 : 12 ; 38 : 4 ; エズ 9 : 6 ; 参考：I テモ 2 : 8）。「胸を打ち」：罪の為に苦しみ、悲しみ、自身を恨む表れである（参考：ナホ 2 : 7 ; ルカ 23 : 48）。「罪人のわたしをおゆるしてください」：苦しみの中から発せられた哀願の声である。彼は自分が唯一の罪人であると深く認め、パウロのように自分は罪のかしらであると同じ様に言われた（I テモ 1 : 15）。取税人は嫌われる罪人であったが、彼は罪を認め、罪を悔い、真の神の御前で赦し

を哀願した。このように彼は憐れみと赦しを施された（イザ55：7）。いと高き聖なる真の神は心謙る者と共に住まれる（イザ57：15）。

この14節は一つの教えである。その意味として、真の神の御前にて、義と称され、主の御心に適ったのはパリサイ人ではなく、取税人であった。彼は罪を悔いて赦しを願ったので義と称され、求める物も得る事が出来た（参考：エレ31：19；ヨナ2：7）。しかし、パリサイ人は祈り求めている、彼はただ神の御前にて功労を列挙しただけであり、故に、何も得る事は出来なかった。全ての罪人が、罪を認め、悔い改めれば……必ず真の神から赦しの恵みを施され、また、義を行う力も与えられる。ルカの福音書14章11節「自分を高くする者は低くされ……」と同じ様に、真の神は心の砕けた者に近く、魂の悔いせずおれた者を救い（詩34：18；51：17；ヨブ5：11）、高ぶる者を退ける（Iペテ5：5-6；詩138：6；ヨブ40：11、12；箴29：23）。

#### 五十一、「憐れみのない僕」の譬え マタ18：23～34

マタイの福音書十八章の中で主によって設けられたこの譬えは、別名「人を赦さない僕」の譬えと呼ばれた。ペテロの疑問によって引き起こされたものである；将来主の国の中で、罪を犯された者が罪を犯した兄弟に対し、何度許せばよいのか？ペテロはより詳しい教えを得る為に、主に向かって言われた：「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」。当時のユダヤ教の教師達が民衆に教え説いた：「三回か四回」或いは「二回三回まで」——原文では「三回でよい」（アモ1：3；2：6；ヨブ33：29、30）とある。しかし、ペテロは「七回」までと増加した。彼は「四回」増やしておけば、主の愛の教えと符合するのではと思った（参考：ルカ17：4；「もしあなたに対して一日に七度罪を犯し、そして七度『悔い改めます』と言ってあなたのところへ帰ってくれば、ゆるしてやるがよい」）。これは「七回」を限度としているのではない。もし、「七回」を超えたら怒って彼を許さないのか？それとも無限の許しを含んでおり、「七たびの七十倍」のようなものが主の強調する真理であるのか。ペテロは「愛と許し」の教えに対し、まだ理解しきれていなかった。よって、主はこの「憐れみのない僕」の譬えを以って彼と他の使徒達に教えられた。譬えの内容は以下の通りである：

「それだから、天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。

そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。」

この譬えを以下の通りに略解した：

「王」：真の神の譬え；「僕たちと決算をする」の「僕たち」とは私達世の人を譬えている。しかし、今回の決算は、マタイの福音書25章19節、コリント人への第二の手紙5章10節、黙示録20章11節から12節などに記載される終わりの時の決算ではなく、ルカの福音書16章2節の時に応じた抽出検査であると考えられる（参考：サム下12：1～6；ヨナ3：4；ルカ3：3～14）。一タラントは六千デナリに等しく、一日の給料が一デナリである。「一万タラント」：一人の人間が絶対に返せない負債を表わしている。このように、人類が神の御前で犯した罪は、神の愛と赦し以外には、償還を得る事など出来ない——これを主が数字を誇張して用いたと思ってはならない。「主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた」：妻と子供を財産の一部として見ている。もし、破産した場合、身売りをして債務を返済しなければならない（レビ25：33、40；出エジ22：3；列王下4：1；ネへ5：5；イザ50：1；58：6；エレ34：8～11；アモ2：6；8：6）。「この僕はひれ伏して哀願した」：ひれ伏して主人に赦しを求める以外にも、主人の脚を掴んで口付けするほど切に求める事が含まれている。「僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。」：なぜなら、「一万タラント」の債務は非常に大きく、一生を獄に繋がれても償う事は出来ない；僕の哀願を聞く——債務を返済する方法などない、僕の哀願は虚しく無駄なだけであるが、主人は憐れに思って彼を赦し、その負債をも免じた。

「その僕が出て行くと……」：彼は主の憐れみを得た後、直に離れた。よって、主人が彼に対する扱いの記憶がまだ新しいはずである。しかし、この時の彼は、「百デナリを貸しているひとりの仲間」に対し：「百デナリ」は「一万タラント」の六十万分の一の金額であり、人が私達に負う債務と同じである。彼は主人の恩赦を忘れ、また、「彼をつかまえ、首をしめて……借金返済まで獄に入れた」。人がもし神からの恩赦を忘れてしまったら、残忍な手段を以って人に接する。例えば：ダビデが大きな間違いを犯した後、預言者ナタンのお話を聞いて、王の身分を以って正しく裁いて言った：「主は生きておられる。この事をしたその人は死ぬべきである」（サム下12：5）。自分の罪を知らないのは人類の弱さであり、人に対する裁きは厳しく、自分に対する裁きは甘い、これは人類の弱さに関する共通の欠点である。故に、パウロは霊性において欠けている人を正すように、霊の人に命令した（ガラ6：1）。また、テトスにも次のように説明した：「わたしたちも以前には、無分別で、不従順な、迷っていた者であって、さまざまの情欲と快樂との奴隷になり、悪意とねたみとで日を過ごし、人に憎まれ、互に憎み合っていた」（テト3：3）。「その人の仲間たちは、この様子を見て、……行ってそのことをのこらず主人に話した」：

仲間達が彼のした事を見て、「心を痛める」だけであったが（詩119：136、158；ロマ9：2）、主人は彼を「悪い僕」と言い、「立腹」した。なぜなら、彼は主の恵みを忘れ、残忍な手段を以って彼の仲間を扱ったからである（参考：Iヨハ4：11）；また、彼を「獄吏に引き渡した」。彼を憐れみのない裁きを受けさせる為である（ヤコ2：13）。「獄吏」：原文では拷問者とある。罪を犯した人を刑によって処し、宝の在処を吐かせ、それを以って債務を贖う。

よって、この獄吏は義の為に神の恐ろしい裁きを執行する器なのである。

「罪は赦されても、後になってまた罪を犯すならば、この罪はまた戻ってくる。」これは容易に議論を生み出す。例えば：キリストの合法的なバプテスマを受けて罪を洗い、キリストに帰した人が、主から離れてしまうと、再び死罪と主の怒りを必ず招く事になる。しかし、主が三十八年病を患っている人を癒し、聖なる宮で彼を見かけた時、彼に警告して言われた：「ごらん、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」（ヨハ5：14）。これは正確な証言である。

主が譬えを話された後、この譬えに関する教えの重点を言われた：「あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。神の属性は「愛」であり、反面は「正しさ」である。「心からゆるす」の一言には、「積極的に人をゆるす」と言う意味も持っている。

## 五十二、ぶどう園の譬え マタ20：1～15

主イエスがマタイの福音書20章の中で「ぶどう園の譬え」を設けた発端としては、19章27節のペテロの一言である：「ごらんささい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるのでしょうか」。ペテロは金持ちの青年の事例を目の当たりにして、連想していた：彼らは初め純粋に主に従い、将来の結果については何一つ考えた事がなかった。しかし、この時、彼らは将来に対し一つの新しい期待が芽生えた。主は此処で使徒達に注意された。功労があるからと傲慢になって驕り高ぶってはならない。仕事があるといえども、謙った心で臨まなければ、最終的には自分が損をしてしまう。よって、主は多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろうと言われた。その後、主はこの「ぶどう園の譬え」を設け、その目的は使徒達に教える事である。その内容は以下の通りである：

「天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをぶどう園に送った。それから九時ごろに出て行って、他の人々が市場で何もせずに立っているのを見た。そして、その人たちに言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当な賃銀を払うから』。そこで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろとに出て行って、同じようにした。五時ごろまた出て行くと、まだ立っている人々を見たので、彼らに言った、『なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか』。

彼らが『だれもわたしたちを雇ってくれませんか』と答えたので、その人々に言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい』。さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃銀を払ってやりなさい』。そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであった。もらったとき、家の主人にむかって不平をもらして言った、『この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました』。そこで彼はそのひとりに答えて言った、『友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか』。このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」。

この譬えを内容に従って以下の通りに解釈した：

「ぶどう園の譬え」は主の譬えの中では難しい一つとされている。まず、聖書専門家による幾つかの見解を以下に述べる：

- 一、共に一デナリ貰うという事を譬えの重点に置く事により、天国における賞与は一律であると説く。
- 二、神は仕事時間の長短を見るのではなく、勤勉であるかどうかについて重視する；後の者が一時間しか仕事をしなくても、彼らの勤労によって先の者の価値と同等であると説く。
- 三、労働者が園に入る時間に違いがあるのは、召された信者の年齢の違いであると説く
- 四、歴史に基づいて見ると、アダム、ノアから使徒に至るまで、各人の仕事時間には長短の違いがある。
- 五、ユダヤ人が傲慢であった為、常にその仕事を誇り、また、異邦人が神の国の中で得た地位について妬んだので、神に捨てられた原因となった。

これらの解釈には長所もあれば短所もある。しかし、留意すべき点は：使徒達に注意するという目的；また、神の恵みの性質を明らかにするという事から、この譬えを設けられた。

「主人」：は「神」を表わし（マタ9：38）、また「ぶどう園」：は「教会」を表わす（ヨハ15：1）。神の教会では仕事の為に「労働者を雇う」必要がある。しかし、この労働者達については、神が彼らを探すのであって、彼らが神を探すのではない（ヨハ15：16；マル3：13；ルカ5：10；ヨハ1：43）。仕事内容の重要を問わず、信徒として恩を返すチャンスである。広大な神の教会の中には、多くの労働者を必要としている。そこで、仕事を分配し、協力し合う事によって各人の尽くすべき本分を完成させる事が出来る（エ

ペ4：11～16)。労働者に対し主人は先ず「一日一デナリの約束」を以って報酬とした。

「一デナリ」：本来はローマの銀貨であった。「一日の給料であり、兵士の一日の兵糧でもある」。また「期待できる報酬」とも言える。例えばペテロが主に「ついては、何がいただけるでしょうか」と質問した時と同じ期待がある。この労働者達は、このように神の許諾を期待して、園に入って仕事を始めたのである。

およそ午前九時頃、主人は市場で「何もせずに立っている人」を見つけ、彼らに園に入って仕事をするように言い、また、主人は特別に彼らに「相当な賃銀を払うから」と約束した。労働者は市場で自分を雇用する者を待っていた。これはその時代の風習であろう。

「そこで、彼らは出かけて行った」：朝、園に入った労働者達は、一日の報酬を約束されていたので、期待を持っている労働者と言える。しかし、朝九時から仕事に入った人は、正当な許諾はあったけれども、約束はされていない。つまり、謙虚に主の約束を信じる信者と言える。

主人は十二時頃と午後の三時頃にまた出かけた、市場で何もせずに立っている人を見つけ、同じように彼らを雇って園で働かせた。

第五回目は、主人が午後五時頃に出かけた時である。彼はまた何もせずに立っている人を見つけて、責める口調で言った：「なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか」：これは私達に主の言葉を連想させる：「収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主は願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい（マタ9：37、38）。主の目から見れば、教会以外の仕事は、例えば名利を求めるなどは皆神に属さない。これは人生の目的を知らず、尊い時間を無益な事に無駄に費やすことであり、正に「何もせずに立っている」と等しい。これらの信者が神の御旨を知れば、何もせずに立っているという理由などない。しかし、彼らはそれでも弁明した：「だれもわたしたちを雇ってくれませんから」。つまり、彼らは主の恵みを知らず、また、神の教会の中では誰もが負うべき責任を持っているという事を知らない（ルカ4：18、19）。しかし、神は彼らに言った：「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい」。これは園の中で働く労働者が足りない、或いは彼らが参加しなければ仕事が出来ないという事ではない。主が「賃銀」を彼らに与える事は、その幸せを彼らに与える事である。

「さて、夕方になって」：ユダヤ人の律法によれば、労働者の賃金は日払いであり、支給期限を過ぎてはならない（申24：15；参考：ヤコ5：4）。また、「夕方」は「暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう」という世界の終わりを指し（イザ60：2）、主が再臨して裁きを下す時でもある（Ⅱコリ5：10）。神は「管理人」の主イエス（ヘブ3：6；ヨハ5：27；マタ11：27）に、「彼らに賃銀を払いなさい」と命令した。「永遠の命」を報酬として彼らに与える事である（黙2：7、10、17、28）。順序は後から来た者から始まって、先に来た者までに至った。故に、五時から働いた者から先に一デナリを貰い、最初に雇われた者にまで至った。「彼らはもっと多くもらえるだろうと思っていた」：これは間違った心理である。人が主から言い付けられた事を終わらせても、本来なら誇る

ものなどなく、また、過分な期待や報酬を必要としないはずである。ただ、「わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません」というべきである（ルカ 17 : 10）。なぜなら、彼らが過分な期待を抱くと、それによって主人に対し「不平」を抱いてしまうからである。この時、彼らが人の得た物と比較する事無く、主と彼らの関係だけを見れば、驕り高ぶり、嫉妬、或いは不平を生じる事はない。褒賞は神から与えられる恵みであり、誇る事や、人を軽んじる事等の利己的な言動があってはならない。もし、喜ぶ者と共に喜ばなければ、愛がない事であり、或いは自らを義とする者である（参考：ルカ 15 : 29、30）。

確かに彼らが「一日じゅう労苦と暑さを辛抱した」事は事実であるが、しかし、これによって不平としてはならない。任された仕事を労苦もせずはどうやって終わらせるのか？「わたしたちと同じ扱いをなさいました」と言う言葉は満足しない、不平の言葉である。しかし、神に不公平な事は絶対がない。全て人が自らを義とし、利己的な偏見によるものに過ぎない（ロマ 9 : 14 ; ヨブ 34 : 10）。

この時、主人は最初に雇った一人に言った：「友よ」：ユダヤ人が部下に対しての呼び名であるが、注意的な口調を持った言葉である（マタ 22 : 12 ; 26 : 50）。「わたしはあなたに対して不正をしてはいない」：実際、主人は最初に雇った者と賃銀の約束をし、今、その約束を履行する事については、彼らに何一つ不正をしていないという証拠である。労働者が権利に基づいて主張するので、主人もまた権利に基づいて返答しているのである。故に、続けて彼らを責めて言われた：「自分の賃銀をもらって行きなさい」：彼はこのように後から来た者に好くしたのは、「あなたと同様に払ってやりたいのだ」——神の主権から出ている（ロマ 9 : 14~16）、人の偏見や嫉妬とは完全に違う。「自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか」：神は嘗てモーセに神の御名を宣告させた時、「わたしは恵もうとする者を恵み、あわれもうとする者をあわれむ」と言われた（出エジ 33 : 19）。つまり、恵みと憐れみは神の随意によって施す事が出来る。パウロもまた陶器を造る者を神に譬え、神には自主権があり、その工程を行使する事が出来る（ロマ 9 : 20~24 ; イザ 29 : 16）。故に、主の絶対権は人の盲目の批判を許さない。「それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか」：「ねたましい」の原文は「嫉妬の目」即ち「欲望の目」（参考：箴 28 : 22 ; マル 7 : 22）である。故に「私が誰を恵むかは、あなたにとやかく言われる筋合いはない」と言えるのである。

この譬えを話し終わる前に、解決すべき問題がある：それは、最初に雇われた不平を抱く労働者を主が初めに選び、神の教会にて働く使徒と見なす。彼らが天国の中で、後から来た信者達が得た幸せに対して、不平を抱くと言う意味を持った譬えではなく、却って使徒たちが将来の褒章について過分な期待をしない、また、それによって驕り高ぶり、謙る心を失くし、更には後から来た者を軽視して、今までの努力を無駄にさせない為にという意味が込められている。

故に、本章の 16 節、即ちこの譬えが話し終わった後、主イエスは再びこの教えを提唱

し、この譬えの結びとして言われた：「このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」。この聖句がこの譬えの重点的な教えである。19章末節と同じであり、使徒とその後の信者に教えられた：恵みに報いる為には、神の教会で任された仕事について責任を持って負い、将来の褒章を期待する事無く、ただ、謙虚に努力して主に喜ばれるように働くだけである。

### 五十三、十ミナの譬え ルカ 19：12～27

ルカの福音書十九章の中にある「十ミナの譬え」は、マタイの福音書二十五章の「財産をあずける譬え」との内容が比較的近い；しかし、絶対に同じ譬えではない。また、一つの譬えが誤って伝えられ、二つに変わった物でもない。なぜなら、前者は主がエリコの町で、過越の祭りを過ごそうとエルサレムに上る時に話された事であり（参考：ルカ 19：11）、後者は主がエルサレムに入った後、オリブ山で話された事である（参考：マタ 24：3）。故に、時間と場所も全く違う。

主イエスがなぜこの譬えを設けたのか、その理由は何であるか？それは、本章十一節の中においてははっきりと私達に教えられた：「人々がこれらの言葉を聞いているときに、イエスはなお一つの譬をお話しになった。それはエルサレムに近づいてこられたし、また人々が神の国はたちまち現れると思っていたためである」。主はユダヤ人の間違いを正そうとされた：彼らは主が今回エルサレムに上るのは、彼らが待ち望んでいた王国を築き、ローマの勢力を国外に駆逐すると思っていたからである（参考：ヨハ 6：15；使徒 1：6）。事実、主の誕生は王となる為であるが、それは、霊の王国を統治する為である（ヨハ 18：36）。

主は彼らに示された：王国の建設は、直ぐに出来るものではない；王国の中では忠実な僕を必要とする；ユダヤ人はメシヤを待ち望んだが、主を信じなかった；結果神に棄てられた。「十ミナの譬え」の内容は以下の通りである：

「ある身分の高い人が、王位を受けて帰ってくるために遠い所へ旅立つことになった。そこで十人の僕を呼び十ミナを渡して言った、『わたしが帰って来るまで、これで商売をきなさい』。ところが、本国の住民は彼を憎んでいたので、あとから使者をおくって、『この人が王になるのをわれわれは望んでいない』と言わせた。さて、彼が王位を受けて帰ってきたとき、だれがどんなもうけをしたかを知ろうとして、金を渡しておいた僕たちを呼んでこさせた。最初の者が進み出て言った、『ご主人様、あなたの一ミナで十ミナをもうけました』。主人は言った、『よい僕よ、うまくやった。あなたは小さい事に忠実であったから、十の町を支配させる』。次の者がきて言った、『ご主人様、あなたの一ミナで五ミナをつくりました』。そこでこの者にも、『では、あなたは五つの町のかしらになれ』と言った。それから、もうひとりの者がきて言った、『ご主人様、さあ、ここにあなたの一ミナがあります。わたしはそれをふくさに包んで、しまっておきました。あなたはきび

しい方で、おあずけにならなかったものを取りたて、おまきにならなかったものを刈る人なので、おそろしかったのです』。彼に言った、『悪い僕よ、わたしはあなたの言ったその言葉であなたをさばこう。わたしがきびしくて、あずけなかったものを取りたて、まかななかったものを刈る人間だと、知っているのか。では、なぜわたしの金を銀行に入れなかったのか。そうすれば、わたしが帰ってきたとき、その金を利子と一緒に引き出したであろうに』。そして、そばに立っていた人々に、『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナを持っている者に与えなさい』と言った。彼らは言った、『ご主人様、あの人は既に十ミナを持っています』。『あなたがたに言うが、おおよそ持っている人には、なお与えられ、持っていない人からは、持っているものまでも取り上げられるであろう。しかしわたしが王になることを好まなかったあの敵どもを、ここにひっぱってきて、わたしの前で打ち殺せ』」。

この譬えを内容に従って以下の通りに解釈した：

「ある身分の高い人が、王位を受けて帰ってくるために遠い所へ旅立つことになった」：「身分の高い人」とは主イエスであり、主は間もなく昇天して、神の右に座し、地上の国を支配する（マル16：19；ピリ2：9～11；マタ28：18；エペ1：19～23）。主が力を得て復活し、再臨する時は、御自身の尊い血を以って贖った民達を治められる（使徒1：11；テト2：13、14；黙1：5、6）。出発する前に、彼は「十人の僕を呼び十ミナを渡した」：主が昇天する前にミナ（お金）——完備なる賜物（ロマ12：6～10；エペ4：7～12；Iコリ12：4～11）を十人の僕——信者全体に渡した。「わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい」：その目的は彼らを試す為であり、主の再臨前に彼らが主から得た賜物を活かしているか——伝道の上において用いる（Iテモ1：18；6：12）。それを以って彼らの忠実と才能を表わす（エペ4：7、8、11、12；Iペテ4：10、11）。「ミナ」：ギリシャの貨幣であり、およそ百デナリに相当し、百日分の給料である。マタイの福音書二十五章と比較すれば、「タラント——一タラントは六千日の給料であり、五タラントと二タラントはそれぞれ三万日と一万二千日の給料である——価値は小さい。しかし、賜物の大きさに関わらず、主の為に忠実に働くべきである（参考：ルカ16：10）。

「本国の住民は彼を憎んでいたので、あとから使者をおくって、『この人が王になるのをわれわれは望んでいない』と言わせた」：「ユダヤ古代史」及び「ユダヤ戦記」によれば、大ヘロデはローマ元老院に赴き、王位を封ぜられた。アケラオが王位を得た時も同じようにローマの元老院に赴いた。その時、彼を王とする事に反対したユダヤ人は、五十名をローマに遣わして反対を唱えた。彼が封ぜられて国に帰った後、これらの人を処刑した。しかし、私達は靈的意味を以って次の通りに解釈した：ユダヤ人は主を恨み、主が王となる事を望まなかった（ロマ9：5；ヨハ4：22）。却って、主を十字架につけ（ヨハ1：11；19：15、21；詩2：2）、主の教会を迫害した（使徒12：3；13：45；17：5～7；18：6；22：22；23：12）。今、世の人も主が彼らの心の中の王となり、彼らを治める事を望まない。

「彼が王位を受けて帰ってきた」：主の再臨の時には、既に王と封ぜられ、主から与えられた賜物を活かしたかどうかについて信者を裁く（ロマ14：12；Ⅱコリ5：10）。「最初の者が進み出て言った、『ご主人様、あなたの一ミナで十ミナをもうけました』……次の者がきて言った、『ご主人様、あなたの一ミナで五ミナをつくりました』……」：彼らは積極的に働き、成果を持って主の前に立ち、報告した。彼らの会話に注意すべき点がある。それは、彼らが「私は〇〇ミナもうけました」の「私」が入っていない事である。つまり、彼らは、賜物は主から来た物であり、神が共に働いたから成果を得られたと認めているのである（Ⅰコリ15：10）。主人は彼を「よい僕」と褒め、「小さい事に忠実である」と認めた（ルカ16：10）。また、彼らに町の管理を以って褒賞とした。「十の町を支配させる……あなたは五つの町のかしらになれ」：この褒賞は主と共に王となる意味である（ロマ8：17；Ⅱテモ2：12；黙3：21）。このように、来世に与えられる権威は、各人の忠実によって定められる（Ⅰコリ3：8；Ⅱコリ9：6；Ⅱヨハ8）。「もうひとりの者がきて」：彼は怠けた僕である。彼は主人に言った：「ご主人様、さあ、ここにあなたの一ミナがあります。わたしはそれをふくさに包んで、しまっておきました」。本来ふくさとは、働く時に汗を拭く為にある。しかし、彼は働かないだけではなく、ふくさに包んで隠した。彼は自分の不忠実を棚に上げて、主人に「あなたはきびしい方で、おあずけにならなかったものを取りたて、おまきにならなかったものを刈る人」とであると責めた。悔い改めない態度を見て、聞く者にとって反省するに値する。主人は彼を「悪い僕よ、わたしはあなたの言ったその言葉であなたをさばこう」と言った。彼は働かないだけではなく、「なぜわたしの金を銀行に入れなかった」——という最低限の措置すら取らなかった。つまり、彼は典型的な怠けた者の僕である。「そばに立っていた人々」：仕えている御使いを指す（マタ13：41；24：31；Ⅱテサ1：7；ユダ14；ダニ7：10）。「おおよそ持っている人には、なお与えられ、持っていない人からは、持っているものまでも取り上げられるであろう」。これは、神の国の原則であり、凡そ賜物を活用しない者は、本来あった物ですら取り上げられる。

「しかしわたしが王になることを好まなかったあの敵どもを、ここにひっぱってきて、わたしの前で打ち殺せ」：主が彼らの王となる事を望まないユダヤ人は、主の敵であると認められた。終りには、紀元七十年、エルサレムが滅ぼされ、凄惨な殺戮が起こった。このように、主を迎えて心の中の王としない者は、主の復活、再臨の時には、永遠の刑罰という報いを受ける。

#### 五十四、二人の子の譬え マタ21：28～30

ルカの福音書二十章一節の記載によると：「ある日、イエスが宮で人々に教え、福音を宣べておられると、祭司長や律法学者達が、長老達と共に近寄ってきて、イエスに言った、『何の権威によってこれらの事をするのですか。そうする権威をあなたに与えたのはだれですか』」。この質問から察すると、彼らのイエスに対する質問はイエスが聖なる宮を清められ

た翌日である事がわかる。イエスが「宮の内を歩いておられると」(マル11:27)、彼らが入ってきた。ラビが民達を教える時に、民達の質問を受ける習慣はあるが、彼らの目的はイエスを訴える口実を探そうとしているのである。

イエスがエルサレムに着いてから、ユダヤ教の長老達の大きな不満と嫉妬を買う出来事が立て続けに起こったからである。例えば：

- 一、イエスがエルサレムに入るとき、出迎えの群衆達の賛美と歓呼を許し、さらにパリサイ人にこう言われた、「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」(ルカ19:40)。
- 二、聖なる宮を清めてから、病人をいやし、子供達の賛美を受けられた(マタ21:14~16)；また荷物を持って宮の庭を通り抜けるのを禁じられた(マル11:16)。
- 三、毎日聖なる宮で人々を教えられた。

彼らがイエスを責めて言った事：

第一、イエスは何の権威によって宮を清められ、民達を教えられたのか？

第二、この権威を授けたのは誰なのか？彼らは、イエスが神から授けられたと言う神を汚す答えを期待し、イエスを訴える正当な理由を待っていたのである。パリサイ人は狭い心と偏見を持って、故意に主の権威を認めなかったため、イエスはヨハネが人々にバプテスマを施した例で彼らに問い返したが、彼らは「私たちは知らない」と答えた。イエスは権威の源を明かさなかったばかりか、一連の譬えをもって彼らを戒められた。もし彼らが悪い計略を捨て、悔改めるならば、彼らを愛したであろう。イエスの最初の譬は次の通りである：

「ある人にふたりの子があったが、兄のところに行って言った、『子よ、きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ』。すると、彼は『おとうさん、参ります』と答えが、行かなかった。また弟のところに来て同じように言った。彼は『いやです』と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。」

この譬は次のように解釈できる：

「ある人」：真の神を表わす。聖書において、よく父親、羊飼いやぶどう園の主人を以って真の神を表す。

「ふたりの子」は道徳における二種類の人を表す：律法を行って義とするパリサイ人と公然と悪を行う取税人や遊女等の罪人(ヨハ1:12；Iヨハ3:10；エペ2:3)。「きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ」はイエスがマタイの福音書二十章一節~七節で説かれた「ぶどう園の譬」にある命令と同じで、神はその民達をご自分のぶどう園で働かせ、時に従って実を納めさせる。「兄」は律法学者とパリサイ人の譬で、「『お父さん、参ります』と答えたが、行かなかった」。彼らは律法に熱心だと自負しながら、外見のみで偽りが多く、誠実に欠ける人たちである(マタ23:3、23；エゼ33:31；ロマ2:17~24；参考：イザ29:13)。「弟」は取税人や遊女等の罪人の譬で、彼らは「『いやです』と答えたが、あとから心を変えて出かけた」。彼らは公然と悪を行い、神の命令を拒んで「いやです」と答えた

が、その後、バプテスマのヨハネの教えを聞いて、悔改めた。(イザ55:7; エゼ18:27, 28; ヨナ3:8~10; ルカ15:17~20; 使徒2:37, 38)。

彼らを民達の前で自責させるため、この譬の後に言われた、「このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか? 彼らはもはや「知らない」(マタ21:27)と答える事は出来ない。仕方なく彼らは「あとの者です」と答えた。イエスはそこで彼らの答えた通りに言われた、「よく聞きなさい、取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる」。言い換えれば、取税人——マタイ、ザアカイ(マタ9:9; ルカ19:2~10)、遊女——罪の女(ルカ7:29, 37~50)は先に神に国にはいる。「先」とは恵みの門がまだ閉ざしていない事を意味する(参考: ヨハ12:35, 36)。その原因は何であろう? イエスは引き続きその原因を説かれて言われた:「ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった」。その意味とは、バプテスマのヨハネは民達を律法によって義とされる模範者で、彼の生活は己を節制し、律法を行って義とするものである(マタ9:14; 11:18)。しかし、パリサイ人は彼を信じなかった(ルカ7:30)。「取税人や遊女は彼を信じた」事は「あなたがたの知っていること」である(ルカ3:12; 7:29)。「あとになっても、心を入れ変えて彼を信じようとしなかった」。最後にイエスは彼らを責めて言われた、「律法学者とパリサイ人たちよ、弟は最初父に聞き従わなかったが、その後心を入れ換えたのに、あなたがたは最後まで悔改めないため、神の目にはこの弟にも及ばない」。

#### 五十五、「凶悪な農夫」の譬えマタ21:33~39; マル12:1~8; ルカ20:9~15

「凶悪な農夫」の譬えはマタイの福音書だけでなく、内容的に少しの違いはあるが、マルコの福音書十二章一節~八節、ルカの福音書十章九節~十五節にも記載されている。ここで、この三箇所を比較し、イエスの教えの中心を見出そう。

マタイの福音書にある譬えの内容は次の通りである:

「ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『かれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか。彼らはイエスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。(マタ21:33~39)。

ここからは、この譬えをマタイの福音書の内容とマルコの福音書とルカの福音書の違い

を加えた上で次のように解釈する：

イエスはなぜこの「凶悪な農夫たち」の譬えを言われたのか？イエスはロバに乗ってエルサレムに入り、聖なる宮を清められた後、毎日宮で民達を教えられた。ご自分がメシヤであることを表された時、祭司長と民間の長老達が来た。彼らはイエスを訴える口実を探そうと、イエスに何の権威によって宮で民達を教えるのかと聞いた。イエスは彼らの悪意を見抜いたので、彼らに問い返し、幾つかの譬えを語られた。これらの譬えを鏡として、彼らに自分達の悪意を映させたのである。

彼らは最初の「二人の子」の譬えを聞いて、早く三十二節の弁論を終らそうとしたが、イエスはそれを許されなかった。彼らにもう一つの譬えを聞きなさいと言われた。即ち、「警告と責めの言葉を引き続き聞きなさい」と。聞き手は祭司長と長老達であるが、ルカの福音書によると、群衆達もその場にいた。(ルカ20:9)。

この譬えは、イザヤ書五章一節～七節の内容を引用したもので、主が来られたのは旧約の預言を廃棄するのではなく、成就するためである。だから、群衆達に預言者の言葉を思い出させ、千年に亘って神がユダヤ人たちの歴史をどう作り出されたのかを彼らの前に現した。

「ある家の主人がぶどう園を造った」：「家の主人」はぶどう園の所有者である「真の神」、  
「ぶどう園」は神が自ら植えたイスラエルの民、或いはその他の国々を象徴する(詩80:8~16; イザ27:3; エレ2:21; エゼ15:1~6; 19:10; ホセ10:1)。「かきをめぐらす」は神のご愛護と顧みを表す。野獣の侵害を防ごうとかきの多くはいばらで作られた(雅2:15; ネへ4:3; 詩80:13)。地理的に見ると、カナンの東にはガリラヤ海、ヨルダン河、塩の海等があり、南は砂漠と山岳地帯のエドム、西は地中海、北はレバノン山である。神はこれらの自然の要塞をかきとして彼らを守られる(参考：詩125:2)。周りの偶像礼拝者と聖別し、選民の尊厳を保たせるため、定め、掟と戒めを彼らに与えられた(民23:9; レビ11:44; イザ27:3; ゼカ2:5)。ぶどう園を整理するとき石を外に投げ出すと同じように、神は異邦人をカナンの地からことごとく追い払われた(申7:22、25)。「酒ぶね」はぶどう酒を作る池で、「やぐら」は見張りとも果実を収める蔵である。即ち、すべての設備が整えて、収穫の季節を待つのみである。

「農夫たちに貸した」：「農夫」は真の神のぶどう園を管理し、ユダヤ人を導く宗教の指導者達で、モーセの後継者と自認する人達である(マラ2:7; マタ23:2、3)。「旅に出かけた」：ルカの福音書二十章九節には「長い旅」と書いてあるが、どちらも神は遠い天の上におられて、管理権を管理者たちに完全に委ね、自由行動を与えた意味である。

「収穫の季節が来た」：ぶどうを植えた目的はその花を觀賞し、また、木材を刈るためではなく、実を収穫するためである。主人と農夫の間には約束した比率で実を納める(参考：雅8:12)。「実」は行いを表す。このように、神がその民たちに対する期待は、悔改め、信仰、従順或いは慈愛の実である(参考：列王下17:13)。「僕たち」は神が遣わした預言者たちで、各時代の必要の時期に、特別な使命と報せを持った優秀な僕たちである。だ

から、「僕」と「農夫」の仕事と使命は完全に異なる。レビ記十九章二十三節～二十五節によると、主人はぶどうを植えてから三年が経たないとその実を食べてはいけない決まりがある。長い年月が経つと、農夫達はぶどう園が借りたものだと忘れ、自分が所有者だと勘違いしてしまった（参考：申8：17、18）。だから、「その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった」。マルコの福音書とルカの福音書には農夫たちの暴虐な行為がもっと詳しく記載されている。これは歴代のユダヤ人が預言者の警告を聞かずに、却って彼らを迫害した史実である（歴代下36：15、16；マタ5：12）。エレミヤが囚われた（エレ20：1、2；37：15、38：6）、預言者たちが殺された（列王上18：4、13；19：14；列王下21：16）；ゼカリヤが石で打ち殺された（歴代下24：19～22）などの例がある。ヘブル人への手紙に書かれているように：「なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた」（ヘブ11：36～38）。

神は民達に絶大なる忍耐と寛容を示されたが、レビ人の罪はこの譬えに大変意義ある解釈を与えた（ネヘ9：26）。

「最後に、主人はその子を彼らの所につかわした」：即ち、神の「愛する子」で、私たちの主イエスである（ヘブ1：1、2、5）。真の神がイエスをこの世に遣わされたのは、その慈愛と憐みによるものである。彼は神の愛する子である以上、預言者達を超え、最高の品格を持ったキリストである（ヘブ3：5、6）。ユダヤ人の長老達はイエスを「財産を受け継ぐあと取り」と認めながら（ヘブ1：2；エペ1：20～23；ピリ2：9）、「互に言った、『さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。彼らの主を迫害する密議が使徒ヨハネによって全人類の前に晒された（ヨハ11：47～53）。「そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。」：これは主イエスがエルサレムの城外にあるゴルゴタに付けられる事を成就するためである（ヘブ13：12、13；ヨハ19：17～20）。

「凶悪な農夫」の譬えは三十九節で終わったが、イエスは間接的な言い方を用いられたので、引き続き「この農夫たちをどうするだろう」と聞かれた。故に、自然と聴衆に自分への判断を委ねた。ダビデ王が預言者ナタンの譬えを聞き終えた時に、義によって「この事をしたその人は死ぬべきである」と答えたのと同様である（サム下12：1～6）。また、預言者が目に包帯を当ててアハブ王に会いに行った時、詰問して王に自らの罪を裁かせたようである（列王上20：38～42）。そこで、彼らは「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与える」と答えた。彼らの自分を審判する言葉は紀元七十年に、テトス軍長がローマの大軍を率いてエルサレムを攻め、民達が殺され、また、ユダヤ人が神に見捨てられ、主の祝福が異邦人の上に臨まれた事で成就された（マタ8：11、12；使徒15：7）。これもまた彼らの運命に対する一つの宣告で

ある。ルカの福音書によると、彼らは「そんなことがあってはならない」と言った（ルカ 20 : 16）。

#### 五十六、隅のかしら石の譬え マタ 21 : 42~44 ; マル 12 : 10, 11 ; ルカ 20 : 17, 18

イエスは引き続き「家造り」の譬えを以って話された。彼は教会の基であり、罪を裁く石であると表された。この聖句は詩篇百十八篇二十二節で、祭りの最中の賛美の歌であり、メシヤに対する預言である（使徒 4 : 11 ; I ペテ 2 : 7 ; 参考 : エペ 2 : 10）。

「聖書には『家造りらの捨てた石が、隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられ、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」（マタ 21 : 42~44）。

「家造り」：霊の宮を造る人達で、前の譬えの中にある「農夫たち」と同様で、長老達を表している。「捨てた石」は殺された「あと取り息子」と等しい。「隅のかしら石になった」：神の教会の重要な基である（I コリ 3 : 11）。これは神のご計画であるが、信じない人たちの目には「不思議」な事に見えた。ここで、イエスは宣告された：「神の国はあなたがた——ユダヤ人から取り上げられ、実を結ぶような人たち——異邦人に与えられる。」この石はまたこれを捨てた人のつまずきの石となる（イザ 8 : 14, 15）。「その石に落ちる者——彼を軽んじてつまずく人は打ち砕かれる。」（イザ 53 : 2 ; ルカ 2 : 34 ; 4 : 22~29 ; ヨハ 4 : 44 ; I コリ 1 : 23）。

それでも悪を行い続けたため、主は再び警告して言われた：「その石がだれかの上に落ちかかるなら、——頑な、主を信じない人は粉微塵にされる——死に至らせる裁きの石となる。」（参考 : ダニ 2 : 35 ; イザ 17 : 13）。

#### 五十七 「王子の婚宴」の譬え マタ 22 : 1~14

マタイの福音書二十二章の「王子の婚宴」の後半には礼服の着なかった客が追い出された記述があるため、「礼服の譬え」とも称する。

この譬えは「凶悪な農夫」に続いて、悪意を抱いてイエスを捉えようとする長老達に対する三つ目の譬えである。内容的にルカの福音書十四章十六節~二十四節にある「盛大な晩餐会の譬え」と似た所があるが、前者は聖なる宮で語られたのに対し、後者は一宴席での譬えである。場所と時間から考えると、両者は違うものである。前者の客の拒絶の語気も比較的強い。この事から見ると、彼らは極悪な反逆者で、前から叛く計画を持って、僕たちが来た時表したに過ぎなかった。

「王子の婚宴」の譬えの内容を次に示そう：

「天国は、ひとりの王がその王子のために、婚宴を催すようなものである。王はその僕たちをつかわして、この婚宴に招かれていた人たちを呼ばせたが、その人たちはこようと

しなかった。そこでまた、ほかの僕たちをつかわして言った、『招かれた人たちに言いなさい。食事の用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意ができました。さあ、婚宴においでください』。しかし、彼らは知らぬ顔をして、ひとりは自分の畑に、ひとりは自分の商売に出て行き、またほかの人々は、この僕たちをつかまえて侮辱を加えた上、殺してしまった。そこで王は立腹し、軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。それから僕たちに言った、『婚宴の用意はできているが、招かれていたのは、ふさわしくない人々であった。だから、町の大通りに出て行って、出会った人はだれでも婚宴に連れてきなさい』。そこで、僕たちは道に出て行って、出会う人は、悪人でも善人でもみな集めてきたので、婚宴の席は客でいっぱいになった。王は客を迎えようとしてはいつてきたが、そこに礼服をつけていないひとりの人を見て、彼に言った、『友よ、どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいつてきたのですか』。しかし、彼は黙っていた。そこで、王はそばの者たちに言った、『この者の手足をしぼって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』。招かれた者は多いが、選ばれる者は少ない」。

この譬えを内容に従って以下の通りに解釈した：

「イエスはまた、譬で彼らに語って言われた」：イエスはユダヤ人の長老達を戒めるため、まず「二人の息子」の譬えを彼らに語ってから、彼らは早く「何の権威によってこれらの事をするのですか。そうする権威をあなたに与えたのはだれですか」の弁論を終らそうとしたが、イエスはお許しにならなかった。「あなたがたはもう一つの譬えを聞きなさい」と言われて、彼らに語り続けた。彼らは既にイエスの詰問が分かっているが、悔改めなかったばかりか、イエスを捉えようとした。群衆達を恐れていたため、その場で控えただけである。彼らはまったく悔改めなかったので、イエスは「また譬えで」彼らを教えられた。

「天国は、ひとりの王がその王子のために、婚宴を催すようなものである。」：神の恵み或いは神と人との交流は聖書がよく宴席（イザ 25 : 6）或いは婚宴（イザ 61 : 10 ; 62 : 5 ; ホセ 2 : 19 ; エペ 5 : 32 ; II コリ 11 : 2）と譬える。

「王はその僕たちをつかわした」：これは王が第一回目に遣わした僕たちである——バプテスマのヨハネ（マタ 3 : 1, 2）、十二使徒（マタ 10 : 1~15）、七十二人の弟子（ルカ 10 : 1~20）など。「招かれていた人たち」：この時になって宴席に人を招くのではなく、文法と譬えの目的から考えると、前から知らせてあって、指定の日になれば、僕たちを遣わしただけである（参考：エス 5 : 8 ; 6 : 14）。だから、神が天地を創造されてから、もう預言者達を遣わして、各時代においてユダヤ人を恵みに預かるように召していたのである（ルカ 1 : 70）。しかし、招かれた人々は「来ようとしなかった」、彼らはこの恵みを得る気がないことを表している。

「そこでまた、ほかの僕たちをつかわした」：これは二回目に遣わした僕たちである。主が昇天なさってから召された弟子達で、彼らは五旬節の日にはまだ教会に入っていない、ステパノ、パウロ、バルナバなどの働き人を指す。彼らは「天国が近づいた」という事を

伝えるのではなく、「イエスの死と復活」を伝えた——「食事の用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意ができました。」これは一回目に遣わされた僕たちがまだ見ていないことで、彼らは「時が満ちた」事を伝え、人が罪を犯して神の国に入れない障害は、彼らが付けたイエスの尊い血によって除かれた。人には何の功績もなかったが、神の御前に通じる道はイエスによって開かれた（使徒 2 : 38、39 ; 3 : 19~26 ; 4 : 12、17、30）。「彼らは知らぬ顔をして、出て行った」：譬えの中に二種類の人を例に挙げて、「ひとりは自分の畑に、ひとりは自分の商売に出て行った」。即ち、地主と商人である。地主は自分の財産を頼りに（I テモ 6 : 17）、商人は金を儲けようとしている（I テモ 6 : 9 ; ルカ 14 : 18、19）。彼らは忙しいことを理由に、恵みを受けようとしなかった。昔から人々はこのようにして恵みを受けようとしなかったのである（イザ 65 : 2 ; エレ 6 : 16 ; 詩 81 : 10、11 ; マタ 23 : 37）。

「ほかの人々は、この僕たちをつかまえて侮辱を加えた上、殺してしまった」：「ほかの人々」は福音を憎む人たちである。真理に反抗する人は背面と正面からの二種類がいて、ある人は福音を憎まないが、世の金銭を愛するためこれを拒んでしまった。またある人は傲慢、自義によって真理に責められ、キリストに敵対するものとなってしまった。報せを携えてきた人を虐待する方法は三つある：暴行を加える（使徒 4 : 3 ; 5 : 18 ; 8 : 13）、侮辱を加える（使徒 5 : 40 ; 14 : 5、19 ; 16 : 23 ; 17 : 5 ; 21 : 30 ; 23 : 2 ; II コリ 11 : 23~25）、殺害する（使徒 7 : 58 ; 12 : 2）。

「そこで王は立腹し」：王の使者を虐待する事は王を侮辱する事である（サム下 10 : 1~5）。「軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし」：これは紀元七十年に、テトス軍長が率いるローマの軍隊を指す。彼らは「主の軍勢」ではないけれど、主の手にあつて、罪を懲らしめるのである（イザ 10 : 5 ; 13 : 5 ; エゼ 29 : 18~20 ; エレ 25 : 9）。「その町を焼き払った」：エルサレムは政治の中心都市であり（マタ 5 : 35）、主はその身に起こり得る事を預言されていた（マタ 23 : 38）。バビロン王はかつてこの町を滅ぼした事がある（列王下 25 : 9 ; エレ 39 : 8 ; 52 : 13 ; ネへ 1 : 3）——昔、占領された町はよくこういう運命に遭う（民 31 : 10 ; ヨシュ 6 : 24 ; 8 : 19 ; 11 : 11 ; 士 1 : 8 ; 18 : 27 ; 21 : 10）。イエスは再びこの譬えを通して、エルサレムが焼き払われる事を預言された。結果的に、紀元七十年にこの事が成就された。（参考：マタ 24 : 1、2）。

「招かれていたのは、ふさわしくない人々であった」：もし彼らに義を飢え慕う心があり、或いは小羊の婚姻に喜んで出向くならば、相応しくない事はないであろう。だから、王は僕たちに「町の大通りに出て行って、出会った人はだれでも婚宴に連れてきなさい」と言った。イエスはマタイの福音書八章十一節~十二節において、「多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、この国の子らは外のやみに追い出される」。ユダヤ人の不従順によって、異邦人に救いの機会を与える事となった（使徒 13 : 46 ; ロマ 10 : 1）。これらの預言は詩人、預言者たちが嘗て語ったが（詩 18 : 43、44 ; イザ 65 : 1）、ユダヤ人にとって、耳障りであった。（使徒 22 : 21、22）。

僕たちは王の命令に従って、「道に出て行った」：これはちょうどピリポがサマリヤ（使徒 8 : 5）、ペテロがコルネリオ（使徒 10 : 24）、バルナバがアンテオケ（使徒 11 : 22~24）、パウロがアテネに行って、人々に悔改め、福音を信じなさい（使徒 17 : 22）と伝えている事と同じである。「出会う人は、悪人でも善人でも」とは客の中にナタナエル、コルネリオ、或いは自分の律法のある善人達のような者がいて（ロマ 2 : 14；参考：ルカ 8 : 15）、取税人などの罪人もいる（詩 58 : 3、4；参考：I コリ 6 : 10、11）。このように、「みな集めてきたので、婚宴の席は客でいっぱいになった」。

この譬えの前半は福音を拒むユダヤの長老たちに対する審判と刑罰であり、後半は神の国に入る為の行いにおける警告である。天国の宴席に招かれたが、果たして資格を持っているのか？神は正確にすべての人々の善悪を見極められるからである（ヘブ 4 : 13）。

「王は客を迎えようとしてはいつてきた」：これは客のすべてが席に着いたことを表している。その時、王は、「そこに礼服をつけていないひとりの人を見た」：風習によると、礼服は王が賜る物で（参考：列王下 10 : 22）、——王の蔵にはたくさんの礼服或いは高価な服が満ち溢れていた。これは王の強さを表している。王から贈られた以上、その礼服を着て宴席に出向くのは、贈る者に栄光を帰すると同時に、見栄えもよい。言い換えれば、礼服を着ないのは王を軽んじて、侮辱する事になる。初めは王が優しい口調で「友よ、どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいつてきたのですか」と聞いて、その人に謝罪の機会を与えた。しかし、「彼は黙っていた」：たとえどんな理由と弁解があっても（参考：創 3 : 12、13；サム上 15 : 21）、彼らの過ちは「黙っていた」の事実に見られていた。「礼服」は信仰によって義とされる事（ロマ 3 : 22）、主が賜った新しき人——神にかたどって：真の義と聖とをそなえた新しき人（エペ 4 : 24）、また、キリストの義なる衣でもある（黙 19 : 7、8；ロマ 13 : 14）。義は信仰と聖潔である。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」（ヘブ 11 : 6）、また、「きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」（ヘブ 12 : 14）。「王はそばの者たちに言った」：今度は僕ではなく、使者である。これは天使を指している（マタ 13 : 41、49）。「この者の手足をしばって」：手の抵抗と足の逃亡が縛られた以上、一連の動作は全て出来なくなる（参考：使徒 21 : 11；サム下 3 : 34）。このように、天にある教会から追い出される（II テサ 1 : 9）。「そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」（ゼパ 1 : 7-8）。

最後に、イエスは「招かれた者は多いが、選ばれる者は少ない」を以ってこの譬えを終らせた。例えば：エジプトを出た時の六十万の民は、カレブとヨシュア以外は全部荒野で死んでしまった（民 14 : 22~30）；十人の探り人の中、選ばれたのはただ二人（民 14 : 23、24）、ギデオンは三万二千人を選んだが、出陣出来たのはただの三百人（士 7 : 3~8）；王宮に召集されたたくさんの女子の中、選ばれたのはエステル一人である（エス 2 : 17）。網を撒く譬えの中にあるように、岸に上げた時、中身を選ぶのである。

だから、主にある兄弟達は常にこれを心に留め、主からの恵みを無駄にせず、完全と聖潔であるように慎みましょう！

#### 五十八いちじくの木の譬え マタ 2 4 : 32~36 ; マル 1 3 : 28~32 ; ルカ 2 1 : 29~33

エルサレムが滅ぼされ、主の再臨に関する預言は、イエスの話としてマタイの福音書二十四章に書かれている。「いちじくの木の譬え」はその中の一つである。

「いちじくの木からこの譬えを学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない。天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。」(マタ 2 4 : 32~36)。

「いちじくの木が柔らかになる」：ルカの福音書は「いちじくの木を、またすべての木を見なさい……」とある。夏の近い事を予知するには、いちじくの木とその他の木の枝を見れば分かる。同じように、「すべてこれらのことを見たならば——十五節~二十八節にある天災と地震、もう時が近づいていることを知るであろう……」しかし、「その日、その時」は、だれも知らない。「いちじくの木」：特別に選ばれたイスラエルの民達(申 1 4 : 2 ; 4 : 6~8) ; 「枝が……の時」：イスラエル国の復興 ; 「夏」は暑い季節で、主の再臨と審判を譬えている ; 故に、「人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」。原文には主語となる「人の子」はない。ルカの福音書二十一章三十一節には「神の国が近いのだとさとりなさい」の「神の国」が主語なのでは？

「この時代は滅びることがない……」：「時代」は原文では人々の生活を指すから、「この時代の人」と訳すべきであろう。主の再臨の緊迫性を強調しているからである(参考：マタ 1 0 : 23 ; 1 6 : 28 ; 2 3 : 39)。「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」：天地は新しい天と新しい地に変わる事であって(参考Ⅱペテ 3 : 7~13)、なくなるのではない。「その日、その時は、……ただ父だけが知っておられる」：「その日」とは主が再び来られて、裁きを行う日であり、「その時」の原文は「何時間目」で、その来られるのは盗人のようで前もって知り得ない事を意味する(Ⅰテサ 5 : 2 ; Ⅱペテ 3 : 10 ; 黙 3 : 3 ; 1 6 : 15)。故に、「だれも知らない」と言って、人々に常に目を覚ますように戒めている。「子も知らない」、子と父は一つであり(ヨハ 1 0 : 30)、ただ人としてこの世にいる間は、己を謙って、完全に父に服従しているから、「ただ父だけが知っておられる」と言われた。

#### 五十九 盗賊の譬え マタ 2 4 : 43, 44 ; ルカ 1 2 : 39, 40

盗賊はよく真夜中に人々が眠りについてから動き出す。弟子たちに常に目を覚ましておくように語られた譬えである。

「家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら、目をさまして、自分の家に押し入ることを許さないであろう。だから、あなたがたも用意をしないなさい。思いが

けない時に人の子が来るからである。」(マタ 2 4 : 43、44)。

「家の主人は、盗賊がいつごろ来るかわかっているなら……」：これは主の再臨は真夜中の「盗人」(Ⅱペテ 3 : 10) のようで、人が全く気づかない内に突然来られる事を警えている。盗賊を防ぐには常に目をさまして、用意していなければならない(Ⅰテサ 5 : 4~6 ; 参考 ; 黙 1 6 : 15 ; マタ 2 5 : 10 ; 2 4 : 42~44)。

## 六十 家の僕の喩え マタ 2 4 : 45~51 ; マル 1 3 : 33~37 ; ルカ 2 1 : 34~36

マタイの福音書のこの警えは信者である私達に常に目をさまして、用意するように語られた警えである。

「主人がその家の僕たちの上に立って、時に応じて食物をそなえさせる忠実な思慮深い僕は、いったい、だれであろう。主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。よく言うておくが、主人は彼を立てて自分の全財産を管理させるであろう。もしそれが悪い僕であって、自分の主人は帰りがおそいと心の中で思い、その僕仲間をたたきはじめ、また酒飲み仲間と一緒に食べたり飲んだりしているなら、その僕の主人は思いがけない日、気がつかない時に帰ってきて、彼を厳罰に処し、偽善者たちと同じ目にあわせるであろう。彼はそこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。」

この忠実かつ思慮深い僕は教会の良い指導者を警えている。「主人」は主イエスを警えている。家の僕の任務は「僕たちの上に立って、時に応じて食物をそなえさせる」。これは用意して忠実に神の家を牧養する事を表している。「主人が帰ってきた」とは主の再臨の警えで、「そのようにつとめているのを見て……」、これは主がいつ来られても用意できている状態を表す。そうすれば、この僕はさいわいである。「悪い僕」とは忠実に教会に奉仕していない指導者を指す。悪い僕には三つの間違いがある：(1) 主人は帰りが遅いと思う；(2) 仲間をたたく；(3) 酒飲み仲間と一緒に飲み食いする。これは目をさましていない(Ⅱペテ 3 : 3、4、8、9)、高ぶり(Ⅰペテ 5 : 3 ; 使徒 2 0 : 29、30)、私利私欲(Ⅱペテ 2 : 1~3、12~15 ; ユダ 4、11、12) の事である。「思いがけない日……」主は彼が目をさまして、これらの事をしていないとき、突然帰ってきて、「彼を厳罰に処し」、さらに「偽善者たちと同じ目にあわせる」、ルカの福音書十二章四十六節は「不忠実なものたちと同じ目にあわせる」と書いてある。

ルカの福音のこの警えは若干違う。

「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意しなさい。その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから。これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」。

「よく注意しなさい……」：霊界が混乱するにつれて、人の心の平安も得られない。だから、人々の心が誘惑され、「放縦や、泥酔や、世の煩い——目の前の快樂と生活の煩い

によって心が鈍っている——心が麻痺している」；だから、目をさまして祈らないと、「その日がわなのように臨む」。「地の全面に住むすべての人」：信者だけでなく、世のすべての人の上に臨む。だから、クリスチャンは「絶えず目をさまして、祈る」、これらの災難から逃れて、「人の子の前に立つことができるよう」にしなければならない（ロマ 14：4；Ⅱコリ 5：10；Ⅰヨハ 2：28；Ⅰテサ 3：13；Ⅱペテ 1：11）。

#### 六十一 十人のおとめの譬え マタ 25：1～13

イエスはマタイの福音書二十五章において、世の末の日の裁きの状況を「十人のおとめ」、「僕に財産を預ける」、「大審判」の三つの譬えを以って弟子たちを教えられた。二十五章の一つ目の譬えは「十人のおとめ」で、その内容は次の通りである：

「そこで天国は、十人のおとめがそれぞれあかりを手にして、花婿を迎えに出て行くのに似ている。その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれのあかりを整えた。ところが、思慮の浅い女たちが、思慮深い女たちに言った、『あなたがたの油をわたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから』。すると、思慮深い女たちは答えて言った、『わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう。店に行って、あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう』。彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。そこで、用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください』と言った。しかし彼は答えて、『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と言った。だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。」

この譬えを内容にしたがって、以下の通りに解釈した：

「その時」：イエスはこの譬えを語られる前に、二十四章において、エルサレムで紀元七十年に起こる滅びについて預言された。同時に、世の末に主が再び来られる時の兆し、裁きなどについて言及し、自分の主人は帰りが遅いと心の中で思い、その僕仲間をたたきはじめ、また酒飲み仲間と一緒に食べたり飲んだりする悪い僕は偽善者達と同じ目にあわせると言われた（マタ 24：48～51）。故に、「その時」とは主が再び来られた時の大審判である。

「十人」：ユダヤ人には十人を一組にする風習がある（参考：ルツ 4：2）。だから、「十人」には特別な意味はない。「おとめ」：ヨハネが幻の中で見たように、神と共に聖なる山にいる——神の教会は永遠に乙女のまま主に従う——完全に聖潔な救われる聖徒——十四万四千人のことである（黙 14：1～5）。また、神の教えで清められ、何のしみとしわもな

い完全な神の教会（エペ5：26、27）だけが、清いおとめとして、キリストにささげられるのである（Ⅱコリ11：2）。

「あかりを持って」：東洋では古今、夜に婚礼を挙げる風習があつて、あかりで道を照らす必要がある（参考：エレ25：10；黙18：23）。ユダヤ人の夜の婚礼は、新郎が友達と一緒に新婦の家に出迎え（参考：ヨハ3：29；士14：11）、その時は盛大な宴席を持って歓迎され、その後は新婦が友達と一緒に家を出る（参考：詩15：14、15）、この時はあかりを持った乙女達と一緒に行列に加わり、客と一緒に婚宴に参加する（参考：雅3：11）。

「その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であつた」：思慮の浅い人と思慮深い者が半々と考えるのではなく、あかりを持って新郎——再臨の主イエスを迎える資格のある聖徒の中に、思慮の浅い者と思慮深い者が両方いると考えるべきである。思慮深い者はあかりと一緒に油も用意するが、思慮の浅い者はあかりを持っているが、油を用意しなかった。「油」は「聖霊」を象徴する（イザ61：1～3；ヘブ1：9；Ⅰヨハ2：20、27）。古代のユダヤは陶器のあかりにオリーブ油を入れて芯を油の中に置いて、灯台の上にあかりをのせる。或いは出かける時に持つ。あかりをつけるのはその光を必要とするからで、光を放せないあかりは無用なものである（マタ5：15）。油が聖霊を象徴するなら、「あかり」は「信者」であり、油から発する「光」は聖霊によって人々の前で現れる良い行い——愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制の聖霊の実である（ガラ5：22、23）。このように、あかりとしての働きを成し、天の父に栄光を帰する聖徒となるように。

「花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。」：主の再臨は人の立場から見れば、「遅れた」と思うが、ヘブル人への手紙には「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。」（ヘブ10：37）。これは主の愛によるもので、「ひとりも滅びることがない」（Ⅱペテ3：9）ようにと思つて、遅くしたのである。しかし、人は「遅れた」と誤解する。故に、思慮の浅い者だけでなく、思慮深い者まで「居眠りして、寝てしまった」——警戒心を失ってしまったのである。これは主がゲツセマネで祈られた時、ペテロ達に「心が熱しているが、肉体が弱いのである」（マタ26：40、41）と語られた事を連想させられる。事実上、肉体を持った人間は皆弱いのである。肉体が弱いと知っている以上、もっと目をさましていなければならない。

聖霊を持っていながら、その実を結ぶ事が出来なければ、思慮の浅い愚かな女と同じになってしまう。思慮深い者は一時的に肉体の弱さがあつても、謹んで用意しているので、主の再臨が遅れても、どんな時代においても、たゆまずに聖霊の実を結んでおける（ルカ12：35～37）。

「夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。」「夜中」は暗い世界を指す——暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。真夜中の世界の世界である（イザ60：2；ロマ13：12）——これは主が人々の思いがけない日に来られる時である（マタ24：44、50）。瞬く間に、最後のラッパの響き声と一緒に、主が来られるのだ。救われる信者が雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるの

である。(I コリ 15 : 52 ; I テサ 4 : 17)

彼女たちは「さあ、花婿だ」の呼び声でみな起きて、それぞれあかりを整えた時、思慮の浅い女たちは自分のあかりの油が少なく「消えかかっている」事に気づいた——聖霊に満たされていない、それに伴う行いもない、死んだ信者となってしまうのである(ヤコ 2 : 14、17、18、20、22、26)。それだけではなく、彼女たちはもっと愚かな行動に出た。彼女たちは思慮深い女たちに油を分けてほしいと頼んだ。聖霊の源は神にあり、人に求めて得られる物ではない。故に、真心を以って神に追い求めるべきである(ルカ 11 : 8)。

春の雨の聖霊が降り注ぐ今(ゼカ 10 : 1)、恵みを求める時であり、喜ばれて、救われる日である(II コリ 6 : 2)。また、信者が聖霊の実を「用意」して、主の御前に捧げる時である。主が来られた時、用意出来た花嫁のように聖潔で——光り輝く、汚れのない麻布の衣を着た義の行いのある信者は(黙 19 : 7~9)、「花婿と一緒に婚宴のへやにはいり」——主と一体となり、永遠に天国に住むであろう(I テサ 4 : 17)。そして「戸がしめられた」——救いの門が閉められる日は必ずあって、永遠に開いているわけではない。戸が閉められてから、叩いても遅い。愚かな女たちは戸が閉められてから、「ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください」と言った。しかし彼は答えて、「はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない」と言う。だから、嘗ては主の御名によって預言し、悪霊を追い出し、多くの力ある業を行っても、全く無用である。主は彼らに「あなたがたは全く知らない」或いは「不法を働く者どもよ、行ってしまえ」と言うであろう(マタ 7 : 22、23)。主を迎える資格がある信者なのに、もし天の家の外に締め出されたら、哀れではないか？

「だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。」。私達は、主がこの罪惡に満ちた暗い世界で、人々が気づかない時に(ルカ 12 : 40)、夜中の盜賊のように突然やってくる事を知っていなければならない(II ペテ 3 : 10)。だから、イエスが警告して言われた：「あなたがたが放縱や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから。これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」。(ルカ 21 : 34~36)。

## 六十二 財産をあずける譬え マタ 25 : 14~30

イエスがマタイの福音書二十五章において、世の末の状況について、三つの譬えを以て弟子達に教えられた。その中の二つ目は「僕に財産を預ける譬え」である。その内容は次の通りである：

「また天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて、旅に出た。五タラントを渡された者は、すぐに行って、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。二タラントの者も同様に

して、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラントを渡された者は、行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰ってきて、彼らと計算をはじめた。すると五タラントを渡された者が進み出て、ほかの五タラントをさし出して言った、『ご主人様、あなたはわたしに五タラントをお預けになりましたが、ごらんとおり、ほかに五タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。二タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに二タラントをお預けになりましたが、ごらんとおり、ほかに二タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。一タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます』。すると、主人は彼に答えて言った、『悪い怠惰な僕よ、あなたはわたしが、まかない所から刈り、散らさない所から集めることを知っているのか。それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであった。そうしたら、わたしは帰ってきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであろう。さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』。

「十人のおとめの譬え」は主の再臨を待ち望む信者が聖霊と行いを用意し、心に霊の命を持ち、聖霊に満たされてその実を結ぶ事によって初めて主のために働く事が出来る。「財産を預ける譬え」にあるように、主が再び来られて、裁きを行う時に、奉仕において忠実か否かがはっきりと現れるのである。

「財産を預ける譬え」を内容に従って以下の通りに解釈した：

「ある人」は「主イエス」を指す。イエスは父なる神のもとから肉体となってこの世に来られた（ヨハ 1：14）。彼は十字架において救いの働きを全うされ、世におられた時に預言されたように、復活して四十日後天に上げられ、父のもとに帰られた。これを「旅に出た」と譬えた。旅に出たなら必ず帰ってくる日が来る。これは主の再臨を指す。

「僕」は狭い意味から見ると、「専ら主に仕える」僕たちである（ロマ 1：1；ヤコ 1：1；Ⅱペテ 1：1；ユダ 1；黙 1：1）。しかし、広い意味から見ると、水と霊のバプテスマを受け、恵みによって主に帰した信者たちは皆主の僕である（参考：黙 1：1；ルカ 4：18、19）。

「自分の財産を預ける」：主人は「タラント」を僕たちに預けた。このタラントは聖霊から来た賜物であると表わす。このタラントは僕の数に従って均等的ではなく、「それぞれ

の能力に応じて」与えられたのである。これは同じ聖霊から賜物を得ても、皆それぞれ違うのと同じである。各人の信仰と程度も違う（ロマ12：6）。教会全体は全備の賜物を持っているが、各人において、知恵の言葉、信仰、いやしの賜物、力あるわざ、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解く力など異なった賜物を神のご自分の意思のままに与えられる（Iコリ12：4～11）。ローマ人への手紙十二章六節～十節には、預言、奉仕、教え、勧め、寄付、指導、慈善、愛などが挙げられている。エペソ人への手紙四章十一節には：使徒、預言者、伝道者、牧師、教師とあるが、これは様々の賜物の名称に過ぎない。どれも聖徒たちを整えて、キリストの体——神の教会を建てるには必要な賜物である。

範囲を拡大して言うと、これら霊の賜物に限らず、富、名誉、才能、知識、経験……なども神はそれぞれの才能に応じて与えられるのである。だから、霊の賜物と同様、主に仕え、奉仕の仕事に善用すべきである。

「ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えた」：これらの五タラント、二タラント、一タラントの数に、特別な意味はないと思う。この三人を以って信者全体を代表し、この数は賜物の大小を指しているに過ぎない。

「旅に出た」：この文体から見ると、主人はタラントを渡してからすぐに出かけた。歴史から見ると、イエスが弟子達に聖霊と賜物と権威を与える約束をしてから（ヨハ20：21～23）、昇天され（使徒1：4、10）、五旬節に初めての聖霊の降臨までの時間は非常に短かった（使徒2：1～）。

僕たちにタラントを渡した目的は何であろう？これを資本金にして商売をしてほしいのである。故に、五タラントを渡された者は「ほかに五タラントをもうけた」、二タラントを渡された者も「ほかに二タラントをもうけた」。これは神の賜物を活用できた信者達である。しかし、一タラントを渡された者は「行って地を掘り、主人の金を隠しておいた」。彼は神の賜物を活用しないばかりか（参考：マタ5：15）、それを隠してしまった信者である。

「だいぶ時がたってから」：これは十人のおとめが花婿を待つ間に居眠りしてしまったような短い時間ではない（マタ25：5）。イエスがオリブ山で天に上げられて今に至って（使徒1：11）、二千年余り経っているが、まだ来られていない。これは非常に長い間である。しかし、主は必ず来られる事を心に留めよう。彼が帰って来られた途端に僕たちと「計算をはじめた」。これは主の御前において、各人の信仰、行い、奉仕に応じ、裁きを受け、その善悪に従って報われる（IIコリ5：10）。

お金をもうけた二人の僕は、計算する時の言葉と態度は注意するに値する。彼らは「ご主人様、あなたはわたしに〇〇タラントをお預けになりましたが、ご覧の通り、ほかに〇〇タラントをもうけました」と言って、主人の前において、堂々とその成果を述べていた。一人の信者として、もし主の裁きの前に立ち（Iテサ2：19）、或いは人を主の御前に導き、その働きが無駄ではなかった（IIコリ1：14）、ただ賞与を待つだけと言えるならば、どんなに素晴らしいであろう（IIテモ4：7、8）。また、僕の「あなたはわたしに〇〇タラントをお預けになりました」の言葉に留意すると、その賜物が主から来る事と、主が共に働い

てくださった結果を表している（Iコリ15：10）。だから、奉仕において、もし成功を収めても、自分の栄光に帰してはいけない。この全ては主が共に働き、主によって成し遂げられた。私達はただふつつかな僕に過ぎない、故に、すべての栄光を主に帰すべきである。

このような僕に対して、主人は答えて言われた、「良い忠実な僕よ、よくやった。」。主人はこの僕のことを「良い」と「忠実」の言葉を以って表わした。これは僕が主人を愛し、奉仕において良い行いがあり、主人に認められた事である。

「あなたはわずかなものに忠実であった」と「小事に忠実な人」（ルカ16：10）は非常に大事である。主人は「多くのものを管理させよう」と言うのは、「自分の全財産を管理させる」（マタ24：47）。さらに、「主人と一緒に喜んでくれ」と、これは僕の身分として主人に仕えるのではなく、「友人」として主人を迎える宴席に参加し、主人と同じ楽しみ—天国の恵み（ヨハ15：15；ルカ12：37；参考：黙3：20）を受けられる。

しかし、一タラントを預けた僕は違っていた。彼は主人の財産を浪費する管理人ではなかったが（ルカ16：1）、放蕩息子のように財産を使い果たすわけでもない（ルカ15：13）、また、哀れむ心のない一万タラントの負債のあった悪い僕のようにもなかった（マタ18：24）。彼は主人から預かった金を活用しなかっただけで、「悪い怠惰な僕」となってしまった。この事から考えると、自分の信仰だけを保って、その持っている賜物を活用し、人を主の御前に導かなければ、主に対する「忠実」がなくなってしまう。彼は自分の過ちを隠そうとして、主人を「酷な人」で、「まかない所から刈り、散らさない所から集める」と批判した。主人を冷酷な人だと思っていた。彼は自分の心の中で抱いていた間違いの観念をそのまま表した。自分がその資本を損してしまうのではと、「恐ろしさのあまり」、主人から預かった一タラントを地の中に「隠しておいた」。これはちょうど、人を主の前に導いた事によって、自分が見捨てられるのではと思っている利己的な信者と同じである。この時、主人も僕の批評を引用して言われた、「あなたはわたしが、まかない所から刈り、…わたしは帰ってきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであろう。」主はその賜物を活用して、人を導く奉仕を重視し、それによって、その人が忠実かどうかを判断されるのである。

その悪い僕の結末は何だったのであろうか？彼は持っている物を取り上げられ、外に追い出されてしまった。だから、「その一タラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。」さらに、「この役に立たない僕を外の暗い所——地獄に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」。

次にまた新旧約聖書から参考として例を挙げてみよう：

エサウは長子の特権を軽んじて、それを売ってしまったため、恵みも失ってしまい、その後は泣きながら父に懇願したが、すでに遅すぎた（創25：29～34；27：34～40）。

サウルが健康で美しく、イスラエル人の誰よりも背が高かった優秀な人材として、最初

の王に選ばれた。しかし、彼は神の命令を守れずに罪を犯したため、王位から追い出され、結果的に三人の息子と一緒に戦死してしまった（サム上9：2；10：23；13：13；15：9～23；16：1、13；31：2～6）。

ユダはイエスが自らお選びになった十二人の弟子の中の一人であったが、忠実に仕えなかったばかりか、イエスを裏切ってしまったため、結果的に哀れな死に方をしてしまった（ヨハ12：6；マタ27：3～5；使徒1：17～19）。

以上の例から考えると、聖霊からの賜物を軽んじてはいけない。本分を尽くして福音の為に努め、主から託された使命を果たし、地の果てまで福音を宣べ伝えて主の再臨を迎えよう。

### 六十三 羊をより分ける譬え マタ25：31～46

イエスはマタイの福音書二十五章において、世の末の裁きの状況を三つの譬えを以って弟子達に教えられた。一つ目は「十人のおとめ」、二つ目は「財産を預ける譬え」、三つ目は「羊とやぎを裁く」、これには将来の審判についての預言で、譬えではないと言う説もあるが、私達はこれを譬えであると認識した。その内容は次の通りである：

「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、やぎを左におくであろう。そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のあるときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸ののを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいつてしまえ。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいているときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のあるときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである』。そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』。そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。これらの最も小さい者の一人にしなかったのは、

すなわち、わたしにしなかったのである』。そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」。

この譬えを内容に従って以下の通りに解釈した：

「羊をより分ける譬え」の中に、「すべての国民」についての見解が違うため、いくつかの解釈がある。

一、ユダヤ人と異邦人、クリスチャンも含まれる。二、クリスチャン。三、異邦人。「すべての国民」の言葉は原文において、よく「異邦人」として使われる。「十人のおとめ」は信者を譬え、「財産を預ける譬え」は教会の指導者を譬える。信者がキリストの裁きに参加するため（Ⅰコリ6：2）、「羊、やぎ」は異邦人の中に、クリスチャンに対して愛を行ったかどうかの二種類の人という説がある。しかし、私達は「世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」、「正しい者たち」、「主よ」などの言葉から、主の御前に集められたのはすべて信者で、王は「愛の行い」を審判の基準にしていると考え（マタ16：27；ロマ2：6；Ⅱコリ5：10；黙20：12～15；ガラ5：6；Ⅰヨハ4：7）。

「人の子」はイエスご自身を指す。彼は人としてこの世に来られた時は卑しい者であったが（イザ53：2、3）、再臨の時は福音が全地に宣べ伝えられたので（マタ24：14）、「栄光の中に」大いなる力と栄光を持って（マタ24：30）、「御使たちを従えて来る」。卑しい者から栄光のある者になった。その時、「その栄光の座について」王として、裁きを執り行う（マタ16：27；参考：黙19：16；17：14）。

「すべての国民をその前に集める」：「すべての国民」は原文では「異邦人」としてよく使われるが、ここでは、主を信じない異邦人ではなく、すべての国民の中から選ばれた信者を指す（使徒15：14）。これらの信者は主の再臨の時に、雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会う（Ⅰテサ4：16、17）。

その時、主はこれらの信者を羊飼いが羊とやぎをより分けるようにするであろう。「羊を右に、やぎを左におく」。牧場において、羊とやぎと一緒に飼われる事はよく見かける。羊は色が白く、おとなしいのに対して、やぎは黒く、喧嘩好きのため、夜になると別々の檻に入れられる（参考：創30：32；エゼ34：17）。信者は主にあって一つの群として（ヨハ10：16）、羊飼いいエスの御前には裸であり、あらわにされている（へブ4：13）、主は全ての人を知り、その心も知っておられる（ヨハ2：24、25）。「羊」は「やぎ」より価値があり、「右」は「左」より尊い。だから、右に置かれるのは羊で、愛をもって善を行う完全な信者として、「正しい者」と呼ばれた（37；Ⅰヨハ3：7）。しかし、左に置かれたやぎはクリスチャンと称しながらも愛のない信者である。

主は右にいる者に対して、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。」と言われた。父なる神は審判権をイエスの手に委ねても、彼は自分の意思にではなく、神の御旨に従うばかりである（ヨハ5：22、30；8：16）。この「御国」は父なる神が用意されたもので（ヨハ14：

2、3；ヘブ11：16)、また「祝福され」とは、ただで「受け継がれる」恵みである。彼らの行った「わたしに食べさせ、飲ませ、着せ、見舞い、尋ねてくれた」事のすべては、哀れみ、慈愛、己を捨て、善を好む美德の代表であり、愛をもって兄弟姉妹に仕える事である。主は人を愛する為この世に来られたのだから(ロマ15：3)、信者は彼を模範として見習うべきである(ピリ2：4、5)。これの兄弟姉妹をもてなし、困っている孤児や、やもめを見舞い(ヤコ1：27)、貧しい兄弟を見て、哀れみの心を閉じない(参考：Iヨハ3：17) 信者は「正しい者」と呼ばれるのである(ヤコ2：17、18；ガラ5：6；Iヨハ4：20)。正しい者は答えて言った、「主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ……」。彼らは主に賞賛されて、びっくりしたのである。兄弟を愛する事を尽くすべき本分だと思い、報われるとは思わなかったため、自分の行った善に全く気がつかなかった。主は彼らの行いを肯定して言われた、「あなたがたによく言うておく」、また続いて、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」。私たちの「兄弟」は誰なのか？父の御旨を行う者である(マタ12：48～50；参考：マタ28：10；ロマ8：29；ヘブ2：11)。故に、主の中にある卑しい、貧しい、軽んじられる者は「最も小さい者」である。主は今この世はいない、しかし、「ひとりの幼な子」或いは「小さい者のひとり」に愛を行ったならば、間接的に主に行う事になる(マタ18：5；10：40～42；参考：使徒10：2～4、31；Iテモ6：17～19；ヘブ6：10)。

「左にいる人々」：彼らはクリスチャンと言いながら、愛を行わなかったため、「のろわれた子ども」と宣告された。「祝福」は神からであるが、「のろい」は自業自得である(参考：詩37：22；Iペテ2：8；ロマ2：5、6)。「わたしを離れて」：主は名だけで実の伴わない者に対して、自分から離れろと命じられた(ルカ13：27)。「永遠の火にはいつてしまえ」：永遠に続く火の中で、虫が死なず、火も消える事のない苦痛の地獄である(黙20：10；マル9：44)。そこは「悪魔とその使たちのために用意されている」所である(IIペテ2：4)。信者がもし主に従わず、悪魔に従うならば、そこに投げ込まれてしまうのである。主は彼らに愛のない事を指摘して言われた、「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず……」。彼らは正しい者と正反対で、愛を行わないばかりか、悔改めもしない。その過ちを認めないで言った、「主よ、いつ、あなたが空腹であり……わたしたちはお世話をしませんでしたか？」(参考：Iヨハ1：8～10；ヤコ4：17)。彼らは兄弟の苦しみをみても、哀れむことをしない。目に見える兄弟を愛さないで、目に見えない神を愛する事は出来ない(Iヨハ4：20；参考：Iヨハ5：1)。

結果、愛を行わない者は裁きを受けてから、永遠の火の湖に投げ込まれ、「永遠の刑罰」を受け(黙20：11～15)、正しい者は「永遠の命」に入るのである。